

# 通類編

一周年誌念編

昭和二年八月二十八日印刷  
昭和二年九月一日發行





安く賣る店 買ひよき店

**白木屋**

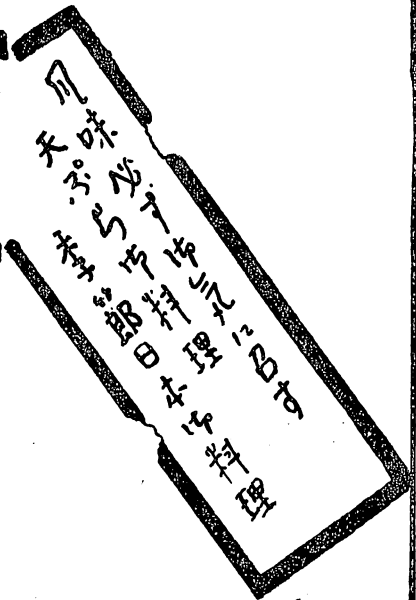
大阪 堺筋

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を



# 吉又屋會食堂



道頓堀戎ばし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町  
京都支店 木屋町ドンブリ橋





初枝

まろくろ  
つくとろ  
りよ

昭和二年九月一日發行

道頓堀

(二周年紀念)

第十二輯・九月號

口 ◇浪花座二番目「乳房榎」實川延若の麥川重信の亡靈◇延若の下男正助◇延若の辯三次(三役早替り)◇阪東壽三郎の磯貝浪江◇中座二番目「緋鹿子地獄」中村扇雀の手代清吉◇一番目「謎帯一寸徳兵衛」中村扇雀の大島團七と阪東一鶴のお辰◇中幕「雲仙岳」扇雀の松倉九一郎、中村成太郎與女中お幸、一鶴の田中藤作  
寫 ◇松竹座の九月「保名物くるひ」林長三郎の保名◇角座で旗擧げをする昭生座の幹部連等小織、梅島、加藤、松本、高田、東、米津◇辨天座に奮闘する新潮劇の山口、三好、小笠原の握手

棧敷手帖

久能龍太郎 二

理窟のない芝居

入江來布 四

故人を憶ふ

高原慶三 七

偶感 二三

大平野虹 三

乳房榎覚え書

高谷伸 四

「乳房榎」早替りに就て

實川延若 六

乳房榎 (芝居物語)

松本泰三 二〇

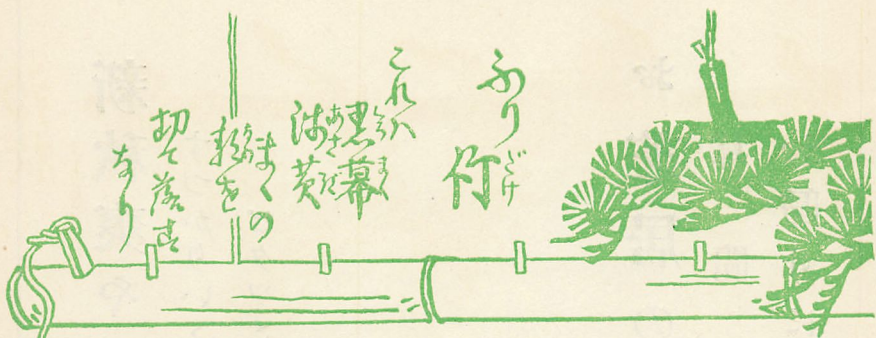
伎藝座を見て

高安吸江 二六

伎藝座管見

大西利夫 二六





保名物くるひに就て

食満南北三

芝居の秋 (俳句)

川尻清潭三

喫煙室

高橋蓼雨三

怪談「雨の古沼」

行友李風三

役者商賣

梅島昇三

車窓漫語

加藤精一三

東都劇信

吉田暎二三

淺黄外 (川柳)

三田米吉三

樂屋噺

綿貫六助三

緋鹿子地獄 (芝居小説)

長島黎夢三

松竹座九月上演

保名物くるひ 歌詞

食満南北三

角座九月上演

戯曲きもの二幕

段春人三

□各座九月興行役割一覽

一周年を迎へて  
芝居スケッチ

姥谷生  
大塚克三

# 新秋爽やかな候！

すつかりいゝ氣持になつたお芝居氣分に

ピタツと適つた自慢の献立………ぜひ御會食を。



## 梅 圓

### お芝居の

### 幕間

### お歸りには

お芝居での御食

事は食堂にて

おかへりには白

鷹にて一寸一ぶ

く江戸すしを

## 中座食堂

本店 大左衛門橋北一丁  
電話南六二二七番

# スキナ脂取紙

あぶら

好評！ 好評！！

秋草茂り、虫鳴く聲？

月清き秋となりました。

皆様方に御愛用を願つて居ります、評判の

『スキナあぶら取紙』で

お顔の脂肪を、サツト拭い取り

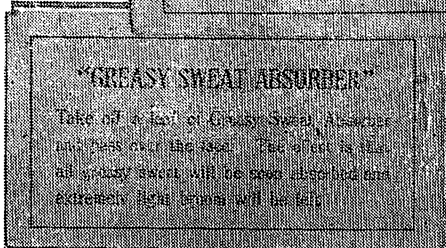
清々しい気持ちにする本品は

道頓堀の各座、及び各地化粧品店に販賣せり

お買求めの節は『スキナ』と御指定を乞ふ



現品縮圖  
スキナあぶら取紙



本 舗

ス キ ナ ナ 屋 號

中 田 商 店

大 阪



會旗優勝旗

神戸市楠社西門

劇場幕幟

梅原商店

綴帳フラー

電話元町一六一五番

# 東西く

醤油は是非、

西區百間堀の

ますだやへ、

ますだやは醸造元で

直接問屋小賣屋の手を経ず

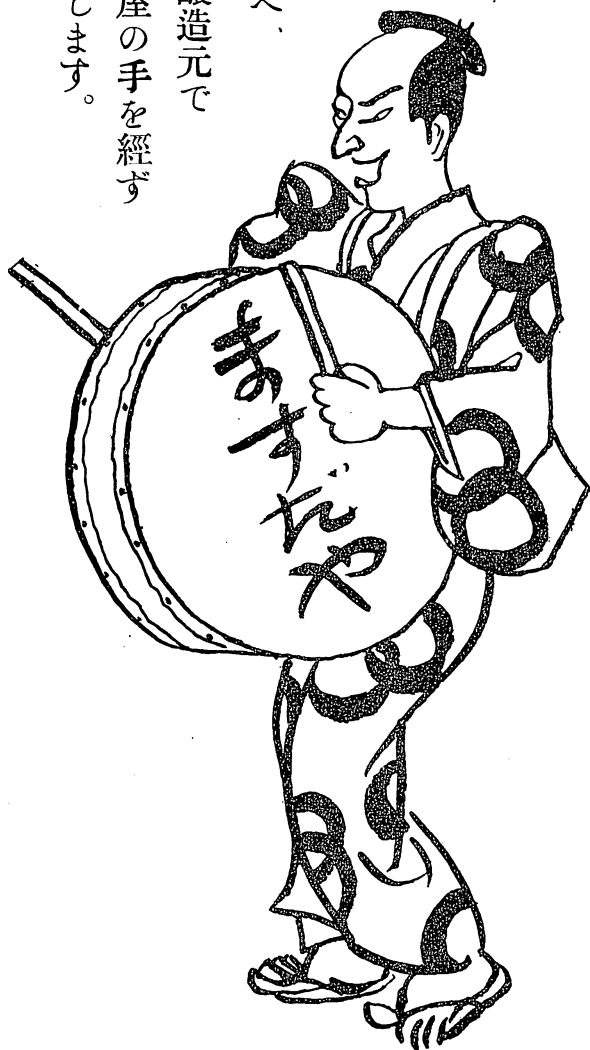
皆様へ配達致します。

味はおいしく

品は上等、そして価格は安い、三拍子揃ふたますだや醤油を御用命御使用願ひます。

電話新町四六七番又は西區薩摩堀（通稱百間堀）ますだや宛御一報下されば早速

店員參上御伺ひ申します。



優秀の技術と迅速が當館の有つ

唯一の誇りです。

御散索の折にせひ御立寄りを。

高津郵便局東

山崎寫眞館

電話南四二四四番



るさ化畫映隨精の學文西東

▶ 形花の戰畫映季秋 ◀

蒲田撮影所昭和二年度秋季超特作映畫、城戸四郎總指揮  
菊池寛原作總監督 島津保二郎監督  
近藤經一映畫化

海の勇者

鈴木傳明、松井千枝子 主演 オールスター  
キャスト

蒲田撮影所昭和二年度秋季超特作映畫、池田義信監督  
佛國文豪モウパッサン不朽の名作

女の一生

栗島すみ子主演、オールスターキャスト

松竹キネマ提供

# 貸衣裳

小道具  
小切



## 松竹衣裳部

本店

大阪市南區久左衛門町八番地

電話 南 四一八八番

東京支店

東京市淺草區並木町十五番地  
電話 淺草 五五九九番

素人演藝會 春秋溫習會

宴會の催物 婚禮の衣裳

其他一般の衣裳を多少に拘らず御利用下さい  
御來客の御相談に應じ御便利よく取計ます



怪 談 乳 房 榎 五 基

實 川 延 若 之 菱 川 重 信 之 亡 靈 (三 役 早 替 り)

浪 花 庄 九 月 ・ 關 西 大 歌 舞 伎





幕 五 榎 房 乳 談 怪

---

助 正 男 下 の 若 延 川 實

---

伎 舞 歌 大 西 關 ・ 月 九 の 座 花 涙





幕 五 榎 房 乳 談 怪

次 三 鱗 の 若 延 川 實

依 舞 歌 大 西 關 ・ 月 九 の 陸 花 浪





幕 五 榎 房 乳 談 怪

江 浪 貝 磯 の 郎 三 壽 東 阪

佐 舞 歌 大 西 關 ・ 月 九 の 座 花 演





場二 獄地子鹿緋 作雪窈森大

吉清代手の雀扇村中

劇團審雀扇村中・月九の座中





幕 三 衛兵徳寸一帯謎 日番一

辰おの鶴一東阪と七團島大の雀扇村中

劇團雀扇村中・月九の座中





幕 一 岳 仙 雲 幕 中

作藤中田の鶴一と幸おの郎太成と郎一九倉松の雀扇

劇團雀扇村中・月九の座中





ひるく物名保の座竹松

演助部劇樂竹松・名保の郎三長林

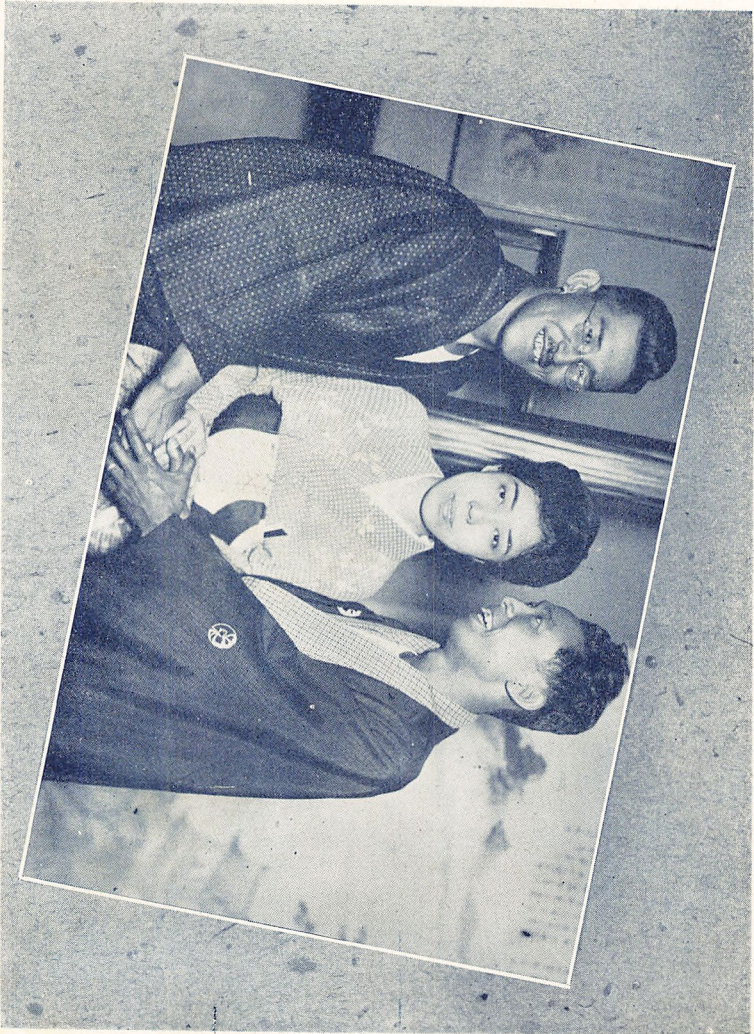




新組織に喜ぶ昭生座の幹部連

梅島昇 加藤精一 小織桂一 (りよ左下)  
東愛子 米津左喜子 高田亘 松本泰輔



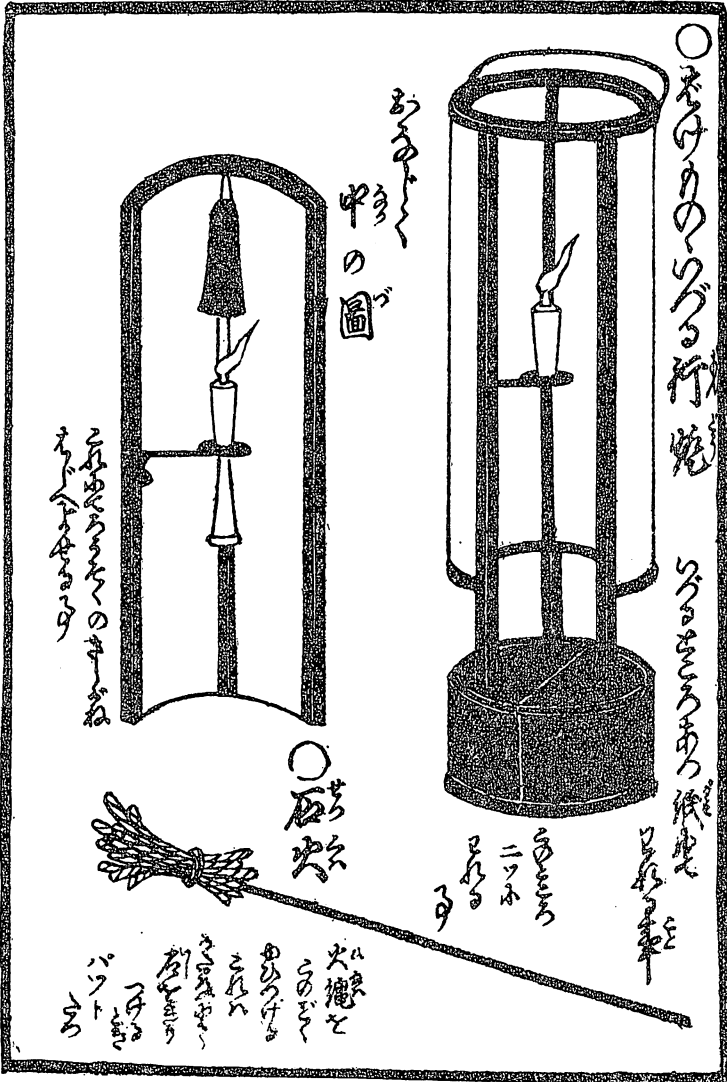


目頭三の劇潮新るせ手握

夫茂原空小 子榮好三 雄俊口山 (リよ右)

# 堀 頓 道

輯 二 十 第・號 念 紀 年 周 一





# 棧敷手帖

— 東西看客競べ —

久能龍太郎

演劇史の示すが如く、江戸と上方の折衝は、出雲のお國が女歌舞伎の創始期より次第と繁く、東方の名優が上方へ下つて名聲を擧ぐれば、西方の新進が江戸へ東上して、一世の人氣を奪ふといふがごとく、諸星入りみだれての役者修業に、自と見物も所謂見巧者になつて來たのであつた。第二次元祿期に至つて、西に學生の名優坂田藤十郎の慧星的出现は、東に天才伊優の鼻祖市川團十郎の慧星的出现を呼ぶに至つた。當代元祿期の劇壇には東西實に紅白二輪の名花が咲き誇り、東西看衆の『棧敷教養』は、いやが上にも昂り來つたのであつた。看衆の教養にエボツク・メエキングを劃するに至つたものは強ち名優の出現にまつばかりではなかつた。偉大な劇作家も相呼應するに至つた。西に大近松あらば、東に大南北

默阿彌の藝術境が展けて來た。第三次寶歴期、第四次近世期（寛政以後）も東西の競伎は、過ぎにし史實がこれを物語るであらう。然るに第五次現代期（明治以後——昭和に至る）に於いては、文化の中心が帝都東京に集中せられたる劃期的時代變遷によつて、劇場藝術の核心は、漸く東方に歸するに至つたのは、寂しいことである。

○

その昔、江戸の看客は總じて役者を意氣で買った傾きがある。上方の看客はそこへ來ると見巧者で、藝そのものうちに込んだところがあつた。江戸の看衆は、演伎の妙に拍手喝采大向ふの騒ぎは大したものであつたが、上方の見物衆は「感嘆措く能はずの態」で、ほれほれと、いはゞ『唸る』の形で

あつた。江戸の看衆は、役者の腰から上をわけなく見たのに反し、上方の見物衆は、腰から下を丹念に檢べたやうに思ふこれは東西の民衆性の異なるによる處であらう。風土的に考へても東に箱根、西に伊吹の分水嶺あつて、江戸と上方の中間に位置した尾張の名古屋は、當時東西交互に渡る俳優にとつては、最も恐るべき關所であつた。この土地は、唯來、遊藝の盛んな處で、わけて東西の看客心理の長所のみを攝取し、立人筋の多かつただけに、名古屋で打つ興行の成績が、東へゆくにも西へ行くにも、多大の試練となつたといふ。ある古老の挿話である。

併し、東西觀劇知識の差程が、必ずしも自黨の俳優にのみ人氣を色づけたとは思はれない。上方の名優が、江戸に冒險的東上して、江戸の全人氣をあふつて、宛も凱旋將軍のごとく、上方へ錦をかざつたこともある。見方に差程はあつても、畢世に冠たる藝術家に東西の隔りはなかつたのである。

○

現代に至つては、藝苑の全核心が東京に移動したので、總じて東京よりも京阪の看衆は、時代的におくれであるかのごとくに風聞せられてゐる。これは東京第一、京阪第二といふ

今日の組織では、いくぶん、この嫌がないではない。つまり寶境の刺激的訓練がないからによる。昔のごとく、東西相呼び、錦を削るの見物修業のなくなつたことは、時代的とはいへ、いかにも寂寥の感に堪えない。

○

筆者さきごろ旅して一夕道頓堀に遊ぶ——ぜんたいとして古風に花やかな芝居街の夜景、昔ながらの櫓。美しき緋毛氈の棧敷、お重詰め辨當をひらく、おはぐろうるはしき世話にくだけた女房の後姿……ゆとりのある上方の劇場氣分にひたる。こゝならではもはや味ひ得ぬ古風な芝居街の風情である。演劇倫理に半可通な、半文化式の東京のモオダン・シヤタアより、いかばかり人間的落ちつきを示してゐることか——芝居は娯樂なるが故に、所詮はある程度の頽廢的低廻趣味を必要とする。見物教養にきびしいモスクワ藝術座の俳優兼舞臺監督として高名なるスタニスラウスキイは、見物をして開演中拍手一つ許さなかつた。かく教養ある歐洲各劇場も昨今はボツクスの中で、サンドウキツチをむさほり、牛乳を飲む高級な看客が盛んに増加しつゝ、あるといふ。結局——人生の遊歩場たる劇場も、こゝに至つては時代逆行といふべき歟。





# 理窟のない芝居

入江來布

或る食料品店の表を通つたら『攝氏二度の西瓜』と書いた立看板が立つて居た。われ／＼が子供ごゝろに覺えてゐる西瓜の味は、冷たいといふことも無論含まれてはゐるが、それは決して氷水を飲むときの感じの冷たさではなくて、『種まで眞ッ赤な新田西瓜』と讃えられたそのまつ赤な、さうして何とも言いへぬ水分の豊潤な味覺の上からの一種言ふべからざる冷氣、まづ『新秋の爽かさ』ともいふべきところにある、これは機械で計量する温度なんかとは全く別の味ひで、無論また今日の『水かけ西瓜』などの附け焼及の味ひ、技巧的の冷たさの如きものではない。この食料品店が一枚看板として居る

『攝氏二度の西瓜』とは如何なる科學的加工をしたものか、我々の如きものにはたゞ看板を見たゞけでゾツと身内が寒くなつて、無論この現代的西瓜に接觸する勇氣などはないから實感を語る事は出来ないが、我々が子供心に覺えたなつかしい西瓜は、その冷度に於て所謂『井戸ひやし』の程度で結構であつたのである、西瓜の味ひは、寒暖計で計つたり、氷や蜜をかけたりせないで、寧ろ、それ等の冷やかさ、あまさを超越した一種特有の冷氣と甘味にあつた、『新田西瓜』は即ちこれである。

何の理窟もなしに、冷たくて、うまくて、半月形に切つた

そのまつ赤な『み』に嚙りついたときに『新秋爽冷の氣』を思ふまゝに味ふことの出来た昔しの『新田西瓜』

『攝氏二度の西瓜』の標識に依つて、科學的に加工された現代的の西瓜、即ち理窟のある西瓜。

どちらが、『味ひ』といふ根本の點に於て優つてゐるだらう歟。

『理窟無し』の芝居」と『理窟のある芝居』とそれは恰も『新田西瓜』と『攝氏二度の西瓜』との對照に相似たものでありはしまいか。

苟くも、一個所でも理窟に合はない點があつたら現代人の觀劇眼には容れられない、『寅の歳、寅の月、寅の日、寅の刻』に誕生したる女の肝の臟の生血を取り毒酒を盛たる器にて病人に與へる時は即座に本復疑ひなし」といふやうな荒唐無稽は駄目である、今日の劇は宜しく合理的でなくては行かれない、と理論の上では恰度返す言葉もなきまでに言ひ盡されて來たが、扱て、舞臺に上ほした事實の上で、果して如何にその『合理的行程』がどれだけ見物を恍惚たらしめる實績を擧げ得たであらう。

『理づめの芝居』といふものは、昔にも既にあつた、併し見物は、ちやんとそれを『理づめの芝居』と名けて識別する

だけの鑑賞眼を持つて居た、科學的に分析して部分的に理窟に合はぬことや、荒唐無稽があつても、總體の感じが受け入れらるゝならば、部分的の荒唐無稽など、そんな事は問題にして居ない、問題にせなればかりでなくその不合理や荒唐無稽を却つて熾烈な鑑賞爐中に投じて鍊化して了ふ、畢竟するところ『不合理』といふのも部分的、外形的であつて、その芝居の根本思想の美が合理的であれば問題とはならない、また根本思想が芝居として合理的でなければ『美』は發揮されないのである。この點で大體に於て昔しの芝居は、芝居としての美しさが皆よく發揮されてゐる。

近頃、そろ／＼『理窟なし』に面白く觀られる芝居、要求の聲が、元、理窟ばつたことを要求した識者の間から出そめて來た、一時餘りに科學的、合理的芝居の要求をして、其の結果は却つて理に趨つて功を収めなかつた反動でもある。

『理窟なし』に面白く見られる芝居』にも種類はいろいろある別段これといふ思想も何もなく、たゞ觀た目で面白いか綺麗なとかいふ芝居もある、肩が凝らすすら／＼と運んでゐるうちに、どこことなく味ひのある思想が含まれて居て、それが理窟を感じずに受けとれるといふ芝居もある。

七月の浪花座の猿之助の『研辰の討たれ』なども、理窟な

しに面白く見られた芝居の一つであつた、これは大體に於てたゞ肩の纏らぬ面白い芝居として終始すべきもので、またそれを全く無條件に、理窟なく演技かして人物性格を躍動させ所謂猛闘努力の熱演振りを見た所に喝采を博した所以もあつたのであるが、そこへ持つて来て、仇討の平井兄弟——殊に兄九市郎が頻りにハムレット見たやうな思想劇めいた事を言つては無理に此芝居を現代めかさうとするやうに見えるので大に感興を減殺された、一個所や二個所は、さういふ事も現代人の一面を諷刺するものとして對照的に面白くも見られるが、それがあの様に本眞劍に何度も繰り返されてくると寧ろ幻滅に陥つて了ふ。最後に『敵討をしたやうな氣がしない、辰次のいふ通り人殺しをした氣がしてゐる』以下幕切れあたりは決して愉快なものではなかつた。同じ理窟なしの面白い芝居としても、猿之助劇としては『研辰』よりも『小栗栖の長兵衛』を探りたい、猿之助丈にしても肉體的勞力は別として五幕七場の大もの、『研辰』よりも、一幕もの、『小栗栖の長兵衛』の方に本質的の勞は多かつたと忖度しても當らぬ事はなからうと思ふのである。即ち『小栗栖』は『研辰』と對照して後者に屬するものである、『小栗栖』は何もないやうで居て齧みしめるとしつかりとした核心をもつてゐるので

ある。

外が濃藍で、中身がまつ赤な新田西瓜、井戸冷し、以外に西洋味の助力を要しないでうまかつた新田西瓜は殆んど無くなつて、皮が白かつたり、中身が黄色かつたり、へちまのやうなのや、瓢箪のやうなのや、西洋種やラシヤメン育ちの、氷をかけたたり、攝氏二度に冷却したり、所謂科學的、合理的加工調味を施さねば喰べられぬもの、西瓜も眞瓜も、水蜜桃も枇杷も個性のない、どれでも凹じやうな味の現代果物となつた世に、もう一度、法善寺境内の八百半や、御堂さんの穴門を復活再現して新田西瓜を喰べやうといふのは無理な計文であらうが、『理窟なしの面白い芝居』を組立てやうとするこゝとは西瓜の味を昔しに戻すよりは、それこそ合理的に成し易いことであらうと思ふのである。

而も、私は、それを大阪の劇壇に求めたいのである、尤もこれを成し遂げる人には乏しい。併し例へば八月浪花座で催した伎藝座の時の青年俳優諸士の成績に見て、この人たちがこの時の意氣と熱で、眞面目に熱心に演出するならば『理窟なしの面白い芝居』を大阪劇壇に見ることも決して出来ない相談ではないのである、現にあの時の芝居がさうであつた。見ぬ前に、だしものだけを聞いたときは『曾我』に『鎌倉三

代記』に『千本櫻』に『日高川』斯ういふものばかり何故並べたのだらう、斯ういふ機会にこそ、昔しは演つたが近頃はあまり舞臺に上さなはいふやうなもので、大阪特有の芝居を出して欲しい、或ひはまたこの機会に新しいものを一幕位は試演すればよいと、斯う思つたが、實際の舞臺を見ると、みんな豫想外の熱心と眞摯で、一生懸命、筒一杯に力を張り切らせて演出し、而も第一に神妙であつたので、青年歌舞伎にありがちな所謂チンコ芝居的のこましやくれた趣味は少しもなかつたので、これ等の狂言もみんな本来の持ち味を相當に發揮した、さうして有觸れた狂言にも今更に印象を新たにされる所があり、老女優劇では見られぬ別の世界が現はれたさうして久しぶりに『理窟なしに面白い芝居』を見て、よい氣持が味へた、この例から見て、大阪劇壇にこれを期待することもあながちに木に魚を索める如きもの、とは謂へないと思ふのである。

『理窟なしの芝居』は、曩きに舉げた例のやうに有り觸れた舊歌舞伎の中にも求められるし、また新しい脚本にも求められやう、たゞどうしても新しい脚本には現代思潮が織り込まれて、それがうっかり露骨に出ると例へば『研辰』の市九郎のやうな『理窟』がひよつこり顔を出す場合がある、昔し

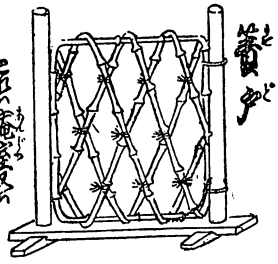
の芝居に新しい解釋を書き添えるといふやうな場合にもよく『理窟』がつき纏ふものである、鷹次郎丈のための新脚本などにも時にさういふ事がある、それかと言つたとき軽いばかり、見た目の美しさばかりで底に何にもない根無し草で、俳優の猛演ぶりばかりでなくて、俳優の熱演がそれに觸れたときには響くだけの核心をもつた脚本でありたい。

膚ざわりがやわらかく、見た眼が輕妙であつて、肩を懲らさずに見て居ながら、噛みしめると底に個性の味がある、といふのが理窟のない芝居の理想である。



(座中) 梶おの鶴一と七團の雀扇





# 故人を憶ふ

高原慶三

幼時の追憶でも不思議にハッキリしたものがある。芝居と幻燈と落語と人形芝居、むろん野球や活動のなかつたわれらの幼時の物を見た記憶のうちでも、鷹治郎の芝居、謂ゆる大芝居なるものを、そもく見はじめた思ひ出などは我ながら驚嘆するほど精細におほえてゐる。或る意味で、自分の劇談資料の第一頁に相當するのである。

道頓堀の大劇場なんか足許にもよれない宏壯な大劇場が松島に建つたのは自分の六つの時だつた。改造等一期の八千代座がそれある。

金閣寺風の鳳凰閣を二つ均齊に並べて、その間に勾欄の橋を架して屋上の遊歩場となした、これだけ聞いたとくでも現在の道頓堀の大劇場何と顔色があるまいて……しかしこの建物、惜しや土地に分過ぎて二年をまたずして烏有に歸した。そのこけら落しが鷹治郎、福助、梅玉なのである。

一座の故人實川正朝の『會我』の虎を見た。おでこの大柄な女形だ。後に小芝居に落ちて本町座（東區内本町松屋町東入、活動館本町の前身）などに出てゐた。今の正朝とどんな間柄か知らぬ。

故人嵐璃笑がゐた。『曾我』の少將で甘たるいこうせきが耳に残る。聞けば今の雀右衛門の實父ださうであるが、雀右衛門の地位や藝から推してその當時の割合に貫録が足りぬやうである。鳶が鷹を生むだのではあるまいか。

故人中村玉七がゐた。『吃又』の女房お徳は見るから水のたれさうなホタ／＼した花女形だつた。今一寸こんな人は見當らぬ。東京の故門之助がこの型だつた、或は筵女を少のし肌合をこまかくして若くしたりどうだらうか？

故人中村霞仙も見た。『琴ぜめ』の重忠はすつきりとした品のある立役だ。調子は金屬性で、高朗澄明の四字がうまくはまる。今生きてゐたなら鷹治郎の後継者、或は藝風からいつて稍々現代に相應するやうで、或は霞仙の天下になつて上方の劇壇も少しは現状より活況を呈しつゝ、あるのかも知れぬ。吉右衛門の時代味を搾り取つて上方式の世話味を入れ換えた、そうした味をもつてゐた。

故人福助多見之助(多見藏)の追憶は余りに新し過ぎる。

思へば、その頃からの中村鷹治郎は座頭である。何といつても天下の名優と謂ひつべしである。

ちんこ芝居を見た、やはり八千代座で……。

何時ごろか、これは不確かな追憶の一例である。『夏祭』太

功記の「尼ヶ崎」などが出た。

中村吉十郎が光秀と團七九郎兵衛をやつた。つひこの頃辨天座に出てたあの吉十郎だ。當時は時藏(歌六)の弟子で、悴の吉右衛門有力な競争者なのだつた。成程ちんこ芝居ながら座頭役者だつただけに藝は相當うまかつたらしい、が、門闕の出でないだけに見らるゝ通りの現在である。

樂之助(東京の菊右衛門)の重次郎、故人鷹童の初菊なども見た。その内でも鷹童だけは不思議に懐かしまれる。

北堀江、土佐稻荷の横に中村といふ髮結床があつた、その悴で、可愛い綺麗な女形、童心の自分さへ戀を感じたほど美しかつた。生きてたらモウ四十にもならうか？

その他に吉松郎といふ役者を見た、今は何といふ名になつてるか知らず？

中村時子といふ女役者を見た。

はじめ中村時藏の弟子で、ちんこ役者だといふふれ出しで「安達」の袖萩と貞任を見せてゐた。

その頃、一寸した子供らしい特典で自分は樂屋を見舞つた時、女の正體を見た。

しかし、座方では「人氣に觸る」といつて知らぬ顔で男として賣つてゐた。

焼けてその次に出来た八千代座が今の建物で、そのこけら落しに我當(仁右衛門)を見た。

狂言は今に於ても分らぬのだが、或は半井桃水翁か、渡邊霞亭翁の新聞小説らしくもある。菊畑の中で、我當の家老がおめかけ狂ひをしてゐる殿様に練言よろしくあると、その語音が甚だ惱しく亂れてゐる、果して『かくし腹』を切つてたといふだけしか、モウ一つハッキリと思ひ出されない。

だが、その前に『三番叟』があつた。これは頗るたしかにおぼえてゐる。片岡秀郎の翁、片岡太郎の三番叟、片岡みどりの千歳、松島家門下の秀才少年を網羅したものである。

秀郎はおでこ頭が妙に目についた。太郎は誰あらう、今の市村龜藏なのだ。颯爽として秀れた目鼻立ちは今に目についてゐる。みどりは今東京で宮戸座あたりにゐる片岡宇左衛門といふ餘りに榮えない役者だが、堀江の松ろといふ名妓を妹にもち、花よりも實をとつて地道にやつてゐるのは何よりである。

先方は忘れてるか知らぬが、古城の新ちやんといつて自分より七つ八つ年上の幼馴染であるだけに一層思ひ出が深い譯である。

鴉治郎一座の中村傳五郎、仁左衛門一座の片岡我藏なども

味のかはつた役者だつた。二人とも端役三枚目處だが、梟のやうに人を小馬鹿にした、あゝしたニヒリスチツクな藝もだんくなくなつて了つた。今の淺尾大吉に寂びがつけば或は傳五郎二代目になりはしないか。

晩年に傳五郎の釣舟三婦を見たが、見物を後ろにして佛壇に看勤してゐる、肩先きの妙に佻びしかつたのが未だにマザマザ眼にのこつてゐる。

今の實川延太郎のお父さんだつた正若の延三郎は死んでモウ二十年近くにならうが、自分は更にその先代の延三郎をよくおぼへてゐる。腎臓病らしく、水脹れした顔々あだ名して『はり半の行燈』と、うちの年よりどもはいつてた。

『先代萩』の仁木彈正で、右圍次(齋人)の細川勝元が「待たうぞく」と、對決場に出る、あの緊張した劇的氣分が子供心にも『い、芝居だなア』と思つた。その延三郎は或は名人故延若を髣髴させはしないかと思ふほど世話味の豊かなやわらかみのある立派な役者だつた。想ふに當時にあつて鴉治郎の一敵國でありはしなかつたか？

正若の延三郎は追憶といふには少し新しいが、この人の最後の舞臺を京都明治座で見たゞけに一層思ひ出が深い。

綺堂氏の新脚本『安政黒船話』『夏祭』の一寸徳兵衛『大杯』

の馬場三郎兵衛などを二十年も前にやつてるのだから一寸話せる男だつたに違ひない。くさみのない役者として東京でも一ばんうけがよかつた。或る意味で關西側を代表して關東の左團次の競争者となり得たかも知れない。延三郎と鶴仙さへ今まで生きて、くれたならば……と、夜半、夢さめて度々思ひ出す自分である。

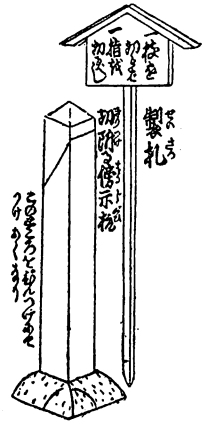
かけ落ちばかりやつて藝の方は二のまぢだつた徳三郎の璃寛、藝の虫、關西の松助といはれた璃珪、二人とも去勢されたやうな八百藏、廣三郎兄弟……となると追憶の部には入らぬほど真新しいが、今でも一寸惜しまれるのは嵐芳三郎である。

晩年は東京の宮戸座の座頭格で上方藝を見せながら東京の水をうまく調合して東京人の人氣に投じてゐたのだつた、こゝうせきがしわがれて、豊頬な點、一寸六代目菊五郎の面影があつたが、それに上方式の色氣を添えたい、男まへだつたのに惜しやこの人も早世した。大阪では長太夫、七賀の助(飛鶴)など、一緒に二流芝居で甘んじてたが、實力では道頓堀でも少しも遜色がなかつた。八千代座その當時、やかましかつた第七師團八甲田山遭難劇といふやうな際物を見せてくれた。好きな役者の一人であつた。

二銭鷹治郎の市川團若、勸進帳屋の中村信濃、同じく勸進帳屋の成田屋壽玉、お染の七役專賣の唐琴屋の中村福圓……オットつひ失念してたが、有名な小紅屋眼玉である。『宅兵衛上使』『扇屋照谷』『石川五右衛門』など、荒つほい時代物が得意で顔の立派さでは肩を並べる役者がなかつた。梅玉翁も豊頬にし、眼は大きく圓らかで睨みがよくきいた。この人の引退興行に『樓門』の五右衛門を延若の久吉で浪花座でやつたが、その節この人の昔話を大阪毎日新聞の日曜附録に載せるべく、新聞社に入社問もない。新米記者の自分は薄田立董先生の命令で堂島裏町に訪ふたとはモウ十年も昔となつた八十幾つかの老人に、四十になるやならずの若い垢ぬけした細君が『お父さん、お父さん』と甲斐々々しく世話を焼いてた。

老人の悴が、今東京にゐる市川市十郎で、その頃は左團次一座にあつて自由劇場などで『夜の宿』の役者や『寂しき人々』の牧師などに出て、謂ゆる當時のハイカラな役者だつたものだから話題をすべて悴の方に持ち込むと老人が嬉しそうにホタ／＼と話すのが、頗るい、感じを與へてくれた。





## 偶 感 二 三

大 平 野 虹

大阪の芝居について、是非何か書けといふことであるが、

いまの私は何も語りたくない——いふことは澤山に持合してゐるが、いつたところが什麼なるものでもない。それほど現在の道頓堀——ツマリ大阪の芝居は疲れきつてゐる、役者も劇作家も興行師も乃至看客まで、もう疲勞しきつた風がある

私は、あしがけ四年ぶりで道頓堀の土を踏んだ、ひよんな事から、この六月からちよいと東京から大阪へ往來しなればならなくなつた。四年間引籠つて讀書ばかりしてゐた私は、もう、そろそろ獨り歩きが出来るつもりで、ふた、び煙の都へ這出して見たわけだが——四年ぶりで見た道頓堀は、何といつていゝのか、ちよと雑草が延びたやうな、まこと

に慘な感じがした。

もちろん、それは財界恐慌の影響をうけたともいへよう、不景氣だからともいふ、然し演劇の眞の進展といふものは、あなたが經濟狀態の足不足によつてきまるわけのものではない。もつとふかく考へなければならぬことがある筈だと思ふそれが雑草——叢に埋められてしまつて『途』がわからなくなつてゐる、什麼していゝのか、什麼すゝんだらいいゝのか、その見當がまるでつかないのだ。

ひとりでいゝ、僅つた一人でいゝからその叢を掻きわけて芝居の『途』を拓いてくれるものが現はれて欲しい。私のいふ『途』とは、時代に適應して進んでゆく演劇の構成である

その基礎が、今のやうでは、什麼にも仕様がない。

○ 面白くなければ——むろん芝居の第一條件ではあるが、その面白さといふ程度を、どの程度まできめてかゝるのか、そこに確固たる定見がなくてはならぬ。それが今の道頓堀にはぜんぜんないわけである、錆びついた鋸力のうへを、幾度もペンキを塗變へてばかりるたつて、なんにもならない。今の道頓堀はむやみにペンキをいろいろに塗變へてばかりるがそんなことではペンキ代だけいつも損をするばかりである。

○ やり變へたり、掘直したりばかりしてゐたところが、根本を誤つてゐる限り、たうてい清水は湧いて來ない、その根本義とは即ち興行師と劇作家と俳優とが、ひとつの心に結びついて、所謂純一無雜の境界に起つて精進することである。

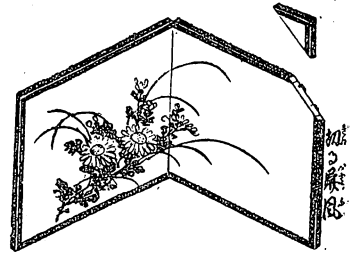
○ それは餘りに理想論だといふかも知れない、然しAとBとCと三角形の角度がびつたり決つて後でなければ定見がきまつて來ない。現在のところ、興行師も劇作家も俳優も各自支離滅裂の考へを持つてゐる、もうひとつ極言すれば、『考へ』

と名づくものすら持つてゐないのだから——いふだけ無駄である。

○ 眠りつゞけてゐるうちに神經衰弱になつてしまふ。神經衰弱患者の芝居を見たところが、はじまらない、看客が來ないのは當然のことである、かも知れない。

○ どこのまで眠つてゐるのか、傍觀してゐる方でも、もう草臥れてきた。なべて芝居の行詰りは何に起因するかといふと、藝術に對する不安を持たなかつたためである。

○ わかり易く言へば、世のなかの進歩といふことに對して餘り無關心であり、恐怖がなかつたためである。ひとり劇藝術に限らず、人生といふものは自己に對する不安がなくなつたらそこに精進といふものは生れるものでない、精進のない藝術になんの生命がある。——見たくなくなるのは餘りに當然すぎる。



# 乳房榎覺え書

高 谷 伸

高座の味と舞臺の味の違ふのは、舞臺劇と映畫劇放送劇などとの味の違ふのと同様である。

従つて圓朝物を脚色した乳戸榎は、その登場人物が、死んでも猶作品に執着を残す畫家重信、愚直で意志が弱く恐れながら悔いながら悪人に引擦られて行く下男正助、御金藏破りといふ舊惡を持ちながら人妻に惚れてその夫の生命も妻も家も奪ふといふ惡黨浪江、夫の敵といふことを知らず子にひかされ悪人に従ひ終には子まで棄てさせられるお關など、かなり近代的な解釋さへできる人物が揃つてゐながら、今一息びりつと來ないのは、その發生の徑路から見ても、歌舞伎の味が稀薄なからである。

しかし、同じ圓朝物でも鹽原太助ほどの愚作ではないのはかなり俳優本位の觀衆を熱狂させ得る早替りといふ舞臺技巧を隨所に驅使してゐる所にある。一人の俳優を禮讃する觀客にとつて、その俳優が瞬間に姿をかへて思ふさま活躍するといふことは實に昂奮その物である。純粹の劇觀賞の立場から見れば問題であるが、酔ふといふことを一要素とする歌舞伎の世界では、いはゞ切支丹の邪法である早替りをも、全然拒否すべきではなく、たゞその濫用を警むるのみである。

乳房榎は私は大正三年と大正十二年、ともに南座八月興行に河内家一座で見ている。こゝにその時々々の舞臺技巧に就ての覺え書を筋を追ふて書いて行く。



二回とも六幕と前回は松月院門前正直茶屋の一場だけ多かつた。大正四年八月東京歌舞伎座上演の時は序幕二幕目も食つた様子である。

序幕兩國附近これは前面は隅田川堤とあつたが、春でなく夏狂言の序幕で巾着切など出るのは兩國附近が適はしい。扇折の竹六が巾着切に盗まれて大騒ぎをするが巾着切が着物をぬいで逆ねぢを食はすのを松井三郎がとつちめるので川へとびこむ。三郎の姪お關を茶店女を追ふてきた國侍が捉へるのので新兵衛が止めるが聞かぬのを磯貝浪江が救ふて見染めるといふ場で、幕切はお關の歸りを見送つてゐる浪江に以前の巾着切が三郎とまちがへてかゝるのをほんとかへすのが柀の頭である。

次が菱川重信宅で茂左衛門新兵衛が龍の講の依頼にくる。そして進まぬのを納得させて期日も急ぐといふので出かけて行く、その不在中に眞與太郎に添乳してゐるお關を浪江が口説くが應じないのを刀を抜いて脅すが利かぬので子供を殺さうとするさあ／＼となる所へ正助が歸つてくる。磯貝浪江は壽三郎と吉三郎を見たが、吉三郎は刀を抜いた形もわるく序幕での鐵扇の持ち方も小さいさく殊にあの善良の柄が邪魔になり壽三郎程根強い所はなかつた。

三幕目の花屋の二階から延若が活躍する。仕出しの百姓の騒ぎから三次の出になりそれを抑へて浪江が出る。階段の上り口で三次と正助の二人の聲で譲りあつて三次が下りると正助が上つてくる段取など手に入つたものである。浪江と正助の密談に茂障子二折の衝立を用ひ、ひつくりかへる時かせに使ふのは面白いが、それをかぶつて這ひまわるとまるでやると、研辰の葛籠の可笑味とちがつて、くすぐり過ぎになる。結局それを間に置いて浪江との位置を造る。女中が徳利をもつて出ると刀が抜いてあるのでびつくりするのが柀の頭である。この場の正助は御馳走になり五兩の金を貰ひ兄弟の盃をした。義理で主人を殺す相談に乗る。すしとほけた味は必要であるがふざけ過ぎると、芝居全體の作意を破壊することがある。

次が落合の田島橋で正助重信三次の早替り正助が浪江と打合せて忍ぶと揚幕から重信の出になる。こゝは以前は謡をうたひながら出たが後には止めた。これはある方がよい。七三で正助々々と呼びただけでは出がひき立たぬ。暗打ちになり、いろ／＼目まぐるしい立廻りがあり、とど正助が花道へ引込むと入れちがい三次が出る。本舞臺へかゝる。曲者手裏劍、蓆をあけ死骸を見るよろ／＼下手へくる。つまづき

傘を置き印籠をとりあけ月光にすかして見るのは、これも初演のやうに、派手に印籠を口に啣へ、傘をほんとかついだ見得のあつた方がよい。三次のゆかたも二度目は白つぼいものだつたが、演の藍がちの荒いのが、遊び人らしい。

この奥が高田南蔵寺の本堂で講龍點青の場である。以前は襖畫たつたと思つたが、二度目は天井の龍であつた。この重信、菱川といふがいつも狩野が四條の畫を描いてゐる。この場の重信の着附は幽靈らしく淋しいものである。そしてこゝは床が入る。重信から正助に替るのは群衆の蔭を利用する。この場の燭臺の煙などうまく使ふと懷味を助けるものである。四幕目は菱川宅の鱗三次の強請場で、しかも九月の十三夜、森のかなたに落合の田毎ならぬ。元田島橋、あとをくります曲者をやりすごしたる橋の上かたへに落ちたこの印籠かたばみくづしの模様こそかねて覺えの高時繪といふところ、こゝでお關は浪江の嵐まで宿してゐる。終に正助に子供を棄てに行かせることになる。

この奥が十二社大瀧である。花道の切穴を使ふのが最初で三次と正助と替り、床につれて科があつて子供を瀧壺に投げこみ簀をかぶると重信の幽靈が出る。幽靈が消えると正助に戻る。三次の吹替へが出る。正助が裏むきで三次のせりふを

つかつて立廻りになる。窓の見得があるかと思ふと、すぐその下をこわして正助になつて出る。傘を使って本水の瀧壺で早替りしながら大立廻りをやる。三次の落入りで幕になると幕外を正助になつて驅けこむ。實に神出鬼没といふやつである。要するに一人で吹替へだけを相手にやる芝居である。吹替へといふ仕事もむづかしい仕事で光車といふのが延若の身ぶりまでやつてゐた。鷹藏が同じやうに足に綱帯を巻いてゐたこともあつた。多人數であるべき芝居を一人でやる。そして、そのトリックがこの場の味噌なのである。

大話は話の結果をつけるための一幕、瀧壺へ投げ込まれた



菅の重信の一人眞與太郎が不思議に助かつて、松井三郎の助太刀で仇討をするといふ所で、この場の浪江の着附は白つほいものより青味を帯びたもの、方が幽霊に脅かされてゐる悪黨の色を現すのに効果があつた。

九月の浪花座、延若の菱川重信とその亡靈下男正助、鱗三次の早替りに、壽三郎の磯貝浪江實は佐々繁で上演されるといふこと、延若の早替りはお手のもの、壽三郎の浪江も三都で評判をとつた當り役である。こんどはまだどんな演出によるかは知らない。しかし、延若の三役、重信で貫祿と凄味を見せ、正助で意志の弱さから強者に引きずられて行く人間の心

弱さを見せ、三次で充分なお芝居をすれば、結局、勞のすくない割に儲かるのが三次、むづかしい割に功のすくないのが正助といふことになる。

さうした役々の演じわけの面白さも一つの興味ではあるが舞臺全體としての色彩なり音楽なりの効果の乏しいこの種の劇は、昨年の累々淵の延若の甚藏と猿之助の新吉の物語のやうな特殊な巧さの出来る。場合以外、よほど難かしい芝居である。

勿論、事件の興味、俳優の人氣で前受けのみを狙ふのなれば問題は自ら別である。

### ◇ 割 役 座 花 浪 ◇

九月興行關西大歌舞伎延若力關劇は九月一日午後四時開幕にて初日を出してゐる。狂言は第一林和氏作「三右衛門の賣出し」一幕、第二圓朝口演「乳房覆一五幕にて總役割左の如し。

白戀三右衛門、磯貝浪江(壽三郎)  
あやめ風呂お初、重信妻お關(霞仙)  
安井廣右衛門、弟子信鳥(八百藏)

扇折新六(扇藏) 百姓権兵衛、國侍  
文十郎、伴僧隨連(正壽)、百姓甚四郎、講中由兵衛(若三郎)、下女お花  
講中長助(豊之助)、下女お辰、町女房おとく(若紅) 湯女おさだ、安中  
敷右衛門(ゆたか) 遣子眞與太郎(小鷹) 内儀おしま、關宿大助、正助おつね(關三郎) 千住茂右衛門

職人才助(鷹若) 向見三五郎、百姓  
久五郎(若十郎) どぶろく勘藏、葛西村源次(蝦五郎) 國侍佐五右衛門  
講元吉助(若藏) 蛇腹百助、今田屋正平、所化萬念(延郎) 萬屋新兵衛  
(齋五郎) 深見重左衛門、南藏院雲海上人、松井三郎(蝦十郎) 菱川重信、同亡靈、下男正助、鱗三次(延若)

# 『乳房榎』早替りに就て

實 川 延 若

十四年振に浪花座で『乳房榎』を演る事になりました。御承知の如くこのお芝居も一種の仇討物ですが、然し何の種の仇討でも、討つ者と討たれる者との間には相當怨恨の情が育ぐまれて居なければならぬものですが、このお芝居だけはさうした傾向に乏しいのです。なんとすればこれは敵役が優しい色男で、相手の人達には敵視されるには餘りに弱々しい、そしてそれ程悪人でないといふ事です。磯貝浪花は生來の多情から師匠の妻―お關―に戀して無理強ひに胃かして、其の後自分の本能性の進展に差し障りになるお關の夫を暗殺し、その遺兒までも捨てさせますが、そうした彼の行爲も決して世間並の悪黨と同じ様な心持ちをするのではなくつて、唯本然と湧きあがる慾求のためにと云つた様な氣持ちがします。彼が世間普通の悪人でないと言ふ事は、師匠の横死後間もなく周圍の人達の肝入りで、彼をお關の本夫に直した事實でも明かです。

私が初めてこの劇を手かけて以來新しく立てました鱒の三次の役を、この度はウント本筋に絡ませて、本當に見て居て面白いお芝居といふ様なものに致しました。元來このお芝居は四役早替りが骨子で（繪師重信、下男正助、鱒三次、重信の亡靈）唯ケレン、一つで見せるといつた風にも解釋されます、昔は一人一着といつて、一人



の役者は必ず一役で、何んな大立者でも序幕で殺されるとしたら、決して其の後は他の役で出演しないといふ風が尊ばれましたが、斯うした傾向はお芝居の眞實味を喰う上に必要な事です。それが一人三役早替りなど、云ふ事になると、凄味など皆無ですから観客の氣持を捕へて行くには、同じ早替りをするにも、鮮やかな手際で演る事が必須の條件です。

それに就いては、私も可成苦心を致しました。殊にこの劇の見せ物である四幕目の『角宮十二社大瀧』の場で重信の亡靈、蟒の三次、下男正助三役早替りは、初演當時から相當研究してゐますが、それに就いて面白い話があるんです。御承知の如くあの場で子供を捨てて来た正助が、蟒の三次に替る場合は、瀧の飛沫を浴びながら、大立ち廻りの最中、舞臺の上で傘一本を盾にして替りますが、初めは傘の變りに箆を使用して居ました。然し箆では水氣を含んで重くなり動作の自由を缺くので傘を使用する事にして居ます、全で舞臺の上で傘一本の早替りで天勝の様な事を演りますが、決して手品や奇術ぢやないんです、所で、この傘は瀧壺の傍へ置いておきますが大正四年東京の歌舞伎座で上演中でした、四幕目が開いて、イザ傘の件になると、何うしたのが瀧壺の傍へ置いた筈の笠がありません、サア大騒動、色々調べさすと瀧の沫で瀧壺に落ちた傘は、水に押し流されて奈洛の排水口に引つか、つて居たんです、然し水勢がきつくて仲々取れないと云ふ事、何時までも立ち廻りで繋いでおく譯にも行かす困つて居る所へ、氣轉を利かした後見が、有合せの傘を投げて呉れました、ヤレーと安心と擴げて見ると、銀座の天金(てんぎん)てんぶら屋の番卒には自分乍ら驚きました、が無事に早替りを終るとサア割れる様な拍手、何うした事かと後で聞いて見ると、大ていのお客様が早替りの種が傘の中にあると想つて居たのが、有合せの傘で仕遂けたので、観客の興味を一層強くしたわけださうです。(住田生記)

芝居 物語 乳 房 榎

松 本 泰 三

一

畫師の誰れもがいふ様に、余り氣が進まな  
 いといふので、一應は斷つてみたものゝ、新  
 兵衛や茂左衛門の熱心な、たつての願ひに、  
 重信も、その上は斷はりもしかねて、  
 『私の様な者でも書かなければ、お二人が講  
 中の背の衆に、遣はす顔がないと申されませ  
 か』  
 『ハイ、左様で御座います、今此處で先生に  
 斷はられますと、私等二人は途方にくれるの  
 で御座います』  
 哀れみを請ふに等しい二人の纏り様を、見  
 た時、生れ付き氣立の優しい彼は、  
 『宜しい、描きませう』と南藏院本堂の天井  
 に、雄龍雌龍二匹の器畫をかく事に、心よく  
 約束をして仕舞つた。

『この上申しますのは、御無體なお願ひだと  
 存じますが、實はなんで御座います。この廿  
 六日に、南藏院、第一の檀家の法會を本堂で  
 いとなみますので……』  
 新兵衛は、厚顔ましい双だと思はれるより  
 か、寧ろこんな急な話を持ち出す事によつて  
 切角の承諾が、もとの反古にされるのではな  
 いかと訝りながら、重信の顔色のみをそつと  
 見詰めつゝ、汚ない物を口から吐き出す様な  
 嫌やな思ひで、漸くの事はいひ終へた。  
 『左様ですか、そうしますと、二十五日まで  
 には描き終らなければならぬ譯ですね』  
 『ハイ、まア左様な譯で』  
 二人は、重信の口の動き様をぞつと見守つ  
 てゐた。然し彼は別にこの火急な注文に對し  
 て氣に留めて居る様な様子でもなかつた。

『左様しますと日數もあまりありません事故  
 に、これから直ぐに往くことにしては、如何  
 んなものでせう』  
 畫師の心は、もう本堂の方に走つてゐた。  
 最近江戸で名高い、新進賣出しの畫師、菱  
 川重信といへば、送ひこの間までは、上州館  
 林、秋元家の藩中で、眞影流の達人として知  
 れてゐた。眞與島伊物次の事である。武道の  
 極意に達してゐる眞與島は、三十の年齢を幾  
 らも越してゐないのに、亦畫道に於ても諸流  
 に通じてゐた。それ程に彼は生得畫道には天  
 才的に恵まれても居り、秀い出てゝも居た。  
 趣味に生きて往きたいと希つてゐる眞與島は  
 二百五十石の御知行も殿に返上して、柳島で  
 或る商人の家寮を買取り、今では深き世の忙  
 事から逃れ、名も菱川重信と號して、一意専  
 心畫道に日を送つてゐるのである。  
 新兵衛と茂左衛門の二人が歸つて仕舞つた  
 跡で、妻のお關は重信の無謀な承諾に對して  
 昇めずに居られなかつた。  
 『殿！ 斯様な事を申しますと如何かとも存  
 じますが、今日は何刻も遅い事故に、明日』

事になされては」

「なぜお前にも似合はぬ左様な事をす申のじや。私の好む道なり、先方も日を切つて居られる事なれば、成る可く間に合せ進ぜたいから、今から往かうといふのじや」

重信には妻の心持を推察する事が出来なかつたと見へて、幾分不快の色をたゞよはせた

「左様で御座いますやうが、浪江だつて、信鳥だつて、夜分はお引取になり殊に正助をお連れになさいましては、殿の御留守に女ばかりで、町を離れたこの宅を守つて居りますのはどうも心細い様な氣持が致しますので」

「ハ、ハ、何をいふのじや。是が一ヶ月も二ヶ月も留守にする譯でもなし、僅か七日か十日の事ではないか」

妻の云ひ譯けを一笑にふして仕舞つたもの、女らしい貞節なお關の言葉を反省せずには居られなかつた。如何に高道の爲めとはいへ、余りに家の事を——お關の事を考へな過ぎて引受けた事を氣恥しく思つた。

「桶う？お關こうしやうじやないか、浪江はまた家に来てから幾日にもならないが、あれ

は、年の割に良く氣の附く男だから、留守はあの男に居てもらふ事にしては」

突然この時、悪夢にでもおそはれたのか、お關に抱かれて寝てゐた赤子が、火の附く様に、泣き初めた。

「おーよし〜。泣くんじやないよ。さアおいで」

お關は、むづかる子を重信に渡しつゝ、  
「殿がお出の幸先に、非常にこの子がむづかりますのは、お別れを悲しむのぢやア御座いませんでしやうか」

「ナニ馬鹿な事を申すのじや。お〜、泣くな〜、温なしく留守をして居るんだよ。泣くな〜、泣くんじやない」

睡せど、愛たはれど、泣き止め様とはしない。その中に籠も來た事とて、重信は、留守の一切を弟子浪江に宅して出て往つた。

二

で、ジン〜とヒステリックな痛高い調子で糸蟲が啼いてゐた。夫の不在を獨り寂しく寢室で赤子を寢附かしてゐる、年若いお關には、總てがなんとなしに物悲しく思はれて、胸騒ぎがせずにはゐられなかつた。

轉寢からフト目覚めて見ると、お關の枕邊には提刀の浪江が立つてゐた。

お關「オヤ、あなたは浪江さん」  
浪江「御新造、もうお休みで御座いますか」  
お關の驚きにかへて、浪江は至つて平靜であつた。

お關「あら！ まあ恠り致しました。あなた何で爰へ。」  
浪江「ア、コレ、靜かにして下さい」  
お關「イエ、靜かには申されません、何であなたは私の寢室へ。」  
浪江「これ靜かになさい、誠にどうも面目次第も御座いませぬ」

お關「エ、何用あつて今頃お出でなされた」  
浪江「御新造、誠に男子たる者が恥入つた譯で御座いますが……ア、靜かに、お願ひがある……」

刀の柄に手を掛けた。お關はあまり事の以

外なのに腰を擧げる事も出来なかつた。

浪江「我から棒に斯んな事を申しますと、お驚きになるかも知れません。實は忘れも致しません、梅岩の縁日に、向島の茶店でお目に掛りました時から、ア、美しい奇麗なお方だ、人に聞いてみますと、柳島で評判の御新造だ、アレが役者の瀬川路考に似てゐるといふので、柳島の路考といはれる御新造だといふ事を知りました。男子と生れたからは、あゝいふ女を女房に持つて見たいと思ひ詰めました。因果で御座います。命をかけて惚れましたと云つても亭主のある事、いつそ、思ひ切らうかと、幾度もだへた事か知れません。貴女が一度立ち寄つてくれといはれましたを幸に、富家へ伺ひました時、先生に入門を願ひましたのも、斯ふいふ折もあるだらうと豫期しての事で御座いました。元より不義である事も萬々承知して居ります、斯うまで男子が思ひ詰めたので御座います、どうか不憚と思つて望みを叶へて下さいませ」

お關「え、思ひ奇らなんだ、そんな方だと

は露知らず、夫も私も心を救したのには不覺でした現在師匠の妻に不義をしかけるとは、……サア今日限り出て行つて下さい、御断りします」

浪江「イ、エ歸りは致しません。お願ひです

お願ひ致します」

浪江は、お關の手にすがらうとした。

お關「なにをするんです。これ花や」

浪江「まだ聲をお立になるのですか」

お關「アレ……」

浪江「これ程まで申しても聞き入れては下さいませんか」

お關「聞いてあげれるか、あげられないか、考へて御覽なさい」

浪江「それではどうあつても聞き入れては、くれませんか」

お關「知れた事です」

浪江「それなら私にも考へがある」

左様いひ終つたか終らぬかに、刀は鞘から離れてゐた。二人はもう狂つてゐた。

お關「ア、人殺し」

浪江「黙れ。」

お關「なにをなさるんです」

浪江「これでも以前は武士だ、これまで願ひでも聞入れられなければ、貴女を殺し、切腹致すまでだ」

お關「私を殺すのですか、さア殺して下さい

私は貴方から驕り殺に逢つても、大事の操は立てます、それが人の道です、夫も

聞いて喜んで下さいませ」

浪江「宜しい、貴女が左様まで強情なら、この子を第一に」

刀は、もう子供の内喉もとにまでいつてゐた

お關「あゝコレ浪江、何をするんです」

浪江「戀の叶はぬ意趣暗らした」

お關「あゝ、まつて下さいませ」

浪江「エ、其處のけ！ 邪魔立するか」

お關「この手は死んでも離しは致しません。現在憎いはこのお關で御座います、なに

も知らぬその子を切り殺すなんて、そりや胸慥です。子供の戀はりに、私を御存

分に遊ばして下さいませ、その子ばかりは……」

浪江「この子が可愛と思召すなら望みを叶へ

は……」

お關「なにをなさるんです」

浪江「黙れ。」

お關「なにをなさるんです」

浪江「黙れ。」

お關「なにをなさるんです」

浪江「黙れ。」



て下さるか」

お關「それぢやといつて、女が操を」

浪江「否だといへば、この子を殺すまでだ」

お關「それは短氣で……」

浪江「然らば、お得心下さるか」

お關「サア」

浪江「サア」

お關「浪江……サア……」

浪江「エ、面倒だ」

お關「マア、待つて下さいませ」

浪江「それでは、いよゝ御得心か」

お關「ハア、イ」

浪江「僞はりで、御座るまい」

お關「この期に及んで、なんの卑怯な僞りなぞを申しませう。その代り浪江さま、ど

うか、私も夫のある身の上、今宵一ト夜

のお情で……」

行燈の灯は消へた。今までの騒ぎも、止んで

唯、時々、せつない重苦し相な呼吸が風の吹

き具台で聞へて来るのみであつた。

「御新造！ 今けへりました。もう休みでげ

えすか」  
それは、重信の寢着を取りに歸つて来た。

下男正助の聲であつた。

三

「喃！ 正助、俺と兄弟の杯を交はさうではないか」

南禅院の壁畫も、後一兩日で片附くといふ

前の事であつた。磯貝浪江は、主人の御供に

往つてゐる正助を料亭花屋に招いて、こんな

取止めもない話を持ちかけた。

「實は正助、土地を若干買つて百姓をしてみ

たいと思ふんじや、それで、お前が、手引き

やら相談相手になつてはくれまいか、それで

お前と兄弟の杯を交はしたいと申したのじや

ハ、ハ、ハ、

生來正直な正助は、それを眞實な事だとし

てしまつた。

「左様うか！ 聞き入れてくれたか、ぢや、

今日は、大いにのむ事にしやう」

このお人好しの正直な彼にも、一つ悪い僻

があつた、それは酒をのむと彼には、事の善

悪を區別する理性がかける事であつた。この

悪僻を知つてゐる、浪江は、余程酒も進んだ

「喃！ 正助、兄弟といふ者はお互に助け合はなければならぬものだのう」

「それや左様でげえすとも」

「それで、お前に折入つて頼みたい事がある

といふのは、……實は吾が師、夢川重信は我

が父の仇敵である」

さすがの正助も、この事だけは信ずる事が

出来なかつた。然し、彼の名は、眞與島伊惣

次である事亦二百五十石の知行を頂戴してゐ

た事、殿の御前で武道の口論で、眞與島が自

分の父磯貝靱負に敗けた事を意恨にして、殺

した事等を話した。初めの中は信じなかつた

彼も、余りに話のツヂツマが合つてゐるので

馬鹿正直な正助は、とうとうそれを信じて仕

舞つた。

「正助！ お願ひだから、助太刀をしてくれ

なに否やだ、否だと申せばお前の一命を頂戴

するまでだ」

生命惜しきに、酒に酔つた正助は、浪江の

計畫に總り乗せられて、現在大恩ある主人、

重信を暗殺する事に承諾をして仕舞つた。

四

畫師、菱川重信が、落合村の田島橋で不慮の横死を遂げてから半年も過つてゐないのに、お關の腹には、もう浪江の子を宿してゐた。

正助を吾が手に入れ、重信をなき者にした浪江は、扇折竹六といつて當家に入入りしてゐる商人を我が意中の者にして仕舞つた。表て向きはこの竹六は世間で、この菱川家の跡を浪江が繼ぐといふ事にした。然し、その時分には、もう、正助の姿も、亦重信の子の姿も見へなかつた。

### 五

話以前に起ち返へるが、正助も、重信の子も居た時分の事である。この菱川家に訪れて來た男があつた、其の男の名は、蟬の三次といつて、昔、浪江の手下になつて働いてゐた男である。

上州の國元で御近習役を勤めてゐた、佐々木繁は、この三次を召使つて、谷家の御金藏に忍び入り、御用金千兩を奪ひ取つて、共に京都に姿を消して仕舞つた。二人は晝夜遊里に身を持ち崩して、遂ひに、江戸へ姿を現し

た、其の時、佐々木繁は、磯貝浪江と稱してゐた。

「お、三次かー 久し振りじゃのう、して亦無心に參つたのか」

「旦那！ いや浪江様、そう水息く謂はなかつたつて良いじゃありませんか、然し今日は無心に來たのではありません、一寸、味なものを御見せし様と思つて、態々やつて來ました。旦那、この品にはお覺へが御座いますか」浪江は驚いた、驚いたのも無理からぬ事である。

「旦那！ 覺へが御座んしやう、忘れもしねえ、五月十三日の晩、雨氣をふくんだ臍ろ月夜の事でした。田島橋の藪中で拾つたのが、この印籠です。後の證據になる高價な品でげえすが、三百兩ならお別け申してよ御座んすなア旦那如何なもので」

浪江は出来る事なら、もう少し安く値切つて見たかつたが、相手は三次の事なれば、聞かう筈もない。仕方がないから、その印籠を云ひ値の儘に買ひ取る事にした。然し浪江も三次に勝つても劣らぬ男である。

「では！ 三百兩！ それに一寸お前に頼みたい事があるんだが」

「何んな事で御座います」  
兩人の會話は誰にも解らぬ様に耳元で話された。それは、重信の子、眞與太郎を殺す事であつた。

### 六

早い物で、浪江が菱川の家督を継領し、お關を我が物にしてから、もう五六年といふ星霜は過ぎ去つてゐた。世間の人の噂も、立ち消へた或る夏の事であつた。

「お新造様！ 御様子は如何で御座います。へい、お貰ひ遊ばせ、これで御座います。竹六は包の中から、余り大きくもない竹筒を出した。

「左様かー どうも有難う、乳のしたる様な榎といふのは如何な木であつた」  
「ハイ随分大きな榎で御座いました、それへしめ縄が澤山張つて御座いました。其の上癒つた人からの繪馬が澤山で、門の脇の茶店で正助に……」

「正助に……」

浪江は鳩の様に温しく、蛇の様にさとかつた。彼は過去から現在に至るまで、正助が、眞與太郎を里子にやるといつて出て仕舞つてから、家に歸つて來なかつた事、それと同時に、鱗の三次に道で二人を殺してくる様に頼んだ事、次から次へと、想像を遡らして見た、そして最後に、正助は緋馬在の生れで、赤塚とかいつた事と、榎の在る赤塚とを考へ初めた。

「左様だ！ 正助と眞與太郎は其處にゐるな」とハタと手を打つて、今、まさに、彼等二人を殺しに行く可く立ち上つた時である。榎の汁で、乳の痛も止んだとみへて、スヤスヤと寝てゐたお關が突然狂つた様に叫んだ。「お、痛い、御許し下さいませ、私が悪う御座いました。悪魔！ 浪江さんはこはいあゝ殿！ 殿！」

お關の聲はうすらへて、重信の聲に變つて來た。  
「汝よくも、執念つきをつたか」  
極度にまで興奮した浪江は、脅へ狂つてゐ

た。

「エ、面倒だ」  
血に狂つた彼は、その手で！ 一目散に、赤塚の方に走つて行つた。

七

松田門脇の前まで負ひ詰められて來た時、物見だかい参見人は、もう三人を十重、二十重にとりかこんで、人垣を作つてゐた。  
「待て！ 正助！ 悪事を隠さん爲めに、よくも浪江を敵にと今日まで覗つてゐやがつた。エー！ 片腹いたい、小兒諸共、眞ツ二つに」

鼠が猫に出遭した様なもので、負ひ詰められた、眞與太郎と正助はどうすることも出来なかつた。たゞ、おめくと浪江のする儘にまかすより他に道はなかつた。  
「エイ、覺悟せい！」  
刀は二人に振り下るされ様とした時、群衆の中より、

「待て！ 佐々繁！」  
浪江は自分の本性を呼ばれて驚いた、振り

かへつて見るとそれは、自分が御余藏を破り御用金千兩を奪ひ取つた時、お金預り役であつた松井數馬の伴三郎であつた。  
「實にそちは」

「谷山羽守の近臣、松井三郎、汝の爲めに惨死を遂げた、お關のためには従弟である。柳島の家は今参り、話を聞いてかけつけまいつた」  
「父の仇、重信、お關の仇！ 尋常に勝負せい」

「エ、イ、おのれ！」  
浪江は死者狂ひで、切つて切つて切りまくつた。然し三郎の敵ではなかつた。  
「それ！ 眞與太郎！」  
「お父つあん敵！」

幼い眞與太郎は、不思議な廻り遣せの三郎の助太刀で、父の仇、母の敵を打取る事が出來た。

—了—

# 伎藝座を見て

高安吸江

近頃での囃しかつにもの、一ツとして數ふべきは、此八月浪花座で公演せられた第二回技藝座である。私はたしかに其中に漑む力と熱と、そして愛とを感ずることが出来た。

若くつて美しく、天をも衝かんその意氣、此等は第一回の時にも認められた。生れ出る情みと創造の歡喜、それがやがて純真な明るさを彼等に與へたのである。しかし昨年には唯それだけだつた。激刺たる生氣以外に、必ずしも大なる收穫があつたとは考へ難かつた。それで今回も亦大體そんな事ではないかと怪ぶまれて居た。その豫想に反して、師匠や先輩の熱心な指導と、それに對する彼等の敬虔な心持とがうまく融和して、未成品ながらも十二分の効果をおさめ得たのは前回に比して實に驚くべき進歩と云はねばならぬ。

一體昔から名人と稱せられるものは多く依姑地で、容易に門下の質問に答へず、隨分意地悪く虐めた話などがよく傳へられて居るもので、中々手をとつて教える處ではない。然し一方には左様でないものもある。是は能樂の

## 政治師の忠信



方ではあるが、先年故人となつた金剛謹之輔翁などがそれで、殊にその晩年には、翁が年來の苦心によつて習得したその技藝を出來得る限り後進の爲に遺して置きたいと、流儀の如何や事問家と否とを問はず、苟も元道に忠なる人には喜んで傳へるべく、種々な方法であらゆる機會を捉へやうとつとめて居つたに拘はらず、門人等あまり質問してくれぬと歎じて居つた。今回技藝座同人の背後に盡力する諸先輩が、果してどんな考であつたかは知らないが、初日に於ける御大腸治郎氏が



あの蒸殺されそうな暑い日に、暮毎に樂屋から見所へと眼まわろしい往復の参や、棧敷の京屋君が時姫や清姫の登場と共に、其仕草につれて首や身體を動かす素振は、私等第三者さへ感激なしには見て居られなかつたのである。

それで舞臺の人々はまた其師に對して柔順で、かたくその訓を守り、一舉一動寸分も違はぬやう、極めて忠實に演出しやうとする努力は實に目覺ましく、教えも教えたり、覺えも覺えたり、盛綱ではないが双手を上げて『賞めておやりなされ』と叫びたくなつた。

斷つておくが、こゝで教はつた通りを其ま

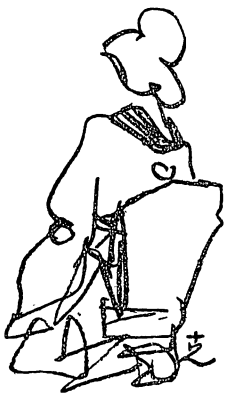


まに演ずると云ふのは、在來の所謂ちんこ芝居が鼻筋に喜ばれた、小器用な先輩の模倣では決して無い。彼等は型と云ふよりも寧ろそのものの模倣で、手近な例では、其人の習癖のみを呑込むことによつて成功する聲色つかひと似て居る是等がすべて失敗であつたのは普く人の知る處で、今更述べる必要もあるまい。

技藝座同人は幸にまだ此様な邪道へは落ちては居なかつた。例へばひとしの時姫にしても、型は無論のこと其衣裳までも、最近天満や名古屋で雀右衛門が演つた時と其まゝで、同優から親しく手をとつて教えられたものであるが、私等はそこに京屋の香を感じることは出来なかつた。政治家の佐々木でも是に似たことが云ひ得るのである。此事についてはまだ充分に私の考へを言ひ盡せないが、とにかく是等の人々が、傳統的に鍛え上げられた古名優等の型を、諸先輩から懇切に教えられて、其苦心のあとを痛切に體驗し、根本的に技藝の眞髓を理解しやうとする努力を私は喜ぶのである。感受性に富む青年期に、しか

も名人上手と稱すべき人々の猶現存して居る今日、其指導によつて刻苦奮勵、古典劇を研究して實力を養成し、先人傳ふる處を盡く消化し得る時、始めて自己獨得の境界に達することが出来る。所謂百尺竿頭一步を進めたことで、獨立獨行、大自在の領域に闊歩し得るのである。

右若の・あくる、



終りに一座を通して特に注意してほしかつた事を附記する。それは臺詞まはしや其發聲法の研究が不足して居る點である。一例を云へば三浦之助が井戸へ向つて佐々木に呼びかける處など、如何に手負であるとしても、其發音に底力を加へ今少し音楽的であつたならば、あの美しい繪模様様の場面に一層光輝を添

えたらうにと、非常に惜しく感じた。此等の缺點を補ふにはやはり聲曲の練習が必要で、それには長唄、常磐津、清元或は謡曲でも何れでも良いが、關西人としては義太夫が適當であらう。これは舞踊と共に是非とも一同に勧めたいと思ふ。

藝術は永久である。伎藝座の人々が踏み出した精進の第一歩は祝福さるべきものであつた。私は彼等同人すべてが有つプラス、アルファに大なる未來あることを信じ、衰滅を叫ばれて居る歌舞伎劇の勇敢なる闘士たらん希望を述べて此稿を了る。

# 伎藝座管見

大西利夫

◇今年の伎藝座を見て何人も先づ感ずることは、去年よりも皆が非常にうまくなつたといふ事であらう。去年より今年、今年より来年といよ／＼益々皆が上達してゆけば結局數年先、十年先には、大阪は名優で身動きもならなくなるかも知れない。まことに結構な次第である。但しそれら名優の卵子の中からでもどんなあひるがとび出して親雛を面喰はせまいものではないと思ふところから、目につい

た座員諸君の素質に寸評を試みる。  
◇中村政治郎——何といつても一座の棟梁たる素質をそなへてゐる。藝がこせつかない事大まかで素直で温潤である事など、このまゝまづ直に大きくなつてゆけば、將來大阪劇壇の潮をなすかも知れないと思はせる。この人の缺點は鋭さが缺けてゐることである。それは同時にこの人の長所であるからさう神性質に拂ふ必要はない。従つてこの人に小器用

なことをさせないがよいと思ふ。今度の伎藝座最出色の出来と私には思はれる千本の忠信の振は誰の振付か知らないが莫迦に技巧本位でいやな所が多く目についた。多分東京流のものだと思ふが、大阪流のもつと間のぬけ



た振にしたら此人の藝は一層光つたかも知れない。  
私は特にこの人のために世間及び中村福助氏に望む、どうかあまり早くからおだてあげ

ひとしの・静市前



克

て横道に外れてしまはないやう十分に注意してほしい。

◆片岡ひとし、この人は正に麒麟児である。

玲瓏玉の如しとはこの人の藝である。その代りに非常に冷たい、これはこの人の非常に大きな欠点である。今度の伎藝座では何といつても人形振の清姫を私は第一等の出来だと思ふ、否伎藝座といふやうな小さな範囲でなく

東京大阪を通じて、第一流の俳優の間に伍しても、今日あれ程の人形振を出し得る俳優は恐らくあるまい、と思ふ程私は激賞する。こ

の激賞は此人にとつてはあまり有り難くない筈である。それ程この人の藝は冷たい。この人の藝を見てみると、平生この人が藝——技巧の修練に如何に精進してゐるか分かる。

伎藝座人多しといへども藝の修練にかけては此人の足下に及び得る人はないと思ふ。それ程巧みである。と同時に徒らに技巧に終始して生氣に乏しい。これがこの人を冷たく感ぜしむる所以でもある。もしこの人が技巧をす

て、氣持にもつと目ざめたならば、將來關西劇壇の争覇者たること期して待つべきである

この人並びに片岡我童氏の反省を望む。

◆中村鴈之助——この人はひとしとは反對に氣持の人である。と同時に藝の修練が足りない。藝は能ふ限り修練しなければならぬ。

さうしてその修練したものを能ふ限り棄てた所に味がある。私がひとしに望む所は後者であるが、雁之助といふ人には前者を望む。この人は新劇に十分な理解をもつ人であるから氣もちを出すことには造詣が深い。今度の三浦の助などは全く氣持の人として成功してゐると思ふ。内面的な點ではこの三浦之助は今

度の伎藝座隨一の出来と褒めてもいいと思ふ

◆市川右若——この人の藝は既に出来上つてゐる。輪廓も内容も既に一人前として押し出して恥かしくない程に熟してゐる。それにしてもこの人の年齢が若すぎる。もつと下手であつてほしい、もつと未完成であつてほしいでなければこの人の將來は小さく固まつてしまふ怖がある。

◆片岡我久之助——この人は幸の丸時代より藝が荒つぽくなつたのはどうしたものであらう。今年見て著しく目についたのは柔らかさ

が失はれてトゲ／＼しくなつた事である。恐らく客氣が出て来たのではあるまいかと思はれる。十分の心もちを八分乃至七分に抑へて演出しなければ味といふものは出るものではない。苦言を呈して第三回伎藝座の演出を期待する。

◆中村福萬壽——この人の舞踊の素質は立派なものである。大阪に舞踊家の少ない今日、私は特にこの人の将来に囑望する。唯見うけるところは平生の修練に血の出るやうな鍛練を欠いでゐるやうである。振を習つておぼえらるゝいふだけが舞踊の修業ではない。もつと眞剣な工夫鍛練を必要とする。此人もし自己の天分にほんとうに目ざめたならば、將來大舞踊家として關西の劇壇に重きをなすこと期して待つべきである。

◆中村魁童——この人の藝は中村魁車氏のあつた一面を如實に代表してゐる。但しそのいゝ所も悪い所もつゝ込みで代表してゐるのは、少し面白くない。この人持前の愛嬌を誘導したならば一寸類のない面白い俳優が出来上るだらう。私はこの人を主人公にした悲劇(喜

鳥之助の  
三浦之助



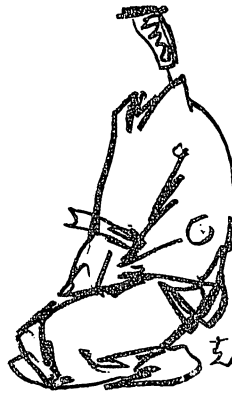
劇ではない)を書いて見たいやうな氣がする。◆實川八百藏——この人の藝は下手である。さうしてその下手であることを誇るべきである。この人は延若氏の如き器用な技巧を學び且つそれを目標にしてはならない。この人の

活路は別にある。昨年の白虎隊の力士の演技と今年の權太の演技には格段の相違があるのを見てもわかると思ふ。ものが違ふからその優劣を比較するわけにはゆかないが、昨年の力士は生きてゐたが、今年の權太は模型出品



に過ぎない。尙ほ此人は聲の修練を必要とする。決して悪い調子ではない。唯鍛練を要するだけである。

### 福万喜の彌助



◆中村扇——聲の修練を要する點では八百藏

以上である。この人が名調子の人になることが出来たら、將來關西劇壇一方の重鎮となるであらう。この人は努力の人である。その藝を見てみると一舉手一投足悉く工夫を重ねたものであることがわかる。その心がけを永久に持ちついでてほしいものだと思ふ。

◆阪東ゆたか——すべての點に於て未だ幼ないが、藝に癖のないのが何よりうれしいと思ふ。このまゝすらりと大きくなつてゆけさうな人である。勉強第一である。

◆實川芹雁——この人は藝が疎漏である。舞臺に注意が足りない。この點は大に戒むべき

である。横着で疎漏なわけではなく知らず知らずに注意がゆき届かないのであるから、少し修練すれば改むるのにむつかしい事ではないこの人も聲の調子がよくない。

◆實川美扇——この人は立派な實力をもつてゐる人である。前に我久之助にいつたやうな實力のあつたけを出さうとするために藝に味がなくなる缺點はあるが、もつと場数を踏んで洗練をしたら意外な大物になるであらうと思はせられる人である。容氣を慎んで勉強してほしい。

### ◆役配座角◆

新組織の昭生座は三十一日より開場  
晝夜二回にて、第一段春人氏新作カフ  
エー夜話『きもの』二幕第二川村花菱  
氏新作『醫者の家』一幕第三圓朝口演  
木村錦花氏脚色發端『眞景累ヶ淵』宗  
悦殺しより新五郎捕物迄、三幕にて總

#### 配役左の如し

深見新五郎、無頼漢甚太梅島) キ  
ネマ監督葉山貞二、松本仙吉、上方  
者平助(松本) 家主久兵衛、若イ者  
源太(和歌松) 深見新左衛門、志賀  
の第四郎(加藤) 流しの按摩、下總

屋惣兵衛(高梨) 岡田泰雄、手先金  
太郎(高田) 醫師志賀泰三、皆川宗  
悦、無頼漢馬吉(小織) 女給百合子  
宗悦の娘お園(東) 女優青柳みどり  
富本豊志賀(近松) 志賀の妻初子、  
深見の妻澤野、老婆お鐵(米津)等。



# 『保名物くるひ』に就て

食 満 南 北

松竹座は春の踊以來何んだか私の年中行事のやうに何かしら申しつけられる事になつてゐます、實はかねて猿之助君に聞いた世の助を描いて見やうと思ふたのですが、扱改めて猿之助君に申込むと、あれは僕がやるまで見合はしてくれといふ事でした。それで急に思ひついて、『保名物くるひ』をやつて見たのです、これは芝居や丸本の保名とはすつかり反對で發狂をあとにして狐を助けるのから出立したわけです。

物くるひの動機がすつかり反對になつてゐるのも變つてゐると思ひます。それに一つの舞踊に兎も角も一つの筋が解るのもちよつと變つてゐると思ひますが、恐らくこの一幕を出したなら『尾上屋を架するもの』とか、つまりは『蛇足』で

あるとか、例によつてさうした批評を耳にする事だと思ひます。たゞ樂劇部の生徒といふものを比較的よく識つてゐるだけに、飛鳥なり、藤代なり、香椎なりを兎も角働らかして、さうして松竹座らしいカラーも見せ、長三郎氏には又長三郎氏だけの腕を見せて貰らふにはかくした事より仕様がなかつたのです。はじめ同じ場面で、雪月花をさかすつもりでしたが、舞臺意匠の大森正男氏からは是非三場ともかへてくれいとので、スツカリ違つた場面にする事にしました、さうすると又二場目の世話家體が大變問題になつて、あれかこれかといろく工風したのですが、繪にすると演出に差支へ、ツブの世話屋体になると松竹座といふ建物とあはなくなつたり、つ

まり大森氏や伴君やいろく相談の結果、鶴式になつたわけです。

筋附には可なりそれくが工風をされたやうです、レコードに入れて稽古をしてゐるのを見て、舞臺へ立たれる人も大抵でないと思ひました。

長三郎氏が、

『ナア師匠、筆のさきでチヨコく描いたものに、うんと苦心がいろいろのやさかいなア』

と云はれた時は實際氣の毒なやうな氣がしました。

『飛鳥にまほろしの葛の葉』

『藤代に狐の葛の葉』

『香椎に本當の葛の葉』

と三人に割つたのも却々の苦心です、長三郎氏は『松竹座

樂劇部主演林長三郎助演見たいやなア』

と云はれたのも、ちよつと理窟のない事ではないと思ひます。

八景おどりのすぐあとをうけたので大分さうした方に見えぬ苦心をあらはしてゐます。

マア私のお話はこの事より外に大した手前味噌も、苦心談も、又改めてのおはなしもありません。

歌詞は別に載せて置きましたが、松竹座で義太夫の地を用ふのは今度がはじめてです。

それに長三郎氏の振に大分に新らしい振のある事を特に書き添へて置きます。

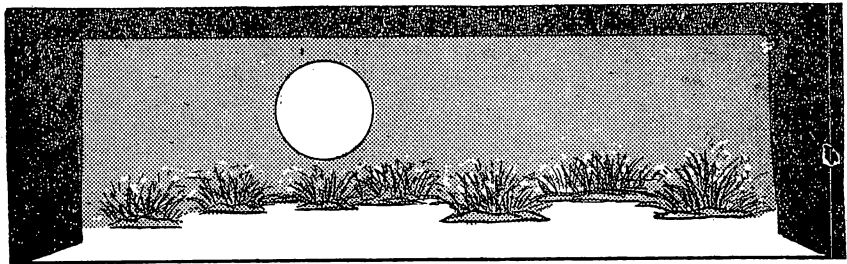
これは人様の味噌です。

## 大南北の櫻姫

中座の九月は大南北の櫻 姫 東文  
□ 章が出る筈だったが、所謂其筋から  
△ の注意によつて謎帯一寸徳兵衛とつ  
生 きかはつた、これに就て面白いゴビ  
ソードがある、其筋から本をつき戻

される前日白井社長は、不認可と夢  
を見た。さうして個處々々の訂正を  
自分で考へてゐたのである、其處へ  
本部係の長鳥が戻つて来て、

といふなり社長は  
『それならこう訂正したらよい』  
と言下に答へたので、一同其機敏  
さに驚いた。



きしけの野秋る亂草秋り茂芒 卷の月

松竹座九月上演

# 保名物くるるひ

雪月花

作歌

食満南北

月

われ歌へば月徘徊し、われ舞へば影凌亂す

秋野のすゝき、露の玉、ちりしく夜半の鐘

の聲

ぬしは誰とも白羽の矢、おどろき亂るゝ白

狐のひとむれ、

スワあやうしと見えたる折しも、駈けよつ

たる安部の保名、

情のいづみ、袖のかけ、千枝にやしけき思

ひぐさ、そも千載の歌まくら、

さくる矢先きを受け損じ腕にスツクと立駈

ともかくに、しげき思ひのたぐひかかな。

信田の森の秋の夕つけ、

すそもほらくかけよつて。介抱如才なく

ばかり、

やア媛か、

もつるゝ糸の糸すゝき、葛の裏葉の戀のう

た、風にみだるゝ我が思ひ、

百歳へたる業通に、媛の姿をかりぎぬの、

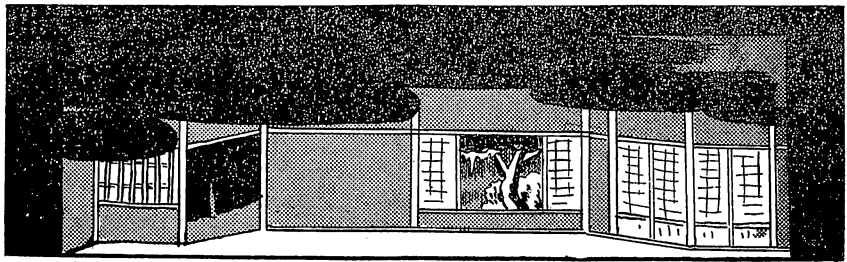
情の恩のかへごと、

思ひ思はれ思ふ中、その戀風の中ぞらに、

ほのめかしつる甲斐もなく、

つれなの君とよりそへば、くだくる心くだ  
かけの狐わなにはあらねども、いつかなび  
きて秋ぐさの、





家の名保 巻の雪

露の重けのわれもこう、われは化けたと女郎花、誰の姿をかるかやの、ゆかりの桔梗萩の風、

はなれがたなき其の風情、赤繩此處にむすほれて、ハヤ七とせの夢のあと、きえて年ふり。

雪

さむるともなき戀の庵、其やどしむるいとせの、二人の中の子に、憂を忘る忘れぐさ、

オツ童子か、

こへと抱きよせ、思ひぞいづる七とせのその春秋の櫻花、花さきちりしき實をむすび、いつか三人はこの里の、

里のみやけに笙の笛でんでん太鼓、おつゞら馬にシットンシットンシットン／＼あやす拍子も親心、

晴れてなア、晴れてのこりの雪解の道にふりこめ／＼ふりいだす、アリヤリヤ、コリヤリヤ、ヤレコノヤレコノこれわいさ、

追はるゝ媛はほら／＼と、この家を目あて走りより、

助けてたべと保名の袖、思はず見かわす顔と顔、

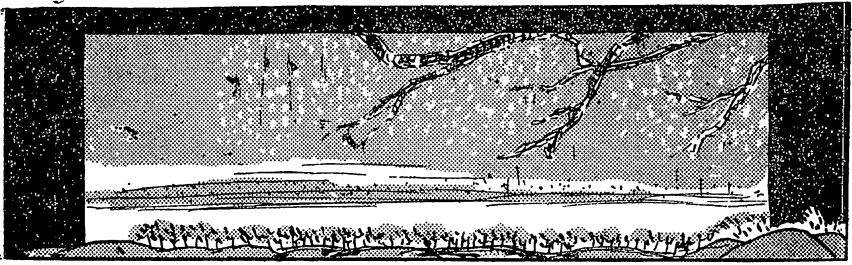
ヤツ媛、オツあなたはとすがりよる、見かへる妻はかたへなる障子にかけをかくろへて、姿は見へず失せにける、

ふしんと思へど眼前の、媛にとかうの言葉なく、母様のうと慕ふ子を、抱きしめ／＼うつとりと、見やる保名の顔かたち、燃ゆる思ひを押さへかね、

仇し仇浪よする波、ちぬのうらわのうらみごと、かりねの床か白砂の、雪に不淨はつめども、包みかねたるたをやめの、とけかぬる身の思ひぐさ、馴れにし衣は脱ぎすて、肌身にあわぬかりごろも、

うち君とこそ見まひらす、そもや妾はいかにせん、うらみ恨みて葛の葉の、涙玉なすばかりなり、

戀ひしくばたづね来て見よ和泉なる、信太



島菜の面一櫻 巻の花

の森のうらみくづの葉、  
ヤア母様かと走りよる、ぬしはそれとも白  
雪の、したふや妻のかたみの小袖、  
狂るふや駒の心の手づな、

花

戀ゆへにくるひくるひし葛の葉の、かたみ  
の小袖かきいだき、花に嵐の花吹雪ものは  
云はねどむなしくも、ちりしく野邊の朝き  
よめ、

姿もみだれ氣も狂ひ、まほろしに見るつま  
のかほ、

オツ葛の葉そこにか、何ぢや、何のそなた  
も百歳の業通得たる、身でないか、一旦ち  
ぎりしめをと申、信太はいづくいづみなる  
心も上野春がすみ、はりしあづさの弓づる  
も、はなれてくるふ小車の、

片輪車のかたながれ、水にみだる、花びら  
の、行衛はつまの里の方、はるかの神に大  
歳のひぢりに夢はなきものを、われは凡夫

のあさましき、

妻にはあらぬうたかたの、そのまほろしの  
ゆめ枕、戀ひしき人を見てしより、たのみ  
そめにしうつ、か人か

誰に淡路のなア、淡路通ひの小舟につんで  
戀の重荷のエンヤラサ、通ふ千鳥に文こと  
づて、聞く辻占の松風に、サツサ諷へや  
入舟出舟、エンサヤンサのふなうた戀し、  
戀ひしき人の面影に、

あなたへかける、こなたへ走り、

追ふや胡蝶が菜種の花か、

飛び交ふ蝶のくるりくるり、蝶よ  
胡蝶よ、ヒラ〜、花に戯れ、ヒ  
ラ〜

又も狂ひて君様こひし、たづねていづこ和  
泉なる何を信太の森のかげ、

古跡にのこす稻荷のやしる世々に傳へて。



芝居の秋

川尻清潭

名月や峰に松ある道具帳  
 朝寒やわきすぎて居る樂屋風呂  
 肌寒や打上ける時の山おろし  
 山彦の鼓は秋の音色かな  
 秋風やまはり舞臺のうら表  
 山木戸に女衞の駕や柿紅葉  
 風音の秋は秋なる舞臺哉  
 親のない子役の出来や秋の風  
 踏しめる奈落の秋や古むしろ  
 きつぱりととなる合方の夜寒哉  
 初袷うしろ向きなる出打ち哉  
 まだ一つ大喜利のある長夜かな  
 裏木戸や舞納めたる今朝の秋  
 新道に聲色の橋の夜寒かな

喫煙室

高橋 蓼雨



浪花座（電話）  
浪花座（電話）

「モシ、市川エテ之助の芝居は何日まであります」

「エテ之助……市川エテ之助……其役者はあらしまへんで……」

「割合にさとりが悪いな、市川サル之助では客が去つて縁喜でもあるまいと斟酌してエテ之助といひかへたのがわからぬかッ」

「あゝ、判かりました、猿之助さんのことですかいな、ほゝ、ほゝ、ッ」  
「フーム、あれ、猿之助と讀むのか、そやあやたら番附ヘル

びつねと、ヤムこしいで」  
電話式部三つもあるやうな眼を剝いて

「謎かけみたいな電話やし」



その猿之助の猿八戒がゼンマイ仕掛の花車へ飛び乗つた拍子に過まつて泣り落ちた。

弟の八百藏抱腹

「イヨツ、澤湯家ッ」

末弟小太夫も吹き出し。

「コレ所謂、猿も木から墜ちる」

猿之助活ツと白歯を剝いて

「まづい洒落たね、それも言ふなら、猿も器械から落ちる、といふんだよ」

この三人、本當の兄弟にみへぬ。



播州血屋敷で鱒三郎の鐵山が寶物の皿が一枚たらぬとて、扇雀のお菊を井戸車へ吊るし、刀すらりと鈎瓶繩を切つて落す。

「あれ何してはりまんね」

出孫の舞妓すかさず

「あんまり暑いよつてお菊を井戸へつけます」

この妓、なか／＼日本語が巧い。



古手屋八郎兵衛が千日寺の場で血糊をつけぬと芝居ができぬついたら其筋の眼が光る。

幕がしまつて役者の部屋へ警官が訪れて衣裳をしらべたら塗つてあるのは糊紅でなくて涙であつた。

が、それでは厳めしく佩きし劍の手前警官の面目が立たぬ、頭取を臨臨席へ呼んで

「假令、それが泥であらうと紛らはいから塗もの一切ならぬ」と槌柄づく

いんまに

「役者は白粉ぬつて舞臺へ出るべからず」

「娘はクリームぬつて外出すべからず」

「左官は土をぬつて屋根へ上るべからず」

といふお觸れが出る。

「コレ見たまへ光秀どの」

と、三ツ兒も知つた名文句を

「コレ御覽あそばせ我夫さま」

と、改悪しては語呂も悪からうし、近松柳 湖水軒等が合作の繪本太功記とは縁が遠く、恰で



新作、尼ヶ崎の兩雄、といったやうな観ありて不評です」市川蓮女、つき裕におちよぼ口。

『これは先代秀調の型かへたところが好評でしたが、今日は時代おくれと申されますか。でもね、寒い時ならあまくてよろしいが少々辛くないと異中はつまいと思ひまして……』心太であるまいし。

◇ こゝまで書いたところへ八月號は臨時休刊。依て、前約は取消して、更に九月號へたのむと姥谷氏から虫のいゝ交渉。

◇ それは判かつたが、額から流れた金米糖のやうな汗のしまつは什うしてくれる。

八月の淨花座は青年の、第二回伎藝座公演、初日の前日、鎌倉三代記舞臺稽古の際、中村鷹之助の三浦之助義村が扇を煽と開いて中村政治郎の高綱を招く棧敷で觀てゐた中村鷹治郎が

『三浦之助は必死の手負、颯々と陣扇を開いては不可ぬ』と、自身井戸へ寄つて手にとつて教える。

◇ 佐々木も、時姫も、富田六郎も、おくるも、二人の扇も、ばばも、銘々ちよつと扇を開いてみる。

◇ 即、一時に三浦之助が八人あまり。

『揺れるから怖はいわ』弟子の松壽、黒頭巾をめぐつて口を尖らし、

◇ 『蛇になつて安珍を追かける清姫さん、その位のこと怖はうて什うしまんねん』と、金槌もつて來て杭の尻をカーン。

◇ 良川芦膺は師匠から、『人里離れた山間へ往て思ひ切り聲を出し、咽喉を破らねば調子が極まらぬ』

◇ といはれて、朝まだきから大軌に乗つて、ケーブルカーで生駒山の絶頂へのぼり、『おめず、おくせず、つん出るえ——』

◇ 薪拾ひの小供びつくり仰天。『ソレ、お化ちや』籠を捨て、麓へ逸散。

◇ 神戸八千代座千秋樂の夜の終列車へ、中村扇雀と喫煙子の二人のみが借切同様に乘つてゐるところへ、薩摩上布にチヨボ鬘の若紳士がツカ。

◇ 『あなたは扇雀さんですか、僕はいんま幸四郎の大森でああなたの千早娘を觀て來ました。中學時代には故郷備中からワザ／＼高松の大和座へ出て近八を觀ました、數年後、三高時代に京都の明治座で近八をみました、高松で小四郎役のあなたが、はや盛綱に扮してゐました……』

◇ 或は大坂、或は名古屋と列車が走れば走るほど紳士の舌は滑らかに廻轉して、さしもの扇雀

「受返答の隙さへ與えぬ。

下車に際して出した名刺に、法學士辯護士とある。扇雀會心『ひよつと女のことです訴訟でも起つたら、あのお方をたのみませう……』

實川延若、坂東壽三郎、淺尾大吉、中村霞仙等銘々言ひ合はしたやうに支那服で梅田から乗り、神崎驛で松本幸四郎と落合ふ、有馬入湯の中村魁車も偶然同車。

「山陰道へ避暑巡業ですか」「賃は幸四郎君の良縁を出雲へお祈りのため……」「ならうことなら安來節の巧い十八、が授かりますやうに」蓋し、幸四郎としては力一杯の洒落。

丘ナヲミといふ松竹の斷髮女優、モダーン、ガールの標本は手前でごさいますと巴里夜會振きの洋装よろしく、日盛りの道頓堀をひらりしやらり。

頭取の岡六摺れ違ひさま銅羅座。

「ヨウ、オケラ團長ッ」

戎橋南詰派出所の巡查の眼がチラリと光る、ナヲミ鳩胸をつき出し。

「オケラ團長つて敢て不良少女とは違ひます、オケラは、オハ

ーオケラの略語です、オハはお金、オケラは皆無、即小遣錢皆無といふ妾達の符牒でございますの、ほムムッソ」

巡查啞然。

骨身を削いでも息子の出世を手繰る思ひの中村市郎の母、

松竹座へ八月に臨時出勤した市郎が、女優から先生々と崇めらるゝと聞いて飛び立つ思ひ「女優さんに歌舞伎の女形を教えるのなら、よほど注意したはれや」

市郎手をふつて、

「私が教えておますのは芝居とは違ひます……」

こゝは朝鮮北端の

貳百里餘の鴨綠江

流れば廣莫南滿州

酷寒零下三十餘度

卯月の半に雪消す

暮がしまつたら、こんなはやり

唄を教えて頂戴と、女優さんが

つめかけます」

岐阜劇場へ出勤する子供の小鷹の乗つてゐる汽車が琵琶湖上

の鐵橋を走る。

「大きな河やわ……」

母親微笑、

「コレ河とはちがひます、泉水です、よう響えときなはれや」

傍から老人が

「河でも泉水でもありません、日本一の湖です」

「お母アちゃん、コレ泉水やらへんで、よう響えとき」

と、鋭い逆襲 小鷹の母北側の車窓へ脚をあづけて腐つた蛤のやうに、しばらく口をあけつ

放し。

「東京の食物はまづい」

「大阪のものは食へぬ」

「では、大阪へ働きに來ないで

東京へ歸れ」

辨天座で下夕廻りの喧嘩、幹部某が引とつて、

「またいやしき食物の喧嘩か、さういふ下司根性ゆへいつまでも頭があがらぬ。

昔、織田信長入浴して食物がまづいと怒つた、料理人は一ヶ月の御猶豫を乞ふた、果して都の食物が信長の口にあひだして莫大の御褒美。

信長やがて尾張へ歸つた時には既に彼れの舌は都化して、子供の時から食べ馴れた田舎の鹽辛い食物は再び信長の咽喉を通らず京から料理人を呼び寄せたつまり、口に馴れたものがうまいのである、以後、さもしき食物の喧嘩は一切ならぬ」

叱りちに親子井一箇づゝ與えた。すぐ箸を割つて井をつゝき、

「なるほど、大阪の井はらめへ早速食物の喧嘩」

有福と音に聞えし天下茶屋の嵐巖笑の宅を訪ねた道頓堀のひま人。

「植木を弄るでもなく、海水にゆくでもなく、一杯のむといふでもなし、うなる程お金をためて一つたい何がたのしみです」

「私の道楽、それは、時計の音を聴くのがたのしみで……」

「へエ、妙な道楽もあるもので……」

「時計がコチツといふと銀行の利子が殖えますから」

「あゝなるほど、當今は日歩でなく、時間歩といふのが流行ますか」

相良洋子といふ兎てもモダインの松竹の會計カールは毎日海水に行つてチャブ。

やけもやけたり、いもりの黒

焼、眞黒々助、熊野の浦の河太郎の助を向ふへ廻はしても敢て遜色なしといふ皮膚の色。

畢竟、都會にゐるから無事、これが山奥であつたら獵人が鐵砲向ける。

「てんと額の裏表が判かりまへんが……」

「さ、この笑つた刹那に御覽下さい、齒が白いから裏か表の見當がつきませう」

まるで動物園の熊。

へる人等無量十萬雲霞の如し。芝居も野球以上に熱狂する眞劍味のものが受けます……」

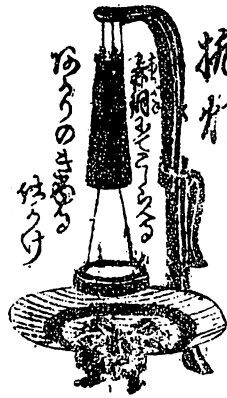
頷いたり叫びたり。

肉親の學生が加はつてゐる神港が武運拙なく高松商業の爲めに敗れて以來中村飛鶴の落膽一と方ならず、五日目は北野が同じ高松と晴れの試合。

朝まだきから郷土愛の夢破れて電車でかけつけ、スタンドへ御輿を据えて片唾をのむ。

北中また勝運に恵まれず、敵の堅壘ぬけさうになく脂汗タラタラ。

たきうちん  
振打



# 怪談『雨の古沼』

— 小幡小平次の考察 —

行 友 李 風

□ 旅役者小幡小平次の傳説として、古い所では『事實談』にある山城木幡の僧眞州、後に江戸役者小和田小平次の怪談、穴熊三平といふ悪漢に海に投ぜられ、その亡靈が女房花野の所へ歸つて来たといふ筋で、之は享保年間の出来事として記されてあるが、殺されて尙生前の姿を保ち傳へ、歸るべき所に歸つたといふ異色が蓋しこの怪談のヤマなので、兩來同巧異曲の趣向は、多く此の小平次に胎胚して居ると思ふ。

□ 二世蜀山人の文寶亭が『筆のすさみ』では殺しの場所が下總の印幡沼、下手人を役者の市川宗三郎としてあるが、海から沼に移つた點に怪談の色彩が濃くなつた。更に享和五年に刊行された山東京傳の訓本五册續き『復讐奇談安積沼』、及

び文化三年刊行の『安積沼後日仇討』で初めて事件が奥州の地へ移り、場所が安積沼となつて殺し人が鮎屋職人の權次郎最も前編では玉川主膳の仇討が主となつて居る。

□ この京傳の合巻物に依つて文化五年に大南北が筆を把り『彩入御伽草』として尾上松緑のために書き卸して大當りを取るのが小平次事件を芝居の舞臺に上演した嚆矢で、勿論世界は足利時代、更にそれから四十六年目の嘉永六年に河竹默阿彌の『怪談木幡小平次』三幕七場が上演された。役者は嵐璃狂の小平次、坂東しうかの女房おつか、阪東彦三郎の悪漢佐九郎で、これ又頗る好評に迎へられた。

□ その後同じ默阿彌に依り、安政の六年『木幡怪異雨古沼』

として六幕十六場の世話狂言となり、名人小團治に依て演じられ、凡てを江戸の世界に書き改め安積沼を綾瀬沼に持込み子役も使へば早替りも見せる大仕掛であつたが作評は遂に前作に及ばなかつたさうで、この『雨古沼』は小團治から故人市川齋入に傳へられ、渠が右團治時代には最も得意の藝として道頓堀の舞臺でも幾度となく繰返された、好劇家の耳目にはマダ新しい咄……。

□所で今度の作『雨古沼』の名題をソツクリ黙阿彌翁から借用した物の、世界は凡てが奥州で、會津領から上州にかけて執着の力、妄念の強みを覗ひ所として、特に仕掛を用ゐるにしても、成べくそれを際立たさないやう、總體の上から自然に不氣味な物凄いと云ふ感じをと苦心したが、素より莖才が、連も豫期した程の功果は覺束ない事で、凡ては下根な作者の罪。

□而も近年では故鈴木泉三郎氏の名作『生きて居る小平次』を、山口、小笠原の兩君で演じられて居るだけに、一層それと目先を變へるの必要もあり、幸ひ作者が十餘年前に某新聞に連載した舊作『三升草紙』の裡の、小平次に關する條を參酌して早忙の間に書き上げた物で、その小平次の性格にしるお近の性根にしる、周圍の人物、事の成行等、凡て幾らか在

來の諸作とは類を異にし軌を別にして、何等かの期待を賢明なる觀衆諸君に索めて戴きたい望みに外ならぬので、『小平次劇』新作の由來ザツとかくの通り……。

◇新潮劇總配役◇ 山口、小笠原、三好等の旗舉行は既報の如く辨天座に、一日より華々しく開場する、狂言は第一内山惣十郎氏作舊喜劇『親分廢業』二場第二行友李風氏新作雨の古沼四幕六場、その總配役左の如し

八百屋金八、目明し三五郎、小幡小平次(山口) 魚屋爲五郎  
新井村の多九郎(小笠原) 茶亭久作、一本槍六藏(滿喜) 目明し半七、旗本尾澤金之助(森田) 財布を取られた町人、浪人曾我部文藏(堀内) 多九郎の子分虎松(高橋) 僧了光(進藤) 絹商人玉助、宿屋主人庄兵衛(松井) 番頭喜六、目明し松造(三嶋) 目明し辰吉(横山) 目明し藤吉、浪人曾我部文吾(阿阪) 番頭角兵衛(田山) 獵師權六(藤尾) おけらの三次、伯樂吾助(小堀) 娘の父親、村の老人(油屋) 芝瓶團九郎、駕先棒(鈴木) 旅の女(宇治龍子) 三毛猫お駒、雇女お今(金剛麗子) 旅の女(小山内美代子) 旅の女(櫻木香代子) 宿引のお鳥、女中お勢(小松孝子) 駕に乗る女、女中お大(吉積和子) 衣裳屋のお勘、老婆お甚(隅田滿壽代) 娘お町妹お萩(福岡喜美子) 小平次女房、後多九郎の情婦お近(三好榮子)





# 役者商賣

梅 島 昇

こんど昭生座と名づけて小織さんや加藤さん、高田さん、松本さん、東さんなどと御一緒に芝居をすることになりました。いつまでも積んだり崩したり、だから『賽の河原劇』は何うだと半疊を入れる人があるので弱ります。

まつたく私どもの新派も手のつけやうがないほどに寂れてしまひました。急轉直下、加速度的にいけなくなりました。時代の勢か、しかも俳優のためか、脚本あるひは興行師のためか、とにかくいろいろ原因があるやうですが、先輩の人たちや各方面の先生たちがこれまでに論議されて居られますから、これからの新派を營業的に復活させてゆくことを私の信するまゝに申上げたいとおもひます。これは藝術的に議論するのでありませんから、お叱り下さらないやうにお願いいたしておきます。

×

藝人は下手も上手もなかりけり、行く先きさきの水に合はねば——で時世の流れには従はなければならぬと思ひます。一時、外國から雑多な思想が急激に這入つて参りましたが近頃はまたその新しい思想に反感を持つ人たちが澤山とあるやうに思はれます。毛斷娘が尻をふくらませてゐるのを見て喜んで居る方がある反對に『女の髪の毛の短い奴と、男の

髪かみの毛けの長ながい奴やつにはろくな人間にんげんはない』なんて、毛斷モダツ攻撃こうげきをしてゐられる方もあります。薄うすつべらな左傾さけいも、また頑固がんこな右傾うけいもどちらもいけません、米こめの飯めしを常食じょうしょくにしてゐる日本人にほんじんは結局けつぎ外がい國思想こくしやうには同化どうかしないのではないかのやうに思おもはれます。

机デスクにむかつてペンを動かうごかすときはかなり急進きふしん的な新あたらしいことを書いてる方かたの多くが、家庭かていではやつぱり日本にほんのお父ちちさんであり、日本にほんの御亭主ごていしゆであらせられるやうに思おもひます。何とか仰おつ言げんる自然派しぜんぱの有名ゆうめいな先生せんせいのお嬢ぢやうさんが、先生せんせいのお弟子でしさんと自由戀愛じゆりやうあいとやら、なすつたから、その先生せんせいがお嬢様ぢやうさまを勤當きんたうすると御立腹ごりつぷくになつたとか新聞しんぶんで拜見はいけんして、おかしなほことんの話はなしだとおもひました。けれどもそこが日本人にほんじんらしいところなのでございませう。

私わたしども新派しんぱの役者連やくしやれんの一部いぶも一時赤化じせきわしてゐたのではないかと思おもひます。藝げい人が藝術家げいじゆつかになりすまし、道頓堀だうんぼりや宗右衛門そうえもん町まちを肩かたで風かぜを切きつて歩いてゐたやうにおもひます。それは憎にくらしくつて、親おやしめなくつて、最良さいりやうも出来できなければたゞに氣障きさうでも厭味えんみでも、よくなくとも藝人げいじんらしい方がよろしいのではありますまいか。御覽ごらんにいれる狂言きやうげんも、新派しんぱは、いやに新あたらしがつて茶ちやの木畑きばたけへ飛ひ込んでゐたやうに思おもはれます。木戸きど錢せんを頂いただきいて商賣しょうばいをしてゐるのでございませうから、面白おもしろいもの

をお目めにかけなくてははいけないと信しんじます。

『勸善懲惡くわんぜんていあくだの、人情にんじやうだのと言いつてゐると、わかい人ひとたちが見みに來きないぞ』とよくお叱しりをうけますが、私わたしは若い人ひとの全部ぜんぶが毛斷モダツを禮讓れいじやうしてゐるものとは信しんじられませぬ。赤化せきわしてゐるとも思おもひませぬ。

米國まいこくから來きる映畫えいざの筋すぢの陳腐ちんぷなこと、十年じゅうねんも二十年にじゅうねんも前に私わたしども新派しんぱが上演じやうげんした狂言きやうげんと大差たいさはないやうでございませぬ。それを珍めづらしがつて押おすな押おすなの盛況せいかうだと聞きくたびごとにまた見みるたびに、新派しんぱだつてやり方かたで悲觀ひくわんするには及およばないと力ちからんでゐます。

俳優はいゆう本位ほんゐで脚本げつぽんを選えらばない方がよく、脚本げつぽんによつて俳優はいゆうを選えらぶ方がよいと思おもひます。女主人おんなしゆじんの脚本げつぽんはなるべく避さけた方がよく、女優じゆうゆう本位ほんゐのお芝居しばいは少しも面白おもしろくありません。

營業えいぎやうで興行こうぎやうするお芝居しばいには舞臺監督ぶたいかんとくだの演出主任えんしゆつしんなどは御免蒙ごめんまうりたいと思おもひます。學生劇がくせいげきや素人劇團しゆじんげくだんではないのですから……。岡本綺堂おかもとぎだうさんなどは舞臺監督ぶたいかんとくを冷笑れいしやうしてゐられました。一回興行こうぎやうでなければ新派しんぱは復活ふっかつしまひと思おもひます。先の百ひゃくより今いま五十ご主義しゆぎでなく、おもむろに大おほきくなるやうに育はぐんで頂いただききたいと思おもひます。

# 車窓漫語

加藤精一

汽車の中、A BとC、A Bは二人連れの旅行者で二人並んでゐる。Cの席が相對してゐる爲に會話がはじめられてゐる。今迄に暫らく會話の續いたあと。

A 芝居に御關係なすつてゐらつしやるんですね。

C ハア

A 噯、面白いでせうね。

A イヤさうでもありませんね、職業となりますとね。

B さうでせうね、商賣となると外から見てもゐるやうなものぢやありませんまいね。それに此頃のやうな不景氣では何の商賣も同じ苦しみでせうね。

C 全くです。其上不景氣ばかりでなく、芝居の方も何とか従來、ありきたりのものとは變つた方向に出て行かなければならない時機に遭遇してゐるのですからね。

B さうですかね、私などは全くの門外漢で何も解りませんが、芝居が行詰つたやうに其當事者達が考へられるのは、つまりは世の中がだん／＼かう不景氣になつてくる爲に觀

客が少なくなつてくるので、斯うもしたら來るだらうか彼もしたらくるだらうかと種々手を盡した末にやつぱり觀客の數が少ないので。今貴方が仰言るやうに何とか變つた方面に出なければならぬと考へはじめられたからのことではないのでせうか。

A 夫れはさうでないと思ふね。世の中が變つて行くに従つて芝居も變化して行くのが當然のことではないだらうか、それも筋道の立つた變化を大まかに觀ることは誰れにでも出来るが、筋道は勿論筋道として刻々に變動する雜多な興味感激趣味嗜好の錯雜した内心の流行を直觀して是れに従つて、後から追つかけるのではなく是れに平行して之れに投じやうとする處に推理では到底追つかげきれない苦心があるのだと思ふね。

C それに今日のやうに思想が雜多で、混亂してゐる上に大多數が主我的で神經過敏で、其上世間毎日の出來事が甚だ狂氣じみた事だらけである爲に、若し大膽に迎合的にこれに投じやうと致しますことは人間として如何にも忍び難い

ことなのです、と申しますのは假りにそれ等の悪風潮に投じて感情的にこれを煽りました場合を想像しその結果を思ひます時我日本の一臣民として果して爲し得る事で御座ませうか。此心が胸底に働き或は自覺せずとも心の底に生來して居ります以上新らしいものの撰擇に迷ひ行詰まることも其根本から見ても當然のことではありますまいか。世相の傾向を追うてあまりに絶望的であります場合もそれが現在の状態である時には之れを否定抹殺することは出来ない事ですからそこで是等雜多混亂の思想感情に筋目を立て、櫛の齒を當て綜合統一取捨純化して希望的激勵的情愴の興味深きものに作成するの大路が歴然として披けて來るのだと思ひます。目下のところ近代物も大變明るくなつて參りましたが、只その根底が淺い爲めに何だか思ひ切つて信用出来ない、打込めないやうな氣がするのではないのでせうか。

A 成程、抽象的に云つてさういふ底のものなら時機によつてその表面の形式が多少の變化を見る丈で過去と云はず將



一 精 藤 加

來と云はず堂々たる存在と其鑑賞の衰へないものでせうが、私達の素人眼から見ますと、どうか劇場へ行つて愉快で然も吃驚するやうな目に逢はされ乍ら心の底深く、何時迄も忘れられない何物かを残して頂き度いと望んでゐるのでね。

C それは私達の方でもどうかしてさういふ御希望に添ひた

いと考へてゐるのですが何分これが一人の方では如何にもならない仕事なものですから茲に又大きな苦しみがあるのです。假に此脚本ならば多少の満足も感激も全體として與へられるだらうと思ひますものも、従業するものが悉くその目的で働きますれば幾分か好い結果も擧げられるのでせうが、何しろ俳優は人氣商賣であり幕内のものは全く觀客とは直接關係のないやうな立場にあります爲に、つひ其中に目的を忘れてといふより其目的を竊かに勝手に轉換して俳優にあつては、例へば劇そのものの開演の意義を無視し破つても自己といふ個人の影響を強からしめる手段を取つたり又は幕内を働く者の『見えぬからよいわ』といった失策の爲めに共同演出の道を破る

ことが往々あります爲に或は今日のやうな主我思想の謬見が熾んな世相であります爲に演出が支離滅裂となり易く觀て居て非常に御不快な事も多いので、雙方の目的が破られる劇も少なくないことと思ひます。

B だが何です、役者が思ひく、勝手なことをするのを見て居るのも却々面白いものですね。

A そりや君侮辱だよ。それでは芝居を見るのではなくつて咬合ひ喧合ひを見るんだ、芝居の筋から来る争鬭を見るのではなくつて其場出來の傷け合ひを見てゐるのだ、それでは芝居の筋を感じる心を散らして芝居以外に役者と役者を喧嘩をさせて楽しむことになるんだ。さういふ事を若し君が楽しむとすれば君はその病的な自分を恥かしいとは思はないかね、第一君自身を侮辱し一般觀象を侮辱し人間を侮辱することになるからね。

B しかし僕は自分で儲けた金を自分で拂つて楽しむに行くんだから、何をしまふと何處をしまふと僕の勝手ではないだらうか。

A 君がその金を儲け君が楽しむのは、國家があり社會があるからではないぢやないか、第一君が金を儲ける能力と方法は君より前の時代又同時代の人々によつて教へられたのではないか只これが無形の思想であり人類發展の一技である爲に公知公用となつてゐる丈ではないか、それから君が楽しみ得る君自身さへ君が創つたものではあるまい。何干

年來國によつて保護せられた君の先祖から君が生れ君も亦幾多の犠牲を拂つて愛護された日本によつて安閑と樂しき得られ、自分の考は自分の勝手であると迄思ひ得られる程安全な保護を受けてゐるのではないか、此根本の大きな事が見えないで僅か、卑近な安逸と驕慢に生きてゐるのは確かに偏頗病的な状態ではないだらうか。

C 一寸待つて下さい、成程貴方の御言葉は御尤もでまゐりますが、さう貴方のやうに仰言いましては此方の仰言いやうが無くなつて了ひます、その事に就きましたは私達の方にも過半の罪はあると思ひます。何事も外れたことをすれば別種の興味があるものですからこれも初め藝に馴れない役者が夢中になつて突飛な失策をやりましたのが偶々別な意味での拍手を得ましたことが、當人にはそれが夢中である爲に藝によつて拍手されたのだと思ひ込んで、さういつた方法が一方又安易である爲に横着根性を出しましたものか、或は無智なる爲にそれが藝とか藝術とか思ひました爲か、盛んにさういつた方法を用ひました、悪い事は染し易いでせうか或は又自分も何に拘はらず拍手を得たいと迷ひ出したのでせうか、兎に角一部さういふ演方が傳染しまして、演者自ら自分を侮辱し恥を晒らして金を貰ひますので、觀らるる方でも又變つた意味で慰まうといふほんの座興的な氣分にもなれたことだと存じます。

A 然し私は娛樂の内にも藝術に接し、又娛樂ならば眞實の

娯樂に浸りたいと思ひますね、お互に一堂に會して貴重な時間を費しながら侮辱し合ふやうなことでなしに、だが私のこの望みは遂げられないものでせうか。

C それは遂げられる方向に展開しつゝあるのだと思ひます

A それは如何してです、鏡に映す本體である世間は日々混亂状態に向はふとしてゐるやうではありませんか。

C それ故震災直後の大詔勅も下されました、聖旨に則つて實現したいと我々迄努力してゐます、多少の滓や粕は除外例として大道は必ず隔々迄も開け渡る事と信じます。

B あなたは役者ではありませんか、社會や政治の事など鬼や角考へたり口にしたりしないで、藝術家は世相を寫し専念藝術を磨けば、それでいゝのではないでせうか。

C しかし我は日本人ですからね、それに心が藝術の元ですからね。

B 成程その御考へは立派ですが、然し今日の世では精神ばかりで經濟問題が伴はなければ、其お考への實現は六ヶ敷しい事ではないのでせうか。

C それは全くです六ヶ敷しい以上に全く不可能の事です。ですから、其點では非常に確實な方法を選んで進まなければならぬのです。

A 確實な方法！芝居に經濟的確實な方法が立ちますか、昔から芝居は水物と云つてゐるではありませんか。

C 今日では確かに立ちます、矢張大資本主義です。人選

と脚本と練習時間と宣傳と運動ですね、或程度以上の費用を掛ければ必ず利益はあるものです。只これを普通に考へてかゝると多くは損失に終るものやうに考へられますつまり水物の水は常識的投資の基準を不見といふ水かも知れません、常識を遙かに突破した投資の上に正當な効果が生れるやうに思はれます、此點は經驗的といふより寧ろ非常な嚴密な數理の上に立脚するものと觀測していゝと思はれます。

A それならば何故専門家は其方法を取らないのですか、そうして缺損を負はないで、何故利益ばかりを得ないのでせうか。

C それには社會習慣上の問題の爲めに資本有限の度が甚だ狭少な理由があります。又今一つは興行日數が長くも一ヶ月に限られてゐる習慣の爲めに投資の度合ひが益々縮少されるからです。

B 成程ね芝居にも矢張經濟の原則が嚴密に適用されるものですかね。

C それも非常に複雑な嚴密さです。

A いや私達門外漢もこれから演劇界に希望を持つて期待いたしませう。

C 演劇界に希望を持たれ期待されるより、今少し積極的に貴方達が希望を作られ期待を實現されるやうな方法を取つては頂けないでせうか、芝居は芝居關係者の芝居でなくつ



て社會の芝居國の芝居なのですから。

A と、云はれますと？

C 只客觀的に人の物を見るといふお氣持でなく自分達のものとして今少し親しむで頂き度いのです、殊に徳川時代と違つて今日の世でございますからね。

A 徳川時代には何故客觀的態度で好くつて、現在では殊更親まなくつてはいけないのですか。

C 私達の言葉では親灸式と云ひまして徳川時代には舞臺から觀客席を通つて花道が出来まして舞臺と觀客とは非常に親しく觀客は俳優を自分の物のやうに思つて居り、又今のやうに自意識が熾烈でなかつた爲に舞臺の事件も自分の事件のやうに感じて居たのです。それですから親しむといふより觀客には寧ろ客觀といふ態度の方が必要であつたのです。ところが劇に對する西洋の近代式が輸入せられて他人の生活を見るといつた意識が明らかになつて來ました上個人主義的思想が擴がつて自己と他といふ考へが益々明瞭になつて參りました、そこで昔よりも自分(觀客)と舞臺といふものが明らかに隔離ははじめましたのです。

A でも今でも劇場の殆んど凡べてに花道があり觀客も俳優や芝居を自分のものと思つてゐる有様は、方々の劇場で目撃することが出来るではありませんか。

C あれは只慣れたのだと思ひます。世の中が個人主義になればなる程親しみといふ節義が失はれて、慣れるといふ狀

態に墮して行くのだと思ひます。

B 若しその親しみが慣れるといふ事に變つて行つても、夫れは興行上差支ない事ではありませんまいか。

C さうは考へられません。親しみと慣れるといふ事を區別する必要がありますのは劇場は公衆が一堂に會してある一定の時間中心點を一つにした理想的生活を體驗する一つの社會であるからです。ここには必ず節義を要求しなければならぬものですから、又興行も單に個人の營業と觀られますのは大いなる誤りだと思はれます。

A して見ると禮儀を以つて我等のものとして愛好し親しめばい、譯なのです。

C さうして貴方々からも發展させ向上させて頂けるやう國家の大方針とその時々々の社會狀態に従つて變化させて戴きたいのです。それは貴方々の御變化と共にです。

B それで私の勝手に芝居を見たいといふ心持も満足出来る譯です。

A 好きなものに親しむことは誰にでも出来る事だからね。

C もう私の降りる驛に來ました。どうも勝手な氣焔ばかり上げて失禮いたしました。

BA ではいづれ機を見て拜見、いや楽しみに伺ひませう。さようなら。

C 失禮。

汽車停車場につく、C下車。

流星 歌詞

率 牛 成太郎  
織 女 一 鶴  
流 星 扇 雀

竹本連中、清元連中

呼ばわる聲も成胸屋、飛んで氣輕な流星  
色の世界へうまれしからは、色をするのが  
犢鼻褌、寝るに手廻し宵から裸

ぞつと夜風にハハハツクシヨ、きやつが噂  
をしてゐるか、えゝ畜生めと夕闇を

是も空にて驅來り

されば候、さん候、も一つまけてさん候凡  
そ夜這ひと化物は、夜中の者に宵のうちとろ  
くやらうと思ひの外、一ツ長家の雷が夫  
婦喧嘩の亂騒ぎ

きけばこの夏流行の端唄の師匠へおつこち

て、氣は失なはねど肝賢の、雲を失ひ居候  
そこで端唄を聞き覺え、この天上へ歸つて

も、つひ口ぐせに鳴るときは

小町思へば照る日も曇る、四位の小町が涙  
雨

ごろ〜、ごろ〜エ、ごろ〜

聞くに女房あきれはて

これそんな惚けた鳴りよでは怖がるお隣で  
茶をわかそ、鳴るなら大きな聲をして

ごろ〜、ごろ〜、ごろ〜、ごろ〜ご  
る、びか〜、ごろ〜、ごろ〜びつし  
やり

言へば亭主は腹を立て、それは昔の雷だ  
大きな聲でならずとも、意氣な端唄でなるの  
が當世、それがいやなら出て行きやれ

何出て行けと

おゝさ、角を見るのも嫌になつた

我ものと思へば輕き傘の雪

我ものゆへに仕方なく、我慢をすればつげ  
上り、亭主を尻に引ずり女房、さあ戀の重荷

の子供を連れ、きり〜出て行きやあがれ

いえ〜、こゝは私の内、お前は簞の小糖  
雨傘一本もない身の上

汝さう吐かせば了筋がと、打つてかゝれば

ごろ〜

傍に寝てゐた子雷、こよ〜と起上  
り、これ父さん可愛さうに、母さんを背負た  
太鼓ちやあるまいし、なんでそのやうに叩く  
のぢや、堪忍してよとこよ〜

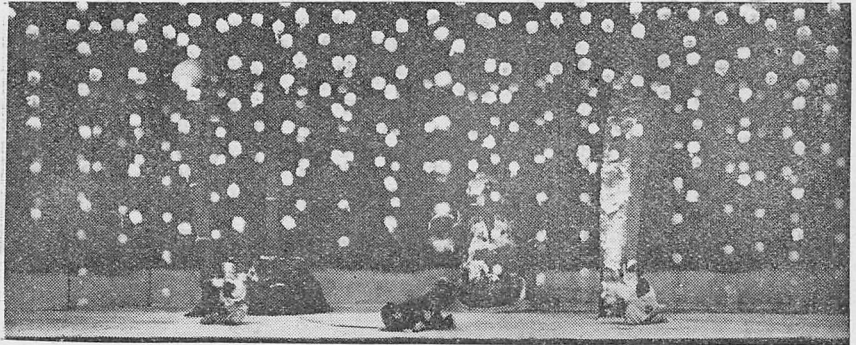
かゝる騒ぎに隣りから、雷婆が止めに来  
て、えゝお前方は何うしたのぢや、夫婦喧嘩  
は雷獸でも喰はぬに野暮を夕立に、どんな太  
鼓の八ツ當り、出て行けとの一ト聲は

月が啼いたか時局、いつしか白む短夜はま  
だ痕もたらぬ手枕や

夫婦喧嘩のあらまはしは、かくの通りと手拭  
で汗を拭うていたりける。

# 東都劇信

吉田 暎 二一

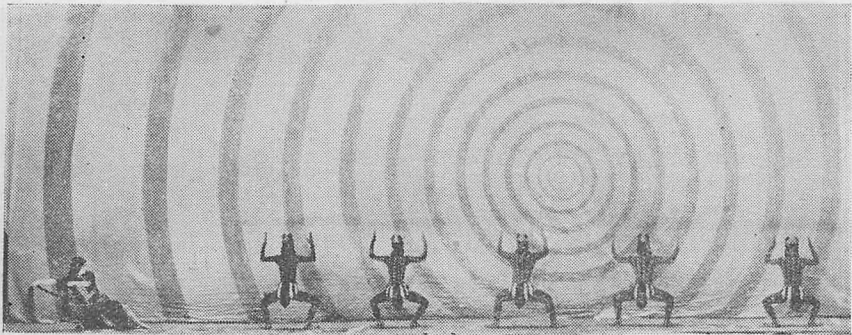


八月と云ふと、大した芝居は何處でも打ちません。つまり都會の人が、海に山に避暑に出かけますのと、役者も都會から離れて暑さをさける人が多い結果でせう。

處が、この一年間で一番不作であるらしく思はれる八月の芝居が、割合に客足がいゝ、と云ふのが此一二年、歌舞伎座によつて知つた事實です。開場の年の八月は延若、秀調、友右衛門、松助一座で「夏祭」「鐘もろとも恨 鯨鮪」そして申幕に「文屋」でした。去年は此の速中に猿之助加入で、一番目が「伊賀越」の奉書仕合と饅頭娘、申幕が「猪八戒」二番目は「眞景累ヶ淵」と云ふ建て方でした。そして値安芝居で、入は相當だつたのです。で、これから較べると、九月の芝居は、もう

そろゝ涼風が立たうと云ふのにどうも思はくれない様です。一昨年は「オセロ」昨年は「天下茶屋」、幸四郎、左團次、吉右衛門、宗十郎、と云ふ顔觸れで居て、どうも不作の様でした。

つまり八月は遊ぶ月。九月は遊びつかれた月である爲めではないかと思ひます。海も山も短い間のお客が多いと云ふのが近年の傾向らしく思はれます。(そのかはり、階級的には廣く一般的に避暑が行はれる様になりました。)二日三日の避暑から歸ると、又他方の人が出かける。遊びに墮勢がついてゐるのと、暑さの爲めに仕事も思ふ様に働けないから、又一寸遊んで見たいと云ふのが芝居へでも行つて見よう、となるんぢやないかと思ひます。又一方に、ごみ／＼した海岸や温泉宿へ行つ



て虐待されるよりも、ゆつくり自分の家で扇風機にでもあたって居て、夕方から銀ぶらでもして軽やかな都會の夜の姿でも見て居た方が銷夏には上々だ、と云ふ人も年々増へて來てゐる事はたしかです。しかし、その蔭には都會人が強い刺戟の方をめざしてゐる——松風よりもカフエーのジャズ、海邊の月よりも銀座の灯を、より多く憶れてゐるのだとも云へませう。

と云つた様な工合で、八月は割合に芝居も面白く値も安く、入りもあると云ふ事になつてゐる様です。而して一年中での御難月は九月だと云ふ事になつてゐる様です。

しかし、兎に角酷暑の八月の事ですから、樂に涼しく半日を過ごせる様、芝居の建方には中々の苦心は必要である事勿論です。

そこで八月の出し物は、と云ふ事になりま

す。次に列記しますと——

一 番目 眞景累ヶ淵 (發端)

中 幕 月 雪 花

二 番目 綱打因果噺

### 大切 戀の研辰

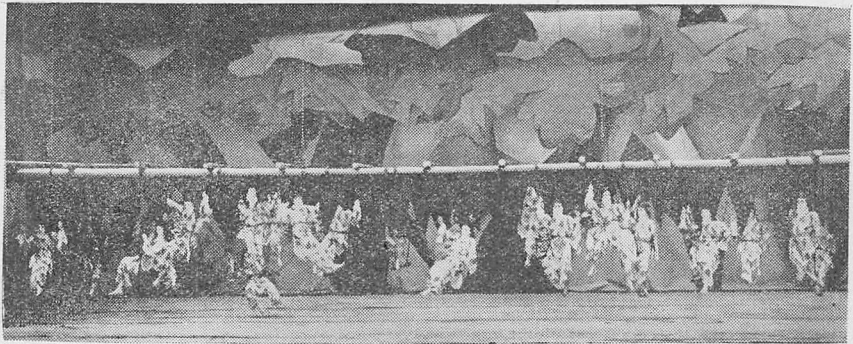
この四つでした。芝居としては、みんな樂に見られる肩のこらない、新作許りでした。そして俳優は、猿之助、八百藏、小太夫、吉之丞、新十郎、勝太郎、福之丞、友右衛門、芝鶴、訥子、松助等で、俳優も腕つき揃ひで、まづ文字通りの若手奮闘劇でした。

×

一番目の『眞景累ヶ淵』は云はずとも御存じの圓朝作、昨年以來大阪でもお馴染みので、今度は、その發端を三幕に木村錦花氏が脚色されたものです。

死にました圓右(後に圓朝になつた)がよくこの發端を高座にかけました『累ヶ淵』と云ふと、大抵は、この發端の『宗悦殺し』でしたから、昨上演しました件よりも、今度芝居になつた處の方がよく知られてゐる處と思ひます。

貧乏旗本の深見新左衛門が、按摩宗悦から借りた金の催促をうけて、酒の上とは云へ、一刀に斬殺し、そのたゞりが廻り廻ると云ふ幽霊は新十郎の宗悦が凄いと處をお眼にかけま



した。この死骸の葛籠に入れたのを、五軒長屋であけて見ると云ふ處が、歌舞伎座の廣い舞臺をつかつて好評だつた様です。この長屋で、松助と猿之助の馬吉と甚太と云ふ遊び人が、死骸とは知らずに葛籠をかける迄の間が大變に面白く喝采でした。昨年新吉で大當りを取つた猿之助は、この新吉の兄である新五郎（新左衛門の子）で宗悦の妹娘お園と仇同志の戀慕となつて、これが因果のはじまりでお園を殺し、自分も同じ刃物で傷つき召捕られると云ふのが、今度の三幕でありました。お園を殺して、その死骸にこもを被せるとザアツと云ふ雨、お園の白い手足や赤い蹴出しがこもからはみ出てゐる。二幕目の幕切れは印象深いものでした。三幕目の捕物は小太夫と屋根上での大格闘、猿之助ならではと云ふ事でせう。

×

中幕の新舞踊「月雪花」は猿之助が工夫をし、振は花柳壽輔氏、舞臺衣裳は小糸源太郎氏であります。これには全然歌詞がないのの一つの特徴です。先づ月の巻は山法師が酒に

酔つて、月の光の中で自分の影と踊る、と云つたもの。雪は小犬か雪見燈籠の許で踊り狂ふ趣間、花は藤棚で、四十人以上の總踊りでした。雪と花の間に、水馬（あめんぼう）と鯉の踊りがありました。佐吉作曲の三味線主奏樂が、よく單調にならず、その情景とテーマを浮び出させた事は特筆すべきものでした。

×

二番目は、珍らしや、松助主演の狂言であります。瀬戸英一氏作で、氏が第三回目に書いた小猿七之助の狂言で、これは又七之助より親爺の網打七藏を主人公とした芝居です。これも一番目同様因果にからんだ狂言で、作者が「酒を飲む人」の一つの心理をえぐり出してゐる點に異色のあるものであります。

しかし、一般的にはあまりうけなかつた様です。あんまりすつばすぎた爲めではなかつたかと思ひます。幕切れに、七藏が召捕られて行く七之助に、「ざまあ見やあがれ」と云ふ臺詞がありますが、これなど、解からないと云つてゐた人が大變に多い様でした。然し



こゝこそ作者のみそ、なんでせうが……。

○ 大切は、どなたも御存じの研辰。一昨年以來、研辰が猿之助が、猿之助が研辰か、兎に角、この二人はもう離れられない、(これも亦因果とでも申しませうか) 關係になつてしまつて

○ みます。猿之助の現れる處、研辰が現れる、と云つた工合です。今度のは「戀の研辰」研辰が、自分の戀をどう仕末をするか、と云ふよりも、戀の方で研辰をどうこづき廻すかと云ふ、一つの喜劇です。これは雑誌の「歌舞伎」の八月號を御覽下さい。脚本が、一番目二番目と一緒に出て居ます。

○ 續いて、九月を申上げませう。

○ 九月は、前に申上げた御難月です。何う云ふ陣立て、歌舞伎座が、この九月にぶつか



…眞景累ケ淵…

○ と云ふ並べ方で、俳優は、幸四郎、福助、三津五郎、菊五郎、と云ふ顔觸れです。

○ 『「身替座禪」は檀特山の件で、陣門から出るでせう。幸四郎の熊谷、菊五郎の敦盛、福助の玉織姫と云ふ配役、二三月前に陣屋を出した幸四郎、今年によく熊谷に縁のある年だと見えます。岡十郎の型で十分大きな舞臺を見せる事です。

○ 『玄宗の心持』は菊池寛氏作のもの。福助が楊貴姫、幸四郎の玄宗。舞臺監督は池田大伍氏、福助が「牡丹燈記」に續いての支那劇です。

○ るかと云ひますと、

- 一、一谷嫩軍記
- 二、身替座禪
- 三、玄宗の心持
- 四、法界坊

○ 『身替座禪』は六代目の十八番。岡村柿紅氏作である事皆さん御存じでせう。狂言を歌舞伎の新作としたもの、中には比較的長いもの、内に屬し、女房と知らずその面前で女ののろけを踊るあたりが見ものでせう。あまり



知られませんが、一中節の宇治派に「花子」と云ふのがありますが、これはやはり「身替座禪」なので、淨瑠璃としても面白いものがあります。

×

「法界坊」は三四ヶ月前、近所の新橋演舞場で吉右衛門が上演したばかりのもの。同じ物語り出す様ですが、播磨屋が上演してゐるだけに又六代目の今度の上演に興味があらうと云ふわけです。あらゆる方面からこの兩優を比較をする上に見のがせない舞臺であらうと思ひます。

×

九月をもつと詳しく書くはずでしたが、二ヶ月分であまり長くなりましてので今月はこれで止めておきます。

—(昭和二・八・二二)—

### 邪宗門と雲仙岳

中座の九月は中村扇雀奮闘劇として日本新八

景の「山岳」に因み「雲仙岳」と題する新時代劇を上場するが、この雲仙に傳はる邪宗門の傳説を描いたもので、往時恐ろしい硫黄地獄であつた雲仙の谷底には邪宗門の徒の精霊が沈られてゐる、そこにヒントを得て脚色



され扇雀の松倉九一郎重次、建藏の松倉豊後守重正一鶴の田中藤作勝元、芦鷹の高樹新造かなめの森武右衛門、右田三郎の庭番與三兵衛、成太郎の奥女中お幸等の役とで梗概は寛永の頃九州島原方面に邪宗門の信徒が殖へたので幕府は改宗奉行職を布きその任

に松倉豊後守を當てた所が同家の奥女中にお幸と呼ぶ切支丹信者があつた。松倉の息九一郎と同家の臣田中藤作はこの一女性を中に激しい戀を争つた、或日お幸が邪宗門の徒である事が豊後守に知れ捕はれた當時、邪宗の徒は悉く捕へて雲仙岳の谷底へ投げ込まれる慘虐な刑に行はれた、そこで九一郎はお幸の命乞ひを父に取次いだだが彼女の信仰の強いのに遂に極刑を斷行される、その場に立會つた藤作は暴虐無道なこの刑を呪つて豊後守に斬りかゝる、九一郎は見兼ねて藤作を倒して谷底へ墮落す、今は戀の争ひも何もない九一郎は淋しく血刀をさげて雲仙の谷底へ吸はれる様に消えた。そしてお幸藤

### …戀の研辰…

作を憎んだ。



淺  
黃  
外

三  
田  
米  
吉

吹替の肩のあたりが他人なり  
千兩で承知の出来ぬ大向ふ  
所作事になほ一層の若さにて  
目千兩顔千兩へ柝の頭  
がつくりと疲れを見せて下座になり  
柳一本殺しになつて用があり  
満員の聲を柝頭ぬふてゆき  
本水に汗を流した立廻り  
幕開きに仕出しの口の動くだけ  
淺黃外通なせりふに落を取り



がくやばなし

綿貫六助

×

田舎や東京の樂屋話を結附けて、私の次男切の景夫が、子役になるまでの道筋をお話しいたしませう。

あの大地震後二年ほど、私たち家族は、妻の實家の會津の方に暮してゐました。

その頃、景夫は、二つ年上の姉の静子と共に、學校の先生から撰まれて、その學校で普段催しの劇や童話劇に出てゐました。姉は、よほど芝居掛つたことがすきだつた

と見えます。

尤私の母は、先代左團次とは親しい間柄だつたと云ふし、父もかなり藝事はすきでした。妻の方も藝やら道樂やらの血は流れてゐたやうです。

×

ある年の秋、その會津の高田町へ、澤村金十郎一座が興行にきました。役者たちは多く江川屋と云ふ芝居道樂の店屋に泊り、金十郎夫妻は、妻の伯母がやつてゐる平野

屋と云ふ旅館に泊つてゐました。

金十郎の狐忠信や染八(細君)の頓兵衛や辨慶などを観ると、景夫が役者にならうと云ふ考が急に起つてきました。それは、一つは、彼の天分もありましたらうが、母親の芝居好き、私が東京の原稿賣りの留守でその日の生活にも困つてゐたせいもあると思はれます。

×

景夫は、芝居を見たゞけでは満足できなくなりました。どうしても樂屋の方が見たくてたまりません。ひるのうち、旅館の前に立つてゐると、金十郎夫婦が、子供(京二郎)に三味線や踊を教へてゐる、しつとりと落附いた音じめや唄聲がきこえてきます。恍惚としてきゝ惚れてゐた景夫は、町通りから七町ほどある畑中の一軒家に駈戻りました。

「お母あちゃん、平野屋の前に行つたらねえ、役者が稽古をしてゐたよいなあ！ あたいあすこへ遊に行つてもいいかい？」

羽左衛門に似た大きく張つた耳、天稟の幾分キツイ眼にもスマシさが滲つてゐるが、それらが熱心に溢れてゐるので、『ぢやおばさんに紹介してもらつて、私もゆくから遊びに行つてみようか』で、その次の日の晝間母子は平野屋に行つて、伯母から金十郎夫婦に紹介してもらひました。

『ほう、いゝ顔だ。耳は、羽左衛門そつくりぢや。實は、弟子が一人欲しいと思つてゐたところだから、預かることにせう。これから奥州の方へ廻つて九月一日には東京へ歸るから……』金十郎は、大満足でかう云つて、名札を渡しました。

興行五日間、それから二三日泊つてゐる間に、景夫は、かなり一行の役者に親しみました。カタい田舎の親類は眉をひそめたり、學校の生徒からは侮蔑と迫害がひどかつたから景夫は二年すみ馴れた母の郷里を逃出すやうにして、母親に伴はれて上京したのです。

×

金十郎の家は、淺草の、とある露路の二階長屋で小綺麗な住居でした。私が、景夫をつれてゆくと、金十郎は大欣びで『それ親子で食へー ホーレ……』など、云つて、井などをつてくれたりしました。

その後まもなく、妻が留間居役兼取締に頼まれ、未子、六夫まで連れ込んで食べさせてもらつておきました。

景夫は、幾分の天分があるとみえ、榛野三島、東北地方、などの巡業で、安達原のおきみ、寺小屋の菅秀才、惣五郎、伴藤太郎、柳生の冬野などを勤めてほめられたのだからです。

これだ想起すのは、私がまだ七つ位なき赤城裾野の村で、蕪掛舞臺の芝居があつて、私の長兄は十九で鹽谷判官の切腹をしました。誠は、天品だつたと云ふことでした。その時分、私の母は血眼になつて、東京から別な師匠を呼寄せて夜書廣い座敷で稽古をさせ、上演日には髪も結はずに普段着のまゝ、舞臺へ飛込んだのですが、私は景夫を金十郎に預けてから、何處を巡業し

てゐるやら、それさへ知らぬ始末なのでした。景夫とその第六夫を養子にくれと金十郎が云ひ出したのは、その後まもない事でした。

×

けれども、金十郎には、まだ出世前の多くの實子があるので……とにかく、景夫の將來もあるのです……とにかく、景夫は、一まづ、私共が上京したばかりの間借りのなかに戻されることになりました。ろこつに云へば、留間番の妻の所へ行つて、私が飲んで夫婦喧嘩を爲て茶碗など毀したからです。

景夫は、もとの小學生に立戻りました。まあ申學でも卒業してから、それまでに何か藝でも仕込んでなど、暢氣な考へでゐました。ところが、劇作家松居松翁氏に、ある寢席でお會ひしたのを機會に、私は、景夫の事をお願ひしておきました。何かにつけて熱烈で親切な松居さんは、方々へお骨を折

つてくださつて、今月の、澤村總家なる宗十郎丈の弟子に世話して下さいました。で、よく考へました後に、私は、金十郎さんは縁を結んだおぢさん、今戸の宗十郎さんは父、そして行末、大袈裟に謂へば生死をとにもすると云ふ決心を子供に吹込んだのでございます。

×

今年四月二十五日は、帝劇のラクの日でこの日樂屋に連れて來い、萬事略式にてと云ふ意味の松居さんからのお手紙がありましたし、わぎく私の家まで知らせにきてくださいました。私は、景夫を連れて、帝劇の樂屋にまゐりました。

劇場の樂屋と云ふものに入つたのは、私はこれが初めてです。

石段を昇つて下足箱のところ、景夫と二人で立つてゐると、ものかげから、とても品の佳いお爺さんが出てきました。これが、宗十郎かな？ と私は思ひましたあとで知るとそれは、宗十郎の男衆の林さんで

した。

とにかく頼んで面會室に通されました。美しい時計、大きな姿見など綺麗なものでした。

「幸四郎さんだー」と景夫が云ふので、廊下を見ると、カンデン服の辨慶がキツゲな顔で尻をまくつて廊下を通りました。

また品のいゝ今度は瘦せたお爺さんがきて何か云ひましたが、私は耳が遠いし、少し、ノボせてもゐましたから、たゞお辭儀をしたゞいで相手の顔をみてゐるので、ぱつとわするやうに、やがて向うへ去きました

「あつ、今のが、宗十郎さんだつたか……」  
「さうではないやうです」景夫の方が樂屋馴れがしてゐて、萬事私より明いのです。

「でも澤村……何とか云つたやうだつたぜ」あとで分つたのですが、それは、澤村家の支配人で竹柴と名乗る座附きの劇作家なのでした。

×

私と景夫は、松居さんに連れられて、二階の宗十郎丈の部屋に入りました。恰度二

十臺の時私が入りし宮城の廊下のわきのお部屋ツツクリ、中央に入口があり、右にはまだ若々しい訥升さん、差に宗十郎さんが大きな鏡臺の前に坐つてゐました。

なんとオットリとした氣品のある人だらう。と思つて、頭と同時に私の心も氣もちよく宗十郎さんの前にさがりました。景夫も私の左にゐて手を置いて頭をさげてゐます。松居さんは、入口に坐込んで、にこにこ微笑つてゐます。「なか／＼いゝ顔で……」

「二三年は、まあ、書生のつもりで、みなりも質素になさつて、お辨當もお家からもつてくるやうに、ね。雨の降る日は休んで天氣のいゝ日だけ、毎日見にくるやうに、ね」

かう云ひながら、大きな奉書にみづびきをかけたのを、お出しになつた。私は、押頂いて、あけてみると、可稱宗彌、總家澤村宗十郎としてある。私は、うれしさにふるふる手で、そのうれしさと共に、華やか

なみづしきの束を押し込んで、それを風呂敷に納めました。『では、向うへも御紹介しませう』と松居さんが云はれますと、『では、お願申します。われ／＼なきあとは、かれらがまた、お世話申上げるのですから……：』宗十郎さんは、かう云つて、訥升さんのお化粧をした顔を見て、それから隣室の助高屋高助さんや、田之助さんの方にお顔を廻しました。

肥太つた高助さん、キリツとした田之助さん、その他多くの人に紹介されて、私たちはまた宗十郎さんのお部屋に入りました。生前芝居好きで、亡き母の顔が、チラと私の眼に浮びました。さうして、孫の景夫が、宗彌と命名された。その夜の光景——それは、樂屋の香氣と色彩とをこめた華やかなうちに、別利な莊嚴さがあるのですが——を一眼見せたら、どんなにか欣ぶだらうと云ふ甘美な感傷がヒクリと私に胸を刺しました。

子のよくなるのをみる親心はまた、他では味はうことのできぬものでせうね。

×

田舎の樂屋から東京の樂屋を渡つて、景夫は宗彌と云ふ子役になりました。たちのいゝのもありませうが、専ら、松居さんのおとりなしと師の肝煎とで、入つた月から役をさせられる事になりました。郊外の家から毎日通つておますが、元來芝居好きで私夫婦、殊に義太夫では、かなり長年道樂をした私、俳優の評判通な妻、踊りなどを習つてくる宗彌で、家庭の樂屋も

和氣霽々、毎晩十二時すぎまで、有頂天になつて藝事をしてゐるのです。私まで、照された氣分で、劇の本や劇評などにも夢中になり、ウチの貧乏など苦にならなくなりました。

×

ぐど／＼した、それでゐて、幸福な樂屋囃です。お退屈さま。——完——





中座の中村扇雀奮闘劇

芝居小説 緋鹿子地獄

長島黎夢

(一)

大阪西横堀に紀伊國屋とて老舗き材木問屋あり、太格子に大戸の家構えは直ぐに富豪と領れ、家並に立掛けられた木材挽板に(紀の商標は一見して老舗を想像せるなり。店には番頭手代に丁稚下婢を多勢召使ひ、出入りの者も尠ならず、商賈は日々隆盛に向ふのみ、何の屈托もあらざるに、たゞ一ツ此の家庭には想ふても還らぬ不幸あり。主の忠兵衛は五十の坂を三ツ四ツ越したる齡なれど、女房のなにがしは遠くに世を去りたれば現在娘のおきくと肉親といへば唯二人切りなり、女親に早く先没れた不幸者、せめて親の慈悲にてと後妻も娶らず、男手一ツで慈しみ、女の道

の必要なもの、茶、活花、音楽の一通りをも暗ませ、漸く今年十七の花とや育て上げぬ。されば容貌は人並勝れて美麗しく、現今では横堀小町とさへ評判されるに至りぬ、通りすがりの人が取沙汰を聞く度に、忠兵衛の喜ばば謂はん方なく、今日まで丹精の氣苦勞も、母親なき嬢の不幸も、その一言にて忘れられるはさこそと察せられ、愛嬢持つ親の、まして男親なれば、手配になるにつけ又一入の苦勞のあるものなり。

この紀伊國屋へ奉公してまだ三年餘りなれど、その實直な忠勤ぶりに、主の忠兵衛に見出されて手代に引立てられた清吉といふ若者あり、主の留守にも蔭日向なく、忠實々々しく立働くは當世の若者としては誠に珍らしく生國は何國にて両親の有無も判らねど、本人の氣質を見込んで深く糺さず、親元の引受もなまに召使ひたる忠兵衛の肚の裡こそ奥床しけれ。

されば清吉も主人の情を此上なく厚くうけたゞ主家大事に立働きて、田舎者の土臭き身掃えも今は都會の風に自然と氣品好く、生來の目鼻立ちの整ひし面貌は見違ふばかりに凛々しく、商法の懸引は先強の者を凌ぐほどに如才なく、さりとしてそれを鼻にかけず、先輩は先輩で崇敬ひ、あくまで謙遜の態度は當世の若者にしては實に見上し事と云はん。尙感心な事はもうこの年配になれば、遊廓の格子先に戯言の一ツも投げ込むほどなるに、そんな悪所通ひは勿論知らぬ心にて、酒煙草も嗜まず無駄な事には鈍一文も消費ひしことなかりき。されど同業の集會にて忠兵衛の代理に出席せしめて決して面憶せず、立派に主人の役目を仕終せければ、いつか同業中にて清吉の事を賞讃さぬ者はなき位ひ迄になりぬ。自然と忠兵衛も清吉を信頼し、現在では帳簿

筥の鍵までも任せれば、その信頼ぶりに朋輩の中には内心心悪しく想ふ者もありぬれどさりとて清吉に劣らず主人の信頼を得んと忠勤するほど殊勝な心懸けの者もなかりき。

母屋育ちの我家より外に華知らぬおきくは自然と店の者とは親しみぬ、とり分け清吉には一倍の親しみを持ち、夕餉の後の所在なきまゝ店先に出ては清吉と四方山の話を交しぬ妙齡の男女が物睦まじ氣な容子に直ぐ何彼と下婢の口さがない取沙汰も道理なり。斯くしてその年も過ぎ、清吉は廿四歳の若盛り、おきくは花恥じらふ十八の娘盛りとはなりぬおきくの清吉に持つ親しみは尙一倍深くなり清吉が夜仕事の帳場格子の傍には必ずおきくの草双紙見る姿を見ぬ夜はなかりき。老の身を凭ねる愛嬢によき筆をと、忠兵衛もおきくの年配になるにつけいろ／＼心懸けたれど、他家よりの縁談は帯に短し襷に……の諺で思はしからず、ましてや大切な愛嬢に氣質の知れぬ筆を迎へるよりあの清吉を行末はと、内々忠兵衛は心に獨り決め居たりしまゝ、此節のおきくの態度にさてこそと領き、おきく

さえその氣なれば、これは早く取り極めてやらねば、もしも若氣の無分別からこの紀伊國屋の暖簾にも關係するやうな事でも仕出來しては、却つて親の心も水の泡と、娘々想ふ親心日頃手廻り萬端に世話する下女のお春にそれとなく、おきくの心を訊かしたるに、たゞ煩を眞赤く染めて嬉しそ、もう此の上は嬢はんに異存はあらじと、お春は萬事を呑込んで早速忠兵衛に其由傳へければ、忠兵衛も折を見て清吉の肚の裡を訊かんと漸くにして肩の荷下ろしぬ。

(二)

去り難き残暑も今は立秋の、夕べのそよ風が物言ひた氣な風情にて折に顔見合せては莞爾と、袂の端を弄ぶ指先の行燈の灯りに眞白く動くも愛らしく、世間知らぬ生娘の一箇の戀に物想ふ状も憐れぞかし。

うき仲のならひと知らば斯くばかり、花の夕の契りとなるも、初めの情今の仇……

いつそ逢わねばこうしたこと、ほんにあるまいよしなや辛らや。

仇に暮せし月日のほども、いまで思ひの涙の兩に、いと朽ちなん四ツの袖。

隣家より聞える吹に清吉が、己が身上に泌々と應える如く、筆持つ手を止めて聞入るに、おきくは最前より何か云はんとその折を考へゐたるにぞ。

「なア清吉どん、……あんた聞いてやなかつた? ……」不意の言葉に清吉は、不審が「何をでムります!」「いえ今日私がお稽古の留守に父さまから何ぞ聞いてやなかつたかえ」流石にこの言葉には何故か清吉は心苦しき態にて口籠るに、

「之、聞きなはつた?」「へえ承りましたけど……」と言葉を濁すを、もどかしく、「けど、あんた父さんへでない返事を……」

「……」跡は得云はで顔あからめ、口を嚙むで恥らふこそ道理なり。

此時臺所より下女のお春が主人忠兵衛の雪駄を持って出て来り、

「旦那はんのお出まし」と告げるに、その跡に、

「天氣はどうか、雪駄で大丈夫かいな」と忠兵衛が聲。思出しの所用にて外出すると思へたり。

「へえ、お月さん傘着てはりますけど、今夜は滅多に降ら致しません」と答ふるに「さうか、」と店の間へ出で来れば清吉は、

「お出ましでムリますか、御苦勞さんでムリます」と早や帳場を出て、見送りの用意をすれば、

「どうで今夜の集合も又おそうなる、皆構はんと寢ておくれ、戻つたら門叩くよつてな、誰ぞ門だけ開けとくれ」「いえ、お歸りまで私がお待ち申しております、丁度せんならん帳合もムリますよつて」「そうか、けどわざ

にならだないぜ、えゝか、おゝそれから定吉が戻つて来たら金受取つて帳簿の引出しへ仕舞ふといとくれ、さ、鍵お前に渡しとくわ」「へえ、宜しうムリます、お氣をつけ

てお出でなされませ」とお主思ひの清吉が、慰める言葉を領きつゝ行かんとせしが、立戻

り、  
「なア清吉、最前私が話しておいた事、それお前にしても一生の事やによつて、一應考へてから、といふのは無理はない、いやそこま

で氣のつく所が頼母しい、まアよう考へてええ返事聞かしてや……何しよ家の様子はお前も知つての通り、親一人、娘一人、母親に早う別れて男手育ちの我儘者やけど、は、

……それも云はいでも分つてるが、まア……萬事私の心持をよう察しとくれ、えゝか」  
云ふ忠兵衛が言葉の裡に、あり／＼判る今日までの氣苦勞さ、まして一介の自分を斯うまで思召して下さるとは有難いやら勿體ないやら、たゞ有難涙に暮れる清吉が、

「有難うムリます、いづれ御返事は屹度致しまする」と聞いて忠兵衛はやゝ心安らぎし容子なり。

「父さん、お早うお歸り、あの長太をお迎ひにあげいでも宜しおますか」とおきくが喜悅の顔を見て、

「いや、大事ない、それより清吉の邪魔しないや……お春やかましよう云うて早う

寢かしてくれや……見、氣に入らんと見えてふくれてるがなハ、……どれ、では留守たのみましたぞや」と忠兵衛は機械顔して出て行くにぞ。跡におきくは清吉の傍によりかくるに、

「嬢はん、旦那はんは孝行におしやさや」と押揃ひながら臺所に去るお春の言葉も、戀する娘には嬉しきものなり。

「清吉どん、あんたなぞすぐ父さんに返事しておくなはれへんの」「へえ、すぐ御返事する所ですけれど、私にも一生一度の事

それで二三日考へさしてお貰ひ申そうと思ふて……」心苦しき斷れ／＼の答へも、一圖に想ふおきくには心細い、焦々しさの待てぬほどに、そこは女のまして世間知らぬ生娘なれば、これは又他所に好きな女のあるならん、

それなればこそ、好き返事のないも道理考へれば腹の立つ、え、口惜しいと、遠曲に糺す事の術知らぬ一圖に、たゞ涙先きしてかき口説くも憐れなり。いや、決してさうでばムりませぬ、誰しも人間一生の大事、私にも故郷には親がムリます、一應はそれとも相談し

……

て御返事はいたします程に、どちらぞそれまで待つて下され、と理を説いて優しく聞かすにぞ、漸く笑顔したれども、まだ解けやらぬ心の中、されど、清吉と二人對座のおきくには流石に矜しきこなしなり。

人の失策をせり立て、輪に輪をかけては我嗚り立てる朋輩衆に毛嫌ひされようがそんな事には頓着せず、俺は俺で立身出世すればそれで好い、と主人に味憎する事には如才なき憎まれ者、こんな奴こそ氣の利いた悪事も得せず、廿日鼠が物引く如く、こそ〜と店の帳尻を噛み破る奴なり、此家へ子飼から勤めて十何年、妻子のある年配になりながら、未だ獨身の住込奉公、定吉とて、古き手代あり。今日懸先の金を受取り今立戻りしが、男女の態を見て早や厭味のかず〜「あゝ暑い暑いなアこうして家に遊んでゐたら涼しい事やる」と早や當擦りの厭味を云ふに厭な奴が歸つて来た、顔見るも癩と、おきくは心残して奥へは入りぬ。

「清吉、旦那は……」  
「今しがた寄合へお越し」と答ふるに「折角金受取つて来たがお留

守なら明日の事」と云捨て行かんとせしにぞ「帳簿の鍵は最前旦那のお出ましにげに私心預つております、お金なら仕舞ふておきます程に」と返り言葉の棘々しいは承知されどさりとして主人より云ひつかりし大旨のお金、是非預らねばならず、案に違はず定吉が、

一ふう帳簿の鍵を……さうか、お前は旦那のお氣に入りや、年上の者を差置いて大切な金の始末まで云附けるとはまゝ大切に仕舞うとくがえゝわ、と心の不満に荒々しく金を投げ出せば、畏りましたと、不快を抑へて清吉がその金帳簿へ仕舞ふに、尙もあきたらず罵る定吉が「なア破に身元の引受けもないやうな始末で此家へ奉公に來たのやが、今では巧い事旦那に取入るし、嬢はんにはお氣に入るし、此頃の様子では遠からず此家の御養子いやあやかりたいもんぢや、わしなど十何年も奉公してゐるやが、いやそんな事云ふても始まらん、兎角當世はお前のやうな利巧者でなうてはあかんわい、何にせよお前が御養子と極つて見りやわしはお前とこの奉公人や、今までの朋輩甲斐に随分といたわつて使うて

や、えゝか、今から頼んどくぜ、ふんえらう濟ましてるな、店頼んだぜ、と立つだけの厭味にぢつと堪へる清吉を、さも憎々し氣に見下ろしてそのまゝ奥へ立つて行く後姿の憎々しさ。今腹を立て、争ふては此方に條理があるにせよ、先輩に楯つく事になれば人の氣えも悪るし、まして此の年月の辛抱を思へば定吉づれの悪難口を腹を立てるは愚なり、自己に過失なければ他人のそしりを受ける事もあ

るまじ、と自己に閉めて自己に答へ獨り胸を撫でる清吉こそ見上げし人物とや云はん。  
人の氣なき店の間には獨り清吉が帳合に餘念なき姿がしめやかな行燈の光りに一層憎れて見えたり。さるにても彼の清吉が身の如何なる素性にやあるならん。此家の誰れ一人としてそれを知る者はなかりき。  
大戸の少し開きたる氣配に、ふと見やれば「清吉、清吉」と聲を掛ける者あり、誰やらんとよく見れば、船頭の三造とて見るからに一癖あり氣な面構へは、清吉が當惑そうな態度にてすぐに如何なる人物なるかは察せられ

奥の間に氣を配る清吉が帳場格子を出て上り端近く三造を手招けば、ずつと入り来る三造に、

「三造、あれほどいふておいたに、こう度々来てくれば店の手前困るやないか」と眼に當惑の色を見せて云へば、

「濟まん、そやけどいざとなりや、お前ところより外行先のないのがお互ひの因果や、清吉そない氣拙い面らするな、お互に故郷を飛出してこの大阪へ潜込んだ、いふたら親身の兄弟同様、それ思ふたらお前も……」

一分つてる、もうええ〜何も云はいでも、つまり金の無心やらう」

「お察し通り、清吉濟まんが又五兩ほど都合して貰へんか、もうぶつちやけた所、すつかりやられてしまつて、今夜また晩飯も腹へ這入つとらん始末や」と、清吉が迷惑に附込む三造が、次第に聲高になるにぞ、もしも奥へ聞えてはと、氣を兼ねる清吉が制する言葉にすかし威嚇しつ、その跡の話は途切れ〜の秘そ〜話にて判然とは聞えざれど、或はニヤ〜笑ひの猫撫聲、又は卷舌の威嚇文句も

聞えたり、その度毎に拜まんばかりの清吉が態度にては餘程の暗き過去のあるらしく、顔色蒼然として何事か決心したらしき清吉が恐怖ろしき迄に緊張つた面持にてつと起上りて帳簿の前まで行きたれど、流石にそれに觸れるを恐怖れし態度なり、上り端の筵でも動

ぜぬ三造が居握りに幾度か躊躇ひしが、やがて奥の間を窺ひつ、手早く帳簿箱の抽斗より幾何の金を取り出しだり。「さアこゝに五兩ある、これ持つて早う去んでくれ」といふ言葉も慄え勝ち、尙もくど〜云はんとする三造を押し出さんばかりに戸外に突出し、ホツと息して上り端に座し暫しは、果然たりしが、更に帳簿箱を見てはゾツとせり。

「清吉お前に聞く事がある、爰へ来い」と突然定吉が出て来るにぞ、ハツとせし清吉が顔面の對者に得向けざるも道理なり。

「お前御主人のものとお自分の物の區別くらゐ知つてるやらうな」さては見られしかと思へど矢繼早やに定吉が「知つてるか」と大聲に「へえ」と答へも口の裡、清吉には正に意識のなき程の恐怖あり「そうやらう、そんな事

位どんな阿呆かて辨まへてる事ぢや、したがりわしの訊くのはそんな事ぢやない、おい清吉お前御主人のもの無斷で扱ふのは悪いと云ふ事知つてるか」「えッ」一人は見かけに奇らんとはお前のこつちや、旦那のお氣に入りで嬢さんの舞にせうとまで話あるお前が、店の大黒柱を嘸る黒鼠とは今まで氣がつかなんだ、これ悪い事は出来んものぢや、お前が帳簿箱から金出して風體の悪い男に渡してゐるのをのれんのかげからすつかり見たのぢや、そんな柔和しそうな面してよふまア大それた事をしたな」と今は絶對絶命の清吉が、後悔も跡の祭りにて、果ては盗人呼ぶ〜りする定吉の罵詈雑言に、彼の最も痛き急所を抉ぐられる心地して、根からの悪意のなき事を辨解すれど聞かばこそ、大聲立て〜喚き立て、

「サアあの余のこかし場所を吐せ一體あの風體の怪しい男は何んぢや」と激しく清吉を突飛ばせば、『それは……そればかりは、云ふに云はれぬ心の苦しさに云激むを、突如有あふ算盤取つて彼の面を打ちたれば、その物音に何事ならんと、おきくも、お春も走り來

れば、得意瀧の定吉が、實は斯うく店の金を盗んだ大盗人と大聲にて罵るは、あくまで憎々しき而櫛へなり。現在のおきくの前にこの悪名つけられては流石の清吉も黙り得ず、「盗人とは定吉どん。お前も店を預る手代なら、私も店を預る、ちつとやそつとの融通位ひ……」何吐しやがる、盗人たげくしいとはわれのことぢや」と、又打ちかゝれば、堪へに堪へた清吉も思はず帳場のさすがを取つて身櫛へたり。見かねておきくが、「これ定吉、えゝ加減におしんか、清吉どんの云ふ通り店はお前一人が預るのやない、それに清吉どんはもう何やよつて、父さんのお金なんぼ費ふたかて……」なアお春さうやないか、「えゝそれでムリますともく」と兩人が口を揃へて庇ふたれば、要らぬ口出しと云はぬばかりの面ふらし、「あんさんの出なはる幕ぢやムリまへん、やい清吉、われはおのれの悪いこと棚へ上げておれに手向ひする積りやな」と件のさすがに眼をつけ云ひ立てるにぞはツと思はず清吉がそれを懐中にしまふに「そりや何ぢや、そんな刃物持つて俺を

どうしやうといふのぢや、猪口才な事さらすな」と、又打擲すれば、今は氣も興奮た清吉が俄かに血相かへて馳出さん氣色に、それを隔てるおきくにお春、それ振切つて土間へ飛び下り「定吉、ようも非道い仕打しくつたなこの返報吃度するから覺えてい、いゝえ嬢さん、放しとくれやす、清吉も男、この明りの立つまで二度と店の敷居またがしまへん」「そんなこと……あんだ約東忘れなはつたか……」と早や涙聲して恨むに「何も彼もこないなつたら……」と彼も涙に頬を濡らせり「嬢さん、よい加減にほつときなはれ、外へ飛出して行き所のない宿無し犬、尻尾下げ舞戻つて来るに極つてますわい」「なにツ」と意氣込めば、この時使先より立戻りたる丁稚の長太が、只今と聲して戸を開けば、矢庭に戸外へ飛出す清吉「あゝ清吉どん」と追はんとせしが止める定吉、「お春早く……」とおきくが一生懸命、血相變へた清吉の如何なる無分別をするやも判らず、お春が跡を追うて表の鬮を同じく馳出せばおきくは心詰りてその場に泣き伏したるこそ

憐れなり。

(三)

今宵も亦美しい星月夜に更けて、弦月の影もほんのりと匂ふばかりなり、築地の川岸に今遊客を乗せし屋形船が縋を結んだらしく「おあぶならムリまつせ、氣をつけてお上りやす、そして只今はまた御多分に御祝儀を……」と取つて附々の愛想を云ふは船頭三造の聲なり、船に遊びつかれた醉客が、藝妓、仲居を引つれて、氣持好き川風に頬を弄ぶらせながら戯れ言交して去つて行けば、跡に三造が鼻唄交りに櫓など片つけ腰のなた豆取り出して一服吹かしかり。亂れし髪は頰にかゝり、蒼白の顔面は物凄きまでに緊張張り、着物の裾も泥まみれに下駄も穿かず、宛然残なき人の如く、されど何人かを探ぬるにやあらん見据へし眼の血走りてこの川岸を彷徨ふ者こそ、彼の紀伊國屋の清吉なり。ふと三造が姿を見出すと等しく「おゝ三造」と、呼びかゝれば、彼方も「誰や」と答ふる聲、何も彼も一時に解決したき



願の清吉に、今分圖ず三造を探し當てしは此上なき喜びなり。

「三造きつきの五兩もう一べん戻してくれ」と、あれから後の一伍一什を物語る清吉の條理を盡した言葉も三造には、唯五月蠅き愚痴の如くにて、

「何を云ふてんね……」といやに落着いて頭より取合はぬは、余程の悪黨なり。

「清公よう考へて見い、俺とお前と一緒に村を飛出した時、われ何というた、兄貴、村八分の家に生れた私が世間へ出られるのも、大坂へ出て稼がふと誘うてくれたお前のお蔭や

この恩は一生忘れへん、そのお禮には私に出來ることなら、どんなことでもすると吐したやないか」「そりや云ふた、その代りどのやうな事があつても私はお前の親の素性を、お前も亦、私の前身を一生口外せんと堅う約束したやないか」

「約束したりやこそ、今までこんだけも喋つた事あらへんわい、けどなお前が意地穢なう金を貸しさらさんよつて、一寸おどかして云うて見たんや」「お前は嚇したじけで笑ふて

濟むやらうが、私はそれ故に取り返しつかぬ過ちをして仕舞ふた、もしこのまゝ店へ戻ることが出来なんなら、それも是非がない、

けど私はあの定吉に五兩の金叩きつけて身の燈りだけは立派に立てにやこの胸が納まらぬ三造一緒に來てくれ、最前の金戻してくれ

「阿呆ぬかすない」と又も聲高に噪り出すは清吉にして癒へ難き古傷を鋭き刃物で抉ぐられるよりも尙苦痛ならん彼の素性なり。

人殺し、大盜賊を親に持ちて人交りの出來ぬ清吉は物心つく頃より如何にそれが苦惱を贖へしぞや自分にも暗き過去ある三造に勇氣づけられ漸と明るき希望を持ちて大坂に出で

紹伊國屋に奉公するやうになりし彼こそ呪はれし運命持つ若者とや云はん。口汚なく罵る三造が萬聲は尙も清吉の耳に響けば、忍従は

自分の本意なれど、もうこれ以上は堪へられじと前後忘れし清吉が嚇つと逆上て有合ふ棒

を手に握りし迄は意識たりしが、……漸く我れに歸りし時、自分が一生を通して苦しみた

る人殺してふ名のもとに問はれる罪人とやなりぬ。

(四)

その翌朝紀伊國屋では主人忠兵衛の心配はもとよりおきくの心配さは此上もなく、出入のものにも依頼みて此處彼處心當りを探させど未だ清吉が在所は判らず、おきくより總ての容子を聞きたる忠兵衛が、定吉に頭に立つものゝ心掛けを諭せども却つて主に楯つく不忠者。

お役人が見へましたと丁稚長太が報らせに忠兵衛が、恐るゝ怖きの色漂よはせて役人より何やらん聞入る状態を、おきくは心もそゝるにお春に糺せば、

「詳しいことは判りまへんが、昨夜北濱で何やしやはつたとかで、今お奉行所の役人が來てはりますのぞす」「え、清吉どんが……」

おきくは今はどうする術もなくそのまゝわつと泣き伏しぬ。

やがて「殿さん」と呼び聲して呼ぶものありけるに、惘然として四邊を見廻すに、納屋の一隅なる材木の後より葦を被りたる清吉が姿を現はしければ、思はず「おゝ」と寄

らんとせしを「叱ッ」と制する清吉が眼の涙さ、四邊を窺ひ矢庭に清吉の傍により「清吉どん、あんたは……あんたは……」と取り纏りて泣くも憐れにて「勘忍しとくれやす、清吉は二度とお店の敷居踏げぬ身になつて仕舞ひました、たつた一目嬢さんに逢ひたいと思ふて昨夜から……それでも思ひが届いて、もう何も思ひ残す事はおまへん」と、今は張りつめた心もゆるみ男泣きに泣き入れれば「そんな悲しいこと云はんとおいとくなはれ、それより清吉どん、あんたどないしなはつた、えどないしなはつたんえ」と氣遣し氣に問ふおきくにも何事も秘すべき時ではなし「昨夜築地で……築地で……それも元はと云ふたら定吉が悪いのだす、三造かて、さうだす、三造が悪い、彼奴が私をこんなことにして仕舞ひ居つたのだす」「三造て三造て誰のこと、え、誰だんね」と清吉が逆上の言葉を不審れば「あゝまるで夢のやうな、云はうにも云はれへん、嬢さん、勘忍しとくれやす」とおきくを引寄せて共泣きに咽び居たり。誰やら人の氣勢に清吉が「おゝ誰や人が……と素

早く材木の蔭に身を忍ばせば、嬢さんえらいことだつせ、清吉が昨夜築地で人殺しをしました」と大聲に云ひながら定吉が入り來れば「え、清、清吉が……」と驚くも道理なりおきくが驚きの胸痛め、その場に泣伏し居るを小氣味よく、尙もいろ／＼恐怖らせの數々に材木の蔭にて聞きある清吉が、元の恨は此の定吉と、夢中其場に躍り出せば「われは清吉」と流石に惘然としたるなり「昨夜の返報や、覺悟さらせ」と懐中に忍ばせたるさすがを取出して突きかゝるにぞ驚いた定吉が、人殺しと叫んで隙を窺ひ逃げ出だせしは残念なり。

氣味悪きまでに沈着たる清吉が入口の戸を閉して懸金を掛け、すぐにおきくの傍に寄り「清吉は人殺しの科人だす、まだその上に人殺し大盗人の子に生れた賤しい素性の人間だす、けれども素性が何や、清吉は世間の奴等のやうに悪いことも道ならぬこともした事はない、それに世間の人間は誰も彼れも皆此の清吉を世の中からほり出さうとしくさるのや嬢さんかてやつぱり……」「えッ」「かう

開いたら愛想がつかますやろ、いえ清吉をおそろしい人間と思ひなはるやろ、欺したと思ふて怨みなはるやろ」

激しい心の衝動にしばし、物も得云はで泣沈みたるおきくが突如清吉が手に纏りつき、「清吉どん、人殺しかて、素性がどないかて私へ」と跡は涙に掻き消されたり。

「え、ほんまだつか」「死んでも心變らへん」「では私と一緒に死んどくなはれ」と堅く抱きしめるにぞ「清吉どん」と今は身も心も、清吉が胸に投げて咽び泣く。やがて大勢の人の聲聞へければ、最早一切の終る時ぞとおきくを引寄せれば、おきくも充分覺悟の體にて、清吉に身を任せり。表口の戸を押開けんとひしめく人の氣配を聞きつゝ持ちたるさすがにておきくが咽喉を一抉り、返す刃で清吉がおがのどを掻き切りたり。

若き男女の心中沙汰が其後如何に喧傳されしかは知らず、されど彼の清吉こそ宿命的な呪はれし運命を持ちし若者とや云はん。

—をばり—

角座九月興行上演

戯曲 さ ん の 一幕

段 春 人

人

小田百合子

カフエーの女給

お仙

百合子の母親

青柳みどり

キネマ女優

はつ子

女給

光子

同

葉山貞二

キネマ監督

岡田泰雄

常連の客

大島京吾

岡田の友人

清川

カフエーのコック

その他、女將、女給二三、學生風の客甲乙

時 現代

處 ある都會

第一場

舞臺上手奥に二階食堂への上り口、カーテン垂る、その前方にコック場への扉口その間に酒場ありて棚に酒壺多く並べあり、下手奥は出入口ピンク色の（或は淡緑色の）カーテンを垂る、正面に化粧臺油絵の額面が壁にかゝつてゐる又音楽會のピラを吊る、観葉植物の鉢二ツ三ツ卓と椅子はよきところに置かれてゐる——稍々感じのよきカフエーの内部である。

午頃

椅子は卓の上に載つてゐる。

女給百合子、初子、その他掃除をしてゐる。

皆エプロン無しで平常着を着てゐる。

はつ子、頭目氣取りで第一番に椅子へドッカと腰を下ろす。

はつ子 やれ／＼あたしは何よりもこのお掃除は嫌ひよ

店のお掃除があるので毎日二三時間位ひび、寝る時間を損してゐるのだもの……

女給一 ホホ、、あたしはまた、お掃除よりも何よりも酔つばらひのお客様のテーブルを持つた時が一

等いやだわ、怖くつて……

はつ子 酔つばらひのお客なんかい、加減に誤間化しときやい、んだわ、この阿呆奴、なけ無しの金でたまにお酒を飲んで熱を吹いてる、可愛さうな男だ

！ さう思つてりやア腹も立たないから。

女給二 ホホ、、あたしなんか少し大きな聲で怒鳴られると慌て、仕舞つて丸つきり駄目ですの、ゆう

べも岡田さんが……

はつ子 さう／＼、ゆうべは岡田さん大變な勢ひだったわねえ、でもあの方なか／＼親切ない、人よ、そして随分お金持なんだわ、岡田さんのお宅はソリヤ大きいのよ華族様に親類があつて、今行つていらつしやる會社でも、岡田さんのお父様が社長さんなんだから、そのうち岡田さんが社長になる人だつて。

女給一 ヘエ、えらいのねえ。

同二 でも、岡田さんは勉強が出来ないので大學も中途

でよしたのですつてね、不良學生で有名だったんだつてお友達の大島さんが云つてらしたわ。

はつ子 だつて兎に角大學校まで行つたんだし、それに

お金持の坊つちやんだもの、同じ不良でも喧嘩をして喰込けをするやうなベイ／＼の不良少年とはタチが違ふは、第一今時牛眞面にしてゐる人は大抵ボンクラよ、そんな人あたし大嫌ひ。

女給一 あたしもそんな人嫌ひよ。

はつ子 孝行娘だの模範青年だのつて云ふのは何も出来ぬ愚圖の甲斐性なしにきまつてるわ、考へて見てももうジメ／＼して陰氣臭くて時代遅れの感じがするぢやアないの。

はつ子デロリと百合子を見る。  
百合子話に加はらず賦々として化粧臺の鏡を拭いてゐる。

女給二 ホホ、、本當ねえ。

はつ子 若い時は何でも若々しい氣持で出来るだけ青春を享樂しなきやアいけないつて此の間岡田さんや三輪さん達が云つてたわ、實際さうよ、活動寫眞一つ見に行かず、ロクに着物も着ない誰かさんのやうに節儉ばかりしてゐるとお仕舞ひに人間の干物が出来あがることよホホ、、

物が出来あがることよホホ、、

女給一 お金をためて今に銀行を建てるのですつてね、

ホホ、、、

はつ子 そんならもつと手つ取り早く、チャブ屋の姐さんかお婆さんにでもなればいゝんだわ。

女給二 孝行娘の評判をとつて、それを賣物にキネマへでも這入る算段かも知れなくつてよ。

はつ子 この頃は喰はせ者が多いから實に慨嘆の至りです。ホホ、、、

三人笑ひながら、百合子の方を注視する。

百合子素知らぬ風でバアの臺を拭いたりしてゐる

はつ子 (意地悪い調子で百合子に) 百合ちやん。

百合子 (つとめて平氣に) なアに？

はつ子 そこは、もうちやアんとあたしがさつき拭いたのよ、あたしの掃除の仕様がいけなかつたら御免なさい！

百合子 あら、あたし氣がつかなかつたものだから……

はつ子 おかみさんの代理に、あたし達の掃除の小言を云ふつもりなの？

百合子 あら、そんなこと……

はつ子 それとも、おかみさんがお湯から歸つて來る時分だと思つて、あたし一人で二人分働いてますつて云ふところを見せるつもりなんでせう。

女給一 きつとさうよ。

女給二 憎くらしいわねえ。

百合子 ……(黙つてその邊を片づけてゐる)

はつ子 そこもあたしがしたところよ。

百合子 さうですか、すみません。

はつ子 百合ちやん

百合子 え、？

はつ子 あんた、怒つたの？ あたし達の話が氣に觸つたら御免よ、あんたは孝行娘の評判で賣素屋さんの親玉だから、あたし達の話を自分の事と思つて腹をお立てかも知れないけれど、これは話よ、百合ちやんと云ふ名前を指して云つてやしないんだからね、何もそんなにブリ／＼してひとの仕事のやり直しをしなくともいゝことよ。

百合子 ……

はつ子 あんたは孝行娘だと云はれてゐるけれど、決してデメ／＼と陰氣ではなくつてよ、なか／＼どうして、とてもモダンガールよ、夕べだつて岡田さんをつかまへて、何か云つてたわね、あのモーシヨン振りなんか素的だつたわ。

女給一 あら、さう、百合ちやんも隅におけないのね。

はつ子 なにを云つてたの、百合ちやん、二階番をいゝことに、ヴェランダのカーテンの蔭で何かボシヤ／＼云つてたわね、隠しても駄目よ、あたしチャ

ンと睨んで置いたから何しろ岡田さんはお金持だし男がいゝし……………

女給二 それに百合ちゃんくつて大變なのほせ方だし……………

はつ子 、あれは違ふわあれは岡田さんの手なんだわ、

人づき合ひがうまいから、あの方は誰にだつてあの調子よ、あたしにもそりやア親切に云ふのよ、

こんどの公休にキネマへ連れて貰ふ約束があるの……………百合ちゃんあんた何とかしやうと思つて岡田

さんを誘惑してゐたんでせう、ゆうべは……………

百合子 あら、嘘よ、岡田さんが話があるからつて仰有つたものだから、何だと思つて行つて見ると……………

……………

はつ子 そしたらどうなのさ。

百合子 何でもなかつたの、たゞ、いやな冗談を……………

はつ子 いやな冗談？ あんたから云つたのでせう。

百合子 あたし、何も云はないわ、それに岡田さんつて

方、どんな方がよく知りませんもの……………

はつ子 いつもいらつしやる御連中の一人ぢやアないの

失禮な口を利くもんぢやアないわ……………おほかた、

おかみさんから着物をきよくつてやかましく云

はれてゐるので、岡田さんがお金持だと聞いて何

とかうまく取入つて一枚買つて貰はうと思つたの

でせう、おとなしさうな顔をしてゐて随分圖々しいのねエ。

女給二 さうかも知れないわ、この間岡田さんさう云つ

てたのよ、百合ちゃんにいゝ、着物を着せたら、何處へ連れてつても立派なものだつて。

はつ子 まあそんなことを云つてゐたの、ぢやアきつと

もう誘惑されかゝつてゐるのね、随分だわ、見かけによらぬ凄腕ね二、百合ちゃんは……………（呆れたと云ふ風な顔をする）

百合子 あら、そんなこと……………決してそんなことはあり

ません、あたし、お客さまにものを戴くなんか……………

……………

はつ子 うまく云つてゐるのね、誤魔化さうたつて駄目よ

七年もウエトレスをしてゐるあたしだもの、あんながいくら蔭でコソ／＼してゐても直ぐわかることよ。

この時、女將と女給光子、湯歸へりの様子で、七

少道具や金盃を持つて表から這入つて来る、それ

を見てはつ子及び、女給の一二。慌て、卓にさわ

つたり、椅子を動かしたりする。

百合子うしろ向きで氣がつかない。

女將は三十五六、藝者上りらしい様子があるボン

ヤリしてゐる百合子の方をデロリと見る。



女給達 お歸りなさい。

百合子 お歸りなさいまし。

光子 たゞ今……(その儘、道具を持つて二階の方へ行く)

女將

お前さん達まだ愚圖くしてゐるのね、仕様のない人達だべチクチャとまた活動の役者の噂や何かお喋りしてゐたのでせう、早く身仕舞ひをしなきやア、お客様がいらしたらどうするのよ、みつともないぢやないか……(百合子を意地悪く見て)身じまひと云へ百合ちやん、お前さんところから何か云つて来たからたしかこ間お前さん云つてゐたね、今日とかに新しい着物が仕立上るのだつて出来て来たの？

百合子

(小さい聲で)お母さんが来る筈なんですけど……まだ来ませんの。

女將

まだ？ 大變念入りなのねエ、着物をこしらへたつて云ふのは本當なの？……何も新しいものでなくつてもいゝんだから、月のうちに一度位は變つたのを着なくちやア、かう云ふ人氣商賣では第一お前さんの爲めにもならないよ、他の人達とも釣り合ひが取れないし、店の人氣にもかゝるつて云ふものよ、いくらなんでも素人家のおさんどんぢやアあるまいし……でも、今日出来て来るんだつて云ふからいゝけれど……

云ひながら向ふへ這入る、女給共いゝ氣味と云ふ顔をしてゐる。

電話のベルが鳴る。

女給の一人二階へのカーテンの向ふへ急いで行き

電話にかゝつて直ぐコック場の方へ行つて叫ぶ。

女給二

コックさん、大吉から電話よ、今日の御注文はつて……え、さう、なに？ たん五本とへレーが……え、。

はつ子

さア、それぢやア、あたし達着物を着て來やう百合ちやんはどうせ今日新しいのが出来て来るんださうだからゆつくりでいゝわね、店をお頼みますよ。

百合子一人を残して皆這入る。

後で百合子一人椅子にかけてぼんやりしてゐる。

時々表を注意して見るコック場の扉がそつと開いてコック清川顔を出す。

百合子一人と見て出て來る。

清川 百合ちやん、ひとりかい。

百合子ビツクリして椅子から離れる。

清川

なにもさう怖さうにしなくつてもいゝぢやないかまだお客も來なからう、さうビクくしないでお話よ、またこれが(と小指を示して)噓しく云つてゐたね、フン手前がこしらへて呉れてやるでもな

いに、着物くつて、百合ちゃん、お前もつらいだらう。

百合と あたしが甲斐性が無いから……………

清川 心配しなくてもいゝよ、こんなところで働いてるなア、皆てんでの懐中勘定でやつてるんだ、思ふやうに着物なんぞが出来る位なら誰も好き好んで女給なんぞにやアならねエ道理よ、いゝよ、俺がついてるから、これや(と又小指を出して)他のお茶びい共が愚圖々々云つたつて平氣でゐるんだまかり間違やア俺がまたいゝ店へ世話してやるよ俺だつて元は濱のホテルで腕をふるつてゐたんだこんなケチ臭いとこでどぐろを巻いてるなア氣が利かねエ話だから、何とかしやうと思つてるんだがね。

百合子 ……(清川が喋りながら傍へ寄るので、段々、氣味悪さうに離れる)

清川 これでも獨立してカフェエかバアをやらうと思へば、資本を出して呉れるヒイキ筋も無いことはないんだから譯はないんだ。ところで、百合ちゃんこの間云つた話はどうだいもう返辭を聞かせて呉れてもいゝだらう、あれ以來ちつともコツク場へ寄りつかねエやうだが、もう考へも決まつたらうな。

百合子 あんなことはあたし、なにも考へてゐないわ。

清川 考へてゐない？ ぢや俺の云ふことを不承知だと云ふのかい、さうぢやなからうな、おい百合ちゃん(手を握らうとする)

百合子 もう、冗談はよして下さい。(清川から逃げる)

清川 お前、それでいゝのかい、よく考へて見るが、いゝぜ、女給なんかしてるとそりやお客がいろゝの事を云ふもんだけれど、それを眞に受けて何とか思つたつて駄目な話だぜ、客つて奴はメニユの料理を注文するやうに、新しい女と見るとちよいと喰つて見たい氣がするもんだから、何とか云ふのだよ、そんな手にかゝつて馬鹿を見るのがザラにある、それよりも俺やア本氣で云つてるんだ、近い内に獨立してカフェエをやらうと思つてるんだから、さうなりやア、早速お前はそこのお女將さんよ、エバツたもんだ、な。

清川 また百合子に近づく。

百合子 (逃げながら) あたし、カフェエなんか嫌ひだわ。

清川 カフェエがいやならバアをやるさ。

百合子 そんなもの、皆嫌ひよ。

清川 そんな商賣が厭ならせすともいゝや、俺と一緒にさへなつてくれりや。

百合子 なほのこと厭やだわよ。

清川 なに、厭やだ？ おい、それは本気で云ふのかい！

清川 百合子に迫らうとする、百合子卓を廻つて逃げる。清川椅子につまづいて倒れる。

清川 畜生ッ！

百合子、表の方へ逃げる。それを追ひすがらうとする清川。

常連の客岡田這入つて来る、危ふく清川とぶつからうとする五ひに『ヤッ』と驚く。

清川 あ、岡田さんでしたか。

清川 氣まり悪るげにマゴツイでペコ／＼する。

岡田 (モダンボーイ式の洋服男、二十七八) なにをバタ／＼やつてたんだい。

清川 へへ、ま、いらつしやいまし、大變今日は早いですね。

岡田 (怪しむやうな調子、百合子を見る) なにがあつたの、百合ちゃん。

清川 なにね、いま、とてもでつかい鼠が、そのコック場から飛び出しやがつたんださ(とキョロ／＼其處等を見廻して)とう／＼遊がして仕舞つた、チヨッ 糞いま、く／＼しいー

岡田 鼠？ なアんだ、僕はまた、コック場にブラ下つてゐる豚肉が活きかへつて飛び出したのかと思つ

たアハハ、

清川 冗談ぢやありません、ハハ、

岡田 百合ちゃん、ゆうべはどうも大分僕酔つぱらつてゐたらしいね、失敬した。

卓の一ツに凭る

百合子 いらつしやいまし。

岡田 あ、疲れた、朝ツバラから歩き廻つて咽喉が涸いてやり切れない、君、ビールを呉れ給へ。

百合子 はい。

百合子ビールの壘とグラスを運ぶ。

清川 (いま／＼しきうにしてゐたが、岡田に) 朝からどちらへ、おいでになりました……？

岡田 (百合子に聞えよがしで) キネマのロケーションを観に行つたんだ。

清川 へエ、そりやア。

岡田 ロケーションつて何だか知つてゐるかい？

清川 勿論、そりや外國の活動寫真でせう。

岡田 勿論、違ふよ、日本の活動を撮影することなんだ野外撮影だ、知りあひのスターからやかましく云はれてね、たう／＼今日は珍らしく朝起きさせられちやつたハハ、

清川 へい、左様ですか………

岡田 (百合子に) 皆はどうしたの、君一人？

百合子 今、皆さん身じまひをしますの。

岡田 どうもゆうべは失敬した、酔っぱらつて、君を困らしやアしなかつたかと、それが心配で……君、

清川君、何か軽いものを一ト皿こさへて呉れないか、少々腹がへつた、それからパンを焼いて呉れ給へ。

清川 へい。

清川、澁々コック場へ引返す。

岡田 (追ひかけて) それからトマトさらだをね、パンはいつもの通りバタをうんとつけて……

清川 へい、畏りました。(引込む)

岡田 清川の奴、ヘンにほんやりしてやがる……百合ちゃん、君はキネマのロケーション見た事があるかい。

百合子 い、え。

岡田 一遍見て御覽、とても面白いよ、あのラブシーンなんか映畫で見ると、愛人同志と二人きりで、頗る甘い氣分をそゝるけれど、けれどあれが周圍に何十人と云ふ見物や何かに取りまかれてゐるて、撮影機がガラ／＼廻つてゐるし、監督がメガホンで怒鳴つてゐるし、實に滑稽だよ。

百合子 よくそれであんなにうまく芝居が出来るもんですわね。

岡田 うん、今日は日東キネマのスターで有名な青柳みどりのロケーションを観に行つたのさ、ラブシーンなんか素的だつた、青柳みどり知つてゐる……?

百合子 え、有名なので名前だけは知つてますわ、折が無くして寫眞はまだ見ないけれど……

岡田 (椅子を百合子の方へづらして) それはさうと、ゆうべ後では、つちやん達が何か云はなかつたかい。

百合子 はつ子さんが? い、え別に……

岡田 さうかい……君と二人仲よく話してゐたのを見つけてヘンに當てこすりを云つてたから……

百合子……(そろ／＼岡田の傍から離れる)

岡田 それで、ゆうべも一寸云つてた通りだがね、僕本當に心から君を……

コック場の方からけた、ましくベルが鳴る、百合子といとコック場へ行く。

岡田ボカンとしてゐる、百合子洋食の皿を持つて出て来る。

岡田 ……それで決して一時の出來心でこんな事を云ふてるのぢやないからね、そりやア百合ちゃん僕を、かう云ふカフェーへ入りびたつてゐる男だと思つて信用しないかも知れないが、實に眞剣な氣持で云ふのだ、え、百合ちゃん、僕は……(百合子

に寄らうとする。

またベルが鳴る。

百合子 コック場へ行く。

岡田 (いまくしきうに) チョッー 清川の奴やいてやがるんだな。

百合子 パンの皿を運ぶ。

岡田 (いらくして) ね、もう、僕の心持は知つてくれてゐるだらう、幸ひ今誰もゐないから丁度い、折だ君の心持を聞かせて呉れ給へ君の希望や要求はどんなことでも僕は容れるつもりだ……百合ちゃん、どうなのだ、今まで何度も手紙に書いた通り眞面目に僕は云つてゐるのだよ誤解しないやうにね、もう僕はいつまでも愚圖々々して辛抱してゐられなくなつたのだ、苦しくなつて來たのだ、イエスカノーか、直接君の口から聞かなくては……百合ちゃん、何とか返辭をしてくれ、僕は、僕は………

岡田 近づき、百合子の手を執らんとする。

又ベルけたゝましく鳴る。

百合子、岡田の手を逃がれて、コック場へ行く

岡田 (イラくして) え、氣の利かないコックの莫迦野郎め!

百合子、トマトサラダの皿を持つて來る。

岡田 又テーブルにつく、百合子に話しかけやうとする、百合子卓を離れて、藥味藁を持つて來たり、又アイスウオーターを持つて來たりする。岡田仕方なしに糞入を出してシガレットを一本口にくはへる。

百合子 マツチを磨つて火をつけてやる。

岡田 (うれしさうにして、糞をつき出し、百合子のマツチの火をつけやうとして、ワザとちらす、火が消へる) あ、消えちやつた。

百合子 御免なさい。

又マツチを磨る。

今度は岡田がワザと吹き消す。

百合子 岡田の顔を見てマツチを卓上に置く。

岡田 ハハ、怒つたの、百合ちゃんちよつと西洋のキネマの眞似がして見たかつたのさ、失敬々々。

自分でマツチを磨る。

岡田 とに角、今度一遍ゆつくり話したいね、君のこの次ぎの公休日はいつなんだい、え。

百合子 公休にはあたし、うちへ歸つてお母さんの手傳ひをしなきゃなりませんから………

岡田 それぢやア僕、お母さんにも一遍逢はう……(ポケットから指環サックを取り出して) 百合ちゃん君に貰つて欲しいものがあるのだがね、ちよつと……

へおいでよ。

百合子 ……(黙つて動かうとしない)

岡田は立つて百合子の近くの椅子へかける。

岡田 僕わざわざ君のために買つて来たのさ、君のその白い恰好のいゝ指にはめて貰はうと思つてね、たしかに適ふ筈だが、一寸手を出して御覽……………

(百合子の手を握る、百合子強く手を振り離して椅子から立つ。)

百合子 あたし、もう澤山!

岡田 嘘ぢやないんだぜ、本當にやるつて云つてるんぢやないか、え、百合ちゃん!

云ひながら百合子に近づく。  
百合子逃げる。

百合子 あたし、本當にもう澤山なの、いらなんですの。

コック場から清川首を出す。

清川 百合ちゃん! 魚宗へ、電話をかけてくれないか!

岡田びつくりして卓の方へひつ返しテレ隠しにハ  
ンケチを出して口を拭いたりする。

百合子 はい、何んて?

清川、今日は車エドがあるかつて、あつたら少し持つて来て呉れつて(デロく岡田の方を見て)……………岡田

さん、今、何かバタ／＼音がしてゐましたが、また溝鼠ぢやアありませんか。

岡田 いや、鼠なんか出ないよ。(料理を喰ふ)

清川 さうですか、何しろこの頃は食べものがあるの  
で、鼠の畜生イヤにうろ／＼しやがる……………

清川引つ込む。

岡田 ぼんやりし無意識に指環のサツクを卓上に置き、料理を一口口食ふ。

女給光子、はつ子派手な着物を着て、エプロンをかけ出て来る。

はつ子、光子 (同時に) あら岡田さん、いらつしやい!

岡田 (元氣のない聲で) 今日は……………

はつ子 (媚を含んで、馴れ／＼しく寄つて来る) まあ、随分早いね、どこかへいらつしやるの。

岡田 なアに今行つて来たんだ、例の日東キネマの青柳みどりにやかましく勧められてね、ロケーションの模様を見に行つたんだよ。

はつ子 あらさう、いゝわね、あたしも一遍ロケーションのところ見たいわ。

光子 面白いでせうね。

岡田 うん、なか／＼面白いよ、青柳は矢張り芝居はうまいねエ、一緒に話し込んだり冗談を云ひ合つたりしてゐると當り前の娘だが……………



この時、岡田の連中の一人、大島這入つて来る。

光子 いらつしやい。

はつ子 あら大島さん、この間は……………

大島 やアこの間は、あれからどうしたの？

はつ子 あれからキネマ館へ廻つて寫眞を見に来ましたの、そりや面白かつたわ。

大島 (岡田に) やア、早いな、どこへ。

はつ子 岡田さんは青柳みどりのロケーションを見て来たんですつて。

大島 青柳のさうかい、そりやアい、な、何故僕を誘つて呉れなかつたんだい、一遍青柳に紹介して呉れる約束だつたぢやないか。

岡田 うん、そのうち紹介しやう 今日突然青柳から是非見に来て呉れつて電話がか、つて来たもんだから……………

はつ子 あたしも一遍連れてゐつて頂戴な一遍撮影のところが見たいと思つてますの。

岡田 ハハ、、女連れと行つちやアことだ、青柳に文句を云はれるもの……………

はつ子 まア、御挨拶だこと。

光子 どうも御馳走さま! (同時に)

大島 おい、い、かい、今日のこの御勘定は文句無しに君が引受けるだらうね、百合ちゃん、今日は、

早速だがグラスを一ツ持つて来てくれ給へ。

百合子 あら、いらつしやいまし。

百合子、グラスを持つて来て、ビールを注ぐ。

岡田 ハハ、、そいつはひどい、何もこつちで思召がある譯でもなし、向ふが心易くして来るものだから……………

岡田絶へず百合子に唾をつけてゐる。

光子 おうやおや大變ねえ。

大島 ますく怪しからん!

はつ子 岡田さん、一遍青柳さんをうちへ連れていらつしやいよ、あたし寫眞ばかりで御本人を知らないんですもの、ねえ光ちゃん。

光子 さうよ、ねえ、本當に一遍一緒にいらつしやいなおのろげばかり聞いてゐて、實物を見せないつて法はないわよ……………

岡田 あ、そのうち一遍連れて來やう、僕がさう云へば何時でもやつて来るから……………キネマ女優なんて威張つてゐても、パトロンあつての人氣なんだからね、パトロンだけは大事にするよ。

はつ子 すると岡田さんは青柳みどりの大事なパトロンね。

岡田 ハハ、、それほどでもないが……………  
はつ子 (不圖卓上の指環のサツクを見て取りあげる) お

や、この指環どうしたの、岡田さん、誰にあげる指環なんですの。

光子 あら、いゝのねエ、石入りね。

岡田 (慌てゝ取り返さうとする) あ、それは、その、ちよつとお返しよ。

はつ子 見せて頂戴よ、いゝ指環だこと(自分の指にはめて見る)ね、ちよいと、あたしに似合ふわね、岡田さん、これ誰に持つてつてあげるの、?

岡田 僕の好きな人のためにこさへさせたんだけれど。

と云つて岡田、百合子の顔をのそき込む。

この時、表に百合子の母親お仙そつと内部を覗きこみ、百合子と視線を交はして手招きする。

百合子のうなづく。

岡田 (百合子うなづくのを、自分にたと早合點して喜ぶ)なに、あゝさうか、よし、また邪魔の無い時にね、(時計を出して見て)や、時間だ、一寸行つて来やう。

岡田立上る。

大島 これから何處へ……? 會社へ行くのかい。

はつ子 もうお歸り、?

岡田 社は病氣つて事にしてあるのだがね、ちよいと人に逢ふ約束があるんだ、待たしては可哀さうだから……

光子 相手は誰方なの……? どうせ女の方なんでせう

少し位待たした方がいゝぢやありませんか。

岡田 自分の身になつて見るがいゝ、そんな意地の悪いことを云つて。

はつ子 あらッ……ぢやア矢ッ張り女の方なんだわ、まア……

岡田 嘘だよ、百合ちゃん、お勤定は……?

光子 はい、あたしの係りよ、でもまた、晩にいらつしやるのでせう、一緒でいゝわ。

岡田 さア、ではまた晩に……

大島 それぢやア僕もそこまで一緒に行かう、なに心配することは無い、逢引の邪魔なんかしないから、ハハ、ハハ、二人出口へ行く。

はつ子 本當に一遍青柳さんを連れていらつしやいな、ね。

光子 有難うございます。

百合子 有難ういます。

岡田達「左様なら」と云ひつゝ、出やうとして、

お仙と顔見合す、お仙一寸會釋して、コソ、コソと向ふへ這入る。

岡田 (怪訝さうな顔をして)あれはなんだ、ヘンな婆さんが覗いてゐたよ、物貰ひかな……

大島 さうかも知れない……

百合子ドギツとした様子で一人扉口の所から表を透して見る、女給達、口々に『左様なら』『有難うございます』といふ。

はつ子 あら、指環を返すのを忘れちゃった(指環をはめてゐる手をふり廻して) あたし貰つて置かう、岡田さんはお金持だし、あたしに指環の一ツ位呉れたつていゝんだわ。

—幕—

## 第二場

舞臺、第一場と同じ。

夕方近い頃。

第一場より遙かに美しく明るく整つてゐる、卓の一ツに學生風の客二人話し込んでゐる。

卓に洋食の皿やカスター等、ソーダ水を飲んでゐる。

女給達は皆綺麗に身じまひをしてエプロンをかけてゐる。

二階の階段から現はれてコック場へ行く女給もある。

その方から蓄音機のダンスミュージックが響いて来る。

はつ子は、化粧臺で顔を直してゐる。

光子はバアのところで夕刊を見てゐる。

客の甲 彼奴は少し頭がどうかしてゐるんだよ、この間も僕が野球へ誘つたんだよ、そしたら、彼奴、野球なんか見て何が面白いんだなんて云ふのさ、呆れもんだ。

同乙 彼奴ならそんなことを云ふかも知れない、今時頭から水をかぶつて勉強するさうだからね、莫迦だよ。

同甲 その癖下宿の娘に惚れて縁日などへお供をして嬉しがつてゐるんだからな、話にならない。

同乙 へえー下宿の娘に？ 美人かい？

同甲 なアに、大した女ぢやない、唯若いだけでちよいと見られる位いなもんだ。

同乙 いくつなんだ。

同甲 さア、まだ十四か十五だらう、お下けにしてゐるんだから。

同乙 そいつア若過ぎらア、下らない。

同甲 ほつ／＼出かけやうか。

同乙 うん、おい、お勘定を。

女給の二 はい、有難う御座います。

學生達勘定して去る。

女給の二 有難うございます。(と口だけで後かたづけをしながら)ふん、人の悪口ばかり云つてゐて、ケチつたらありやしない、チップもおかないんだもの。

はつ子 書生なんか駄目よ、駄ほらばかりで……………

この時、二階から女給の一バタ／＼と降りて来る。

女給の一 百合ちゃん、百合ちゃんは居ないの……………?

光子 百合ちゃんは今奥よ、何なの……………?

女給の一 今二階のお客さまがね、一寸呼んで呉れつて

おつしやるの、ほらこの間見えた物産會社の御連

中よ……………

光子 あ、吉崎さんのお運れの……………

はつ子 百合ちゃんは今奥で女將さんからお小言を頂戴

してゐますつてお云ひよ。

女給一 あら、また……………

はつ子 當り前……………今にも着物が出来るやうに云つて

おきながら相變らずお三どんのような風姿で。

光子 でも可哀さうぢやないの、百合ちゃんのお父さん

がいけない人で折角こさへたのを持つつて仕舞

つたんだつて先刻云つてたわ。

はつ子 そんな事嘘つばちよ、大體ケチなのよ、買へて

も買はずにおいて、お客様に同情して貰つてうま

く取り込まうとずるく考へてゐるのだけ、きつと

さうよ。

光子 まさか、そんな事。

はつ子 い、え、さうよ吉崎さんでも岡田さんでもその  
手でころりと參つてゐるらしいわ、何ぞと云ふと

百合ちゃん／＼つて面白くもない。

この百合子浮かぬ顔で奥から出て来る。

はつ子さすがに駄つて仕舞ふ。

女給一 あ、百合ちゃん、二階のお客様が御用ですと

さ、ちよつと来て頂戴……………(二階へ引返へす)

百合子駄つてついで行く。

女將が出て来る。

女將 今日珍らしくヒマだね(時計を見て)まだ早いけ

れど……………二階は?

光子 お二階にニタ組、初めての方お二人と吉崎さんの

御連中のお三人さん……………

女將 さう……………

二階から拍手の音とワツと云ふ笑聲が聞える。

車夫風の男包みを持つて表扉をあける。

使ひの男 今日……………(と中をのぞき込み)百合子さんて方

おいでですか、お宅から使ひに參りましたが。

女給二 百合ちゃん、ゐますよ。

使ひの男 それでは是を(と風呂敷包を出す)

光子 (二階の方へ)百合ちゃん……………おうちからお使ひよ。

百合子降りて来る。

怪訝さうに使ひの者を見る。

使ひの男 これをお届けするやうにつて、こん中に手紙  
が這入つてゐるさうですから。

百合子 不思議さうに包を請取つて懐中から錢入れを出す。

使ひの男 いや、もう頂いて居りますんで、ぢやアたしかに左様なら。

男出てゆく。

百合子 御苦勞さま……………

女將 おうちからかい、それぢやア矢つ張り出来たのだね。

百合子 さアどうですか……………

包みをあける、中は派手な着物と帯が現はれる。

百合子 急いで手紙の封を切つて讀む。

女將 その着物を手に取つて見る。

はつ子や光子達皆集つて見る。

女將 (急に調子が變つてゐる) まア綺麗な、いゝ柄だこと

ねえ、この色合ひは素的ぢやないの……………

光子 まアいゝわねえ……………

女給連嘆賞の聲を發す。

女將 まア、帶も、安くなかつただらうね、百合ちゃん

これお前さんが買ったの、それともお母さんか柄を立てたの、着物もいゝし、この帶も新しくしてハイカラな柄だわね、どの位ひしたの……………

そんなことを云ひながら見てゐる。

光子 ね、百合ちゃん、早速着て御覽よ、うつるわ、き

つとあたし帯を縮めてあけるから、え。

百合子 え……………ハと氣のない返詞、だが、着物を見て返にうれしさう)

女將 この位ひのものを着てゐる人、たんとないことよ

全く……………百合子ちゃん、さ、直ぐ着て御覽よ、折角お母さんが丹精で仕立あけて届けてお呉れだつたんだから……………

百合子 え……………

光子 さア、早くよ、着換へて見せて頂戴よ。

百合子、女將と光子に促されてやむを得ず女將と光子と共に奥へ這入る。

女給二 まア、本當にいゝ柄だわね、百合ちゃん綺麗

だからきつとよく似合つてよ。

はつ子 だけど、どうしたんだらう。あの仕末屋さんの

……………あれをこしらへる時涙が出るほど辛かつたに違ひないわ。

女給一 百合ちゃんはあれで意地つぱりだから、いよいよ

よこさえる段になると誰よりも上等のものをと思つたのよ、よつほどくやしかつたんだわ。

はつ子 あたし達に當てつけたつもりよ、……………だけど少し變だわ。

女給の二 なにが?

はつ子 だつていつもお母さんが来るのに今日に限つて

車夫さんに持つて来さしたり……ひよつとすると誰かにねだつてこさへて貰つたのかも知れない、きつとこれには秘密があると思ふわ。

この時、女優青柳みどり入り来る。

はつ子 いらつしやいまし。

みどり (卓の一つへ倚り一寸メニューを見て)あの、何か飲みものを下さいな。

はつ子 お飲みものは何に致しませう。

みどり さア何か……レモンスカツシと果物とを。

はつ子 はい、かしこまりました。

みどり あの、こちらに百合子さんて方ゐらつしやつて

？

はつ子 百合ちゃん？ はい、居りますが。

みどり あ、さう、い、え、今呼ばなくてもい、の、ち

よいと電話を拜借……………

はつ子 どうぞ、こちらへ……………

二階の上リ口の電話室へ行く。

その方から電話をかける聲がきこゑる、但し明瞭

でない。

女給二 まア、綺麗な人だことね。

同三 え、女優さんぢやアなくつて？

同二 さうかも知れないわね(卓に近づいて置いてある洋

傘に一寸觸れて見て)ちよいと、これ寶石よ、この

柄の石は、まア素的ねえ。

女給三 さう云へばあたし、どこかで見た顔のやうな気がするわ。(考へる)たしかに何處かで……………

はつ子果物を盛つた皿とレモンスカツシのグラスを運んでくる。

女給二 青柳みどりに似てゐるぢやないこと？

はつ子 いまの人が？ それは違つてよ、青柳みどりは

もつと大柄よ、そしてもつと凄けケンのある眼つきをしてゐるわ、あたしこの間活動を見に行つた

もの、あんな上品な可愛らしい顔ぢやアないわ。

女給二 さうか知ら、でもあたしの持つてゐる、青柳の

ブロマイドに凄いのや上品なのや、可愛らしいの

やいろくあるけれど……………

はつ子 どこかのお嬢さんよ、女優らしくないぢやない

の。

着換した百合子、光子と一緒に出て来る。

見違へるほど綺麗に美しくなつてゐる。女給連口

口に

まア綺麗だこと。

い、わねえ、すい分立派ねえ。

よく似合ふわ。

など、嘆賞する。

はつ子だけ黙つてゐる。

光子 (自分のことのやうにホク／＼して) 本當によくうつるでせう、おかみさんもほめてゐたわ、吉崎さん達に見せてあげたいわ。

百合子 (羞しきうにきまりの悪い表情で) あら……そんな人に人の顔をデロ／＼見るものぢやないわ。

光子 でも矢張りいゝ着物を着ると一倍ひつ立つわね、もと／＼綺麗なんだけれど………

百合子 いやよ……(エプロンをかける)

女給の一 御令嬢と云つた感じね、エプロンをかけるのは惜しいわ。

光子 ね、はつちちゃん、綺麗だわね。

はつ子 さうね、だけど今とても綺麗な方がいらつしたわお客さままで………

卓を指す。

光子 さう、そんな綺麗な人?

はつ子 今電話室!

女給の一 (慌しく電話室の方から出て來る) いまの方ね、女億の青柳みどりよ、電話でさう云つてらしたわ。

女給の三 矢張りさうでせう、あたしたしかにさうだと思つた。

光子 日東キネマの? さう、岡田さんとご一緒ぢやない。

はつ子 一人いらつしたのだけれどそれぢや電話で誰か

と落合ふ譯なのね。

百合子 無關心に化粧臺のところまで一寸自分の姿を映して見て二階へ行かうとする……出合がしらに

青柳みどりが出て來るとバツタリ顔を合す。

双方『まあ』『アラ……』と同時に聲をかける。

みどり 百合子さん、しばらく。

百合子 まあ……文子さん………

みどり びつくりしたでせう、ほ、ほ、ほ、今日道で百合子さんとこの小母さんに遇つたの、そしてすつかり聞いたのよ、本當にすい分御無沙汰して仕舞つて、御免なさいな、ね。(女給連一せいにびつくりして見つめてゐるのを見て無頓着に百合子の手を執つて卓のところへ引つ張つてゆく) あたし、一遍ゆつくり逢ひたかつたのよ、でも、とても忙しくつて………

百合子 まあびつくりしたわ………ひどい方ね、不意にこんなところへ逢ひに來たりして………お母さん話したんですか。

みどり (百合子のエプロン姿を珍らしそらに見て) エ、すつかり聞いちやつたの、そしていろ／＼相談をして……のたし感心しちやつたわ、あなたにこんな勇氣があるとは想像してなかつたもの、えらいわねえ。

百合子 (寂しく微笑して) 變つたでせう……こんな仕事を





みどり (羞しきうにする百合子の様子をちつと見て) その調

子……その調子がいゝの、それで澤山だわ、葉山さんキツと喜ぶわ、ね、是非思切つてあたしの相談に乗つて頂戴、もう直き葉山さんやつて来る筈だから……

百合子 だつて、そんなに急に……お母さんとも相談しなきやアいけないし……

みどり 小母さんには、もう、ちやんと説きつけてあるのよ、いろく／＼今後の相談もしたい……

百合子 (不圖あることを思ひ當る風で) それぢやもうお母さんはあなたはその話しを知つてゐるの。

みどり え、お互ひにうちあけて話しあつたの。

みどりニヤ／＼笑つてゐる。百合子すべてを了解した様子。

百合子 それぢやア……このきもの……

みどり (西洋映畫のやうに指を一本唇に當がつて優しく覗み何も云ふなと合圖する) え、え、決して悪いやうにはしないから安心してあたしに任せて頂戴、子供の時分からの仲よしだもの、ほ、ほ、ずい分、抜目がないでせう……ほら、葉山さんがやつて来た……

監督の葉山三十七八、無造作な洋服姿、のっそり這入つて来る。

葉山 (直ぐみどりの卓へやつて来る) やア、電話をありがたう……

さう云ひつゝ、百合子をる。  
百合子羞しきうに立つ。

みどり(微笑して) 御紹介します、こちらうちの監督さんで葉山さん、この方、あたしの仲よしの小田百合子さん……

葉山 僕葉山、どうぞお心易く……

さう云つて軽く頭を下げて卓越しに百合子の様子に眼をつけてゐる。

みどり 遅かつたわね、またマージヤンをやつてゐたんでせう。

葉山 なアに、大急ぎで飛んで来たんだ、おい君ウキスキーをくれないか……なる程……なアる程……

みどり ほ、まア、葉山さん、失禮ぢやありませんかそんなにお嬢さんの顔を見てゐるもんぢやないわ……

葉山 いや、なには、ご免なさい、つい……

みどり ほ、まア。

葉山 結構です、道は青柳さんのお見立てだけある、是非一つ、われ／＼の仕事を手助けして下さい、會社の方へは僕からうまく話しますから、いや、有難い有難い。

みどり ほ、葉山さんのメンタルテストはパスして

葉山 あ、大丈夫……さうして、たつた一枚エプロン

をつけただけでもうチャンと形がついてゐる、申分なしねえ、お嬢さん、是非入社して下さい、なにむづかしいことはなんにもありません、たゞ監督の云ふ通りに動いて下さればいいのですよ。

みどり キヤメラの前だけはね、そのほかのことは貴方の云ふ通りになつてゐると危険だわよ、ほ、葉山 冗談でせう、は、

この時、岡田が這入つてくる。

はつ子 おや岡田さん、青柳さんが……

岡田 (面喰ひまごゝする、決心して) やア、先刻は……

みどり 葉山さん、貴方この方御存じ?

葉山 (岡田を見て) い、や、知らないよ、青柳さんのお

知り合ひかい?

みどり い、え、私も知らないの、だけどさつき道で話

しかけられて閉口したんだわ、貴方のお友達だとか仰しやつたわ、ホホ、

葉山 本人の僕が知らない友達か、アハハハ、

岡田 (ドモドして) いやどうも (ハンカチを出して汗を拭

き) この前キネマ旬報社の茶話會で一遍お目にかつて……實はその非常に崇拜してゐるもので

すから、あ……とても暑い日だ、はつちやんッ  
ーダ水を一ツ……

葉山は構はず女給に

葉山 こ、は、たしかに二階が食堂だつたね。

光子 え、空いて居りますからどうぞ。

葉山 僕安心したら腹がへつちやつた、みどりさんも、

お嬢さんも二階でゆつくり後の相談をしませうよ  
飯をたべながら(立ちあがる、

みどり え、ぢやア百合子さん、一緒にい、でせう。

みどりと百合子も立あがる。

岡田二階へこつそり行かうと三人の背後を廻りか

けたが、みどりが立上つたのでびつくりしてする

葉山 (二階の上り口からふり返つて) いや、お嬢さん、その

エプロンはもう返してお仕舞ひなさい、もう解り

ました、僕が一遍見て大丈夫と思へば間違ひはあ

りません、大丈夫スターの資格ありますから。

みどり (吹き出して) ほ、葉山さん、あなたも隨

分あはて者ねえ、ほ、ほ、

葉山、岡田、女給達ほかんとしてみどりの高笑を

見つめてゐる、百合子ゆつくりエ、ロンを脱す。

一幕

一周年を迎へて

姥谷生

×

この月で本誌も、何うにか一週  
年を迎へたわけである。おそらく  
『何うにか』といった言葉が、一  
年間の奮闘？をつづけて来た私に  
いちばん適切である。そして少し  
の感慨もないでもないが、最も困  
難な挫折しやすい演劇雑誌を『一  
周年記念号』として出すことの出  
来た喜びは私を泪ぐましくさせる  
これも偏に先輩及讀者諸賢の資と  
して深く感謝する次第である。

×

雑誌を手にする讀者にあつては  
内容の如何と、鑑賞や批評だけで  
わづか一冊の雑誌の重さよりほか  
に感じられないだらうと思ふ。あ  
るひはそれも感じられないかも知  
れないが、雑誌などを編輯する者  
にとつては、一冊の雑誌に發行總

數だけの重味と内容に就ての苦験  
をしみじみと感じさせられる。こ  
れは讀者にとつて迷惑な流言であ  
るかも知れない。勿論、經營者の  
立場にある限り、登れない坂を登  
つて行くやうな努力は、爲さなけ  
ればならない當然の仕事でもある  
が、讀者の期待に背かないことを  
期する上に、微力ながら誠意をも  
つて精進してゐるところを買つて  
戴きたい。そして一層の御愛顧を  
乞ふ次第である。

×

先づ『一周年記念号』でもあり  
何か意義のある記事や、大いに沈  
滞してゐる現劇壇をアツトリビュ  
ウトする評論を載せるプロットも  
立てゝみたのであるが、何分にも  
頼まれる寄稿家にも御迷惑なほど  
旬日が少なく、充分な内容を持つ  
ことが出来なかつたのを遺憾に思

つてゐる。その月の各座の上演狂  
言に因んだ記事を書いて、その月  
の一日初日に間にあはさなければ  
ならないのは一寸むづかしい仕事  
である。しかし額觸だけは蒐めた  
つもりである。全體として内容に  
不備な諸點も多少はあるが辛抱し  
て戴きたい。

×

月刊であるべき本誌が先月、臨  
時休刊したことはお詫びしておき  
たい。例年のとほり夏八月の道頓  
堀は無入芝居でもあり、一寸した  
仕事の都合上もあつたので、勝手  
ながら休ませて貰つたのである。  
これから成るべく休刊しないつも  
りでゐる。そしてやれる間は大き  
に發展したいと思つてゐるから安  
心して戴きたい。毎月のやうに一  
日の發行が遅れるので、何とかし  
たいと思つてゐる。最後に先輩及  
び讀者諸賢の健康と幸福を祈つて  
おく。

昭和二年九月一日發行  
雑誌刊『道頓堀』九月號  
第十二輯

- 誌代は前金でお拂ひを願ひます。
- 郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
- 御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

定價 金參拾錢 (四錢)

昭和二年八月廿七日印刷  
昭和二年九月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹合名社

編輯者 姥谷久一

發行者 鳥江鎮也

大阪市東區籠橋天王寺町五七八五

印刷者 松本米藏

大阪市東區鶴橋大寺町五七八五

印刷所 桃谷印刷株式會社

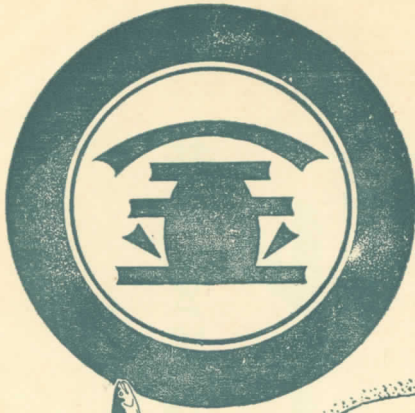
電話南(三三〇六)番  
電話南(三七三二)番

大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 松竹合名社

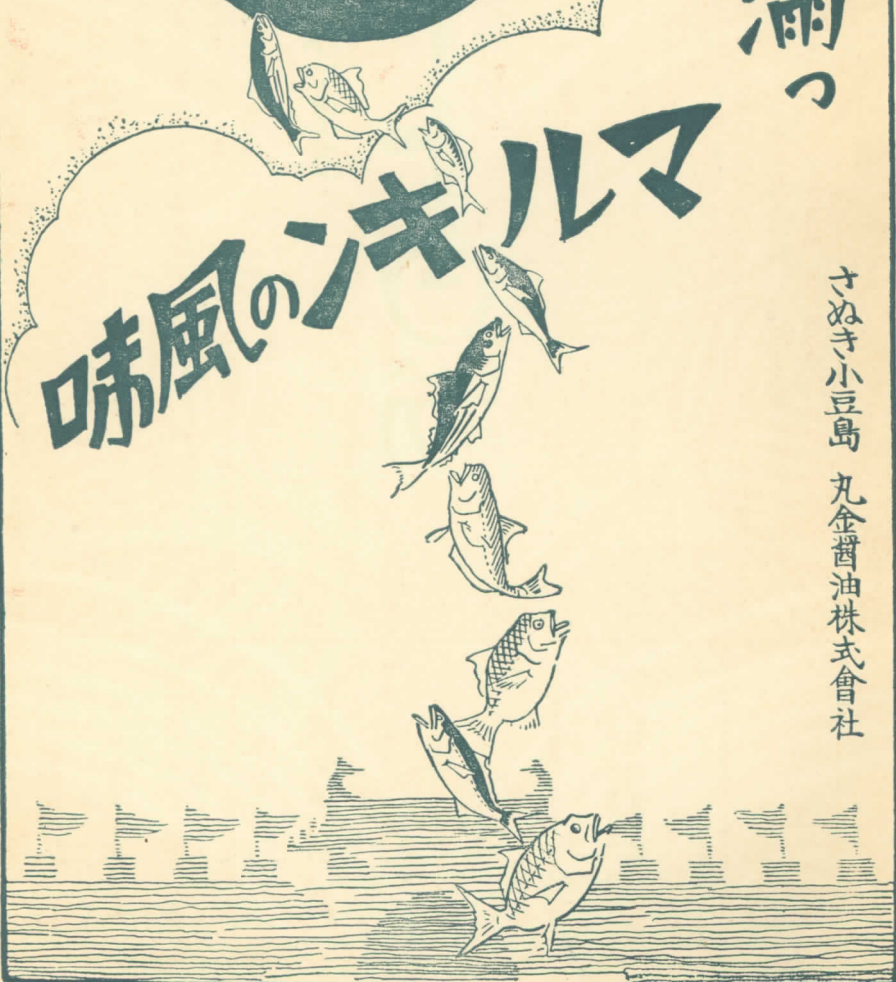
電話(一三四〇)番  
電話(六六六五)番

天地み満つ



味風のキルマ

さぬき小豆島 丸金醤油株式会社



昭和二年八月二十八日印刷  
昭和二年九月一日發行

若く明るく顔になる

# リート白粉

東京大阪平尾積平商店

金參拾錢 (四郵  
錢稅)